桜花忍法帖

バジリスク新章 下

山田正紀
Masaki Yamada

講談社 ライガ

山田正紀　やまだ・まさき

1974年、『神狩り』（早川書房）でデビュー、同作は第６回星雲賞日本短編部門を受賞した。『最後の敵』（徳間書店）で第３回日本ＳＦ大賞を受賞、『ミステリ・オペラ』（早川書房）で第２回本格ミステリ大賞と第55回日本推理作家協会賞を受賞。「神獣聖戦シリーズ」「五感推理シリーズ」など人気作が多数ある。

山田正紀
ヤ A 02
桜花忍法帖
バジリスク新章（下）
講談社 ライガ
Y720

9784062940085
1920193007206
ISBN978-4-06-294008-5
C0193 ¥720E (0)

桜花忍法帖　バジリスク新章（下）
山田正紀

講談社 ライガ
定価：本体720円（税別）

「見事に咲いた花ならば、心おきなく散り候え――」最愛の妹・響と決別した八郎。伊賀と甲賀を率いる若き棟梁達は、もう二度と相見えないはずだった。しかし、一度は退いたはずの異形の忍者集団・成尋衆が徳川二代将軍の死をきっかけに再び現世に現れた。動く城「叢雲」の五層に待ち受ける化物たちを斃し、この世に平穏を取り戻すため、甲賀五宝連と伊賀五花撰は死地へ挑む。

講談社 ライガ

山田正紀の作品

桜花忍法帖　バジリスク新章（上）
桜花忍法帖　バジリスク新章（下）

講談社タイガ

新情報続々更新中!

http://taiga.kodansha.co.jp

Twitter @kodansha_taiga

講談社タイガ創刊!

神におれの術は通用するか。

恋い、死に候え——忍法殺戮合戦、終幕。

講談社タイガ創刊!

Y720

講談社タイガは毎月20日ごろ発売!【全点新作書き下ろし】

12月の好評新刊

青崎有吾
アンデッドガール・マーダーファルス 1

高里椎奈
異端審問ラボ 魔女の事件簿1

西尾維新
べてん師と空気男と美少年

山田正紀
桜花忍法帖 バジリスク新章(下)

桜花忍法帖
バジリスク新章(下)
294008-5

桜花忍法帖
バジリスク新章
（下）
山田正紀

講談社
ノイガ

山田正紀
桜花忍法帖
バジリスク新章
（下）
講談社
ノイガ

桜花忍法帖

バジリスク新章

（下）

山田正紀

講談社
ライガ

原案

『甲賀忍法帖』山田風太郎／講談社文庫
『バジリスク～甲賀忍法帖～（1）～（5）』せがわまさき／講談社

目次

猿の王国……9
鳳輦車「叢雲」……75
桜花、集うべし……109
桜花、咲くべし……143
桜花、散るべし……220

登場人物紹介

徳川　忠長 ―― 二代将軍秀忠の次男。幼名は国千代。駿河大納言。

徳川　家光 ―― 三代将軍。秀忠の長男。幼名は竹千代。

江 ―― 忠長の生母。大御台所。または、江与。

◇新・甲賀五宝連

根来　転寝 ―― 四肢が動かない忍者。「阿修羅」という機械に乗る。

碁石　才蔵 ―― 忍法「百目」の使い手。

甲羅　式部 ―― 「犀防具」で身をかためる忍者。

蜘蛛　七弦 ―― 忍法「松籟」の使い手。

甲賀　八郎 ―― 甲賀五宝連の棟梁。矛眼術の使い手の少年。

◇新・伊賀五花撰

滑婆 ―― 忍法「羽衣」の使い手。

蓮 ―― 滑婆の右腕で、蓮根銃の使い手。

涙 ―― 忍法「胡蝶」の使い手。

現 ―― 忍法「夢寐うつつ」の使い手。

伊賀　響 ―― 伊賀五花撰の棟梁。盾眼術の使い手の少女。

◇成尋五人衆

孔雀　啄 ―― 謎の美少年。忍法「時逆鉾」の使い手。

輪廻　孫六 ―― 忍法「金剛楼閣」の使い手。

涅哩　底王 ―― 忍法「魔獣召喚」の使い手。

夜叉　至 ―― 美女。忍法「宿命通」の使い手。

成尋 ―― 謎の僧。忍法「狂儡」の使い手。

◇忍法僧

皮膚坊 ―― 体幹構造を自在に変化させる剣法の使い手。

守宮坊 ―― 両手に吸盤を持つ。

明滅坊 ―― ハエの目を持ち、常人の十倍の速さで動く。

曾肥坊 ―― 全身のヒフに乳腺を持つ。

◇雨

驟雨 ―― 「雨」のなかの抜刀隊。

霖雨 ―― 「雨」のなかの別働隊。

雷雨 ―― 「雨」のなかの鉄砲隊。

桜花忍法帖　バジリスク新章（下）

イラスト――せがわまさき
デザイン――坂野公一（welle design）

猿の王国

一

寛永八年（一六三一）四月、父の大御所・秀忠（ひでただ）によって、駿河（するが）大納言・忠長（ただなが）は改易を命ぜられ、甲府での蟄居（ちっきょ）を申しわたされた。

――ふるまい凶暴にして、罪なき家士数十人を手討ちにし、そのさま、じつに狂気に似たり。

というのがその理由であったという。

同じ年、秀忠は病床につき、あけて九年（一六三二）、正月二十四日、ついに崩御した。大御所・秀忠の死後、幕府は、その葬儀や供養に明け暮れ、秋まで忙殺されたが、十月

二十日にいたって、将軍・家光は諸大名を召集し、「駿河大納言・忠長を上州高崎に幽閉せしめる」ことを唐突に発した。

蟄居中、忠長は、父の病状を伝え聞き、その病床を見舞うべく、ひそかに甲府を抜け出した。——しかるべき人を介して、見舞いの斡旋を依頼した。結局、それが許されることはなかったのだが。

それが咎められることとなった。

が、事実として、忠長が高崎にて幽閉を申しつけられたのは、それ以前、駿河・遠江国を領していたころの彼の行状に主たる理由がある、とされる説が有力である。

とりわけ問題とされたのは——

寛永七年九月、忠長の命により、領内の各地で大規模な猿狩りが行われたことなのだという。

——駿河大納言忠長卿、ご領内の浅間神社にて、千二百余もの猿を狩りし、殺戮せしめたまう。当・浅間社においては、猿は尊き神獣なれば、これを殺戮せしめるは、むかしより大いに戒しむべきこととされるなり。

神獣とされる猿を、しかも殺生禁断の結界であるべき浅間社において、なぜ村人たちが制止するのも振り払い、あえて狩りたてるの暴挙に出なければならなかったのか？

たしかに、殺生禁断の神獣であれば、年々、増加の一途をたどるばかりではあったろう。飢饉ともなれば、里におりて農作物を荒らす被害も甚大ではあったにちがいない。かてて加えて、忠長には自分が領主であるという絶大なる自負の念があり、それが領内にあるかぎり、よしんば神域とされる地においても、領主の優越権を内外に知らしめる必要があった。

事実、このとき懸命に「猿狩り」を制止しようとする家臣、村人たちに向かって、忠長は敢然とこういい放ったという。

「余はこの国の主である。いかなる神なりとも、わが領地に宮居しめたまわんに、いかで我が命に従いたまわざらん——」

だが、じつは忠長がこうまでして、千二百余匹もの猿を誅せしめたのには、これ以外にも——いや、唯一無二の、譲るべからざる——理由があった。

この世に、それを知っているのはただひとり、甲賀八郎がいるのみであった。

寛永九年満開たる春のこと——。

八郎は忠長のもとに伺候せよ、という内命をひそかに受ける。

甲府に、ではない。忠長の旧領である駿河に呼び寄せられたのだ。

ときに甲賀八郎、数えの十八歳、満の十七歳——。

あの慶長十九年（一六一四）の無残凄惨たる伊賀・甲賀の忍法合戦からすでに十八年が過ぎようとしていた。

二

八郎の肩に桜の花びらが舞う。

家康在城時の駿府城下は、あるいは城を囲み、あるいは安倍川にかけて、いたるところ武家地がひろがっていたのだが……その家康が崩じたいま、それらはすべて「明屋敷」と呼ばれる跡地となって、放置されたままになっている。

屋敷が解体されたあとは、耕作地として貸与されたともいうが、いまはどこにも田を耕す人の姿など見えない。——そんなところにも、現領主、大納言忠長卿のどこか投げやりな治世がうかがえるようである。

春爛漫の桜が、そこかしこ空漠々と花びらを散らすばかりで、どこもかしこもあっけらかんと、ただもうひたすら虚ろなまでに明るいのだった。

その桜吹雪に、全身を薄紅色に染めて、いま甲賀八郎が深編み笠を小脇に持ち、静かに歩を運んでいるのだった。

とある武家屋敷のまえで足をとめる。これもまた明屋敷の一つであるようだ。——崩れかけた築地塀のそこかしこ、桜の枝が塀ごしにさしかかり、あわい紅色の影を落としている。家康が崩じてから、まだ十余年しかたっていないのに、すでに廃墟と化し、歳月のかに立ち腐れの様相を呈している。

薄霞のかかったような春の虚ろな光のなかに、燦、燦、と花が舞う。

その降りしきる花びらを目で追い、それに呼吸をあわせると、

——聞こえるか、八郎。

まるでその花びらが囁きかけてくるかのように虚空にひそひそと声が聞こえた。

「聞こえるよ、根来転寝——」

深編み笠に指をかけて、それをわずかに持ちあげると、八郎はこれもやはり極端に低い声でつぶやいた。

——気をつけろ。結界が張られているようだ。

「結界が？　いや、しかし——」

八郎の「声」にかすかに不審の響きが混じった。

——そうだ、おかしいよ。こんなことがあるものか、ね。結界だけが感じられ、どこにもそれを張る者の気配が感じられないのだからなあ。

「おれたちが未熟ということか」

——それもあるだろうが……どうもそれだけじゃなさそうな。

「要するに、わからぬということか」

——そうだ、わからぬということだ。

「何だ、当てにならぬではないか、根来転寝」

——何をいまさら。いまに始まったことじゃないだろう。

転寝の声が笑いを含んだ。――桜の花びらが、きら、きら舞った。それにあわせるように、根来転寝の笑いもひるがえり、反転し、虚空に舞うかのようだ。

――だが、あの碁石才蔵が「百目」を布石している。知ってのとおり、才蔵もご同様に、あまり当てにならない男だが、あの「百目」だけは頼みとするに足る。いかに優れた術者であろうと、才蔵が布石した「百目」を、人の気配も残さずに、すり抜けることができようとも思われぬのだが。

「陣が張られてるのはまちがいないか」

――ああ、まちがいない。甲羅式部、蜩七弦の二人もいることだしな。さすがにそれだけは間違いない。それなのに人の気配がしない。よくわからんのさ。まあ、よくよく用心することだ。

「そうしよう」八郎はうなずき、「せいぜい用心するさ」

一瞬、周囲に鋭い視線を放ったのち、何事もなかったかのように屋敷門をくぐった。瓦は滑り落ち、壁は崩れ落ち、根太までもがゆるんでいるらしい。――外には絢爛たる花々が咲きみだれ、白光がもえさかっているというのに、屋敷のなかは破れ障子を透かす光も青カビに染まったような色に陰鬱に沈んでいるのだった。

その、奥まった一室の、書院とおぼしき部屋のまえに膝を折ると、

「甲賀八郎、お召しにより、参上つかまつりました」

そう声をかけた。

「うむ、目通り許す、苦しゅうない。入れ」

の声をいただき、戸を開け、なかに膝を進め、平伏する。

なかは予想したよりも明るい。二間四方ほどの狭い書院である。窓から射しこむ日の光のなかに細かい埃が漂っている。その白光のなかに――

墨染めの衣を着た僧頭の若者が端然と座している。膝のうえに網代笠、かたわらに錫杖を置いている。まずは尋常な顔だち、風体であるが、八郎の鋭い目は、その錫杖が仕込みであることを見てとっている。ただの雲水ではありえない。

僧は八郎に会釈をした。

「……」

八郎も会釈を返す。この僧が何者なのか、どうしてここにいるのかは見当もつかない。上座に一人、忠長がぽつねんとすわっている。八郎を見ても、その表情には何の感慨の色も浮かんでこない。――これが幼少のころより、麒麟児と称され、その才気をうたわれた、あの国千代君の成長した姿だと信じられようか。まるで脱け殻のように生気に欠けているのだ。

「お久しゅうございます。駿河大納言様――」

「来てくれたか――大儀である」

「ハッ」

「そこにひかえおるは江戸の南光坊天海の使いの者でな。名を皮膚坊と申す」

「天海大僧正の……」
「皮膚坊でござる」と僧はいんぎんに頭を下げて、「以後、お見知りおきのほどを」
「こちらこそ――」
八郎もあいまいに挨拶をする。
「その皮膚坊が――というより天海が、ではあるが――そちに何としても依頼したき儀があるとのことじゃ。それで、急のことではあったが、そちを召し出した――」
「天海大僧正様が……」
「よろしゅうございましょうか」
皮膚坊は忠長の許しを得たうえで、あらためて八郎に向きなおり、
「なにぶんにも火急のこととて――天海大僧正様のご命を単刀直入に申しあげます。お許しあれ――」
端正なたたずまいである。まだ若いのにその口調は静かに落ち着いている。
「しかるべく――」
八郎は叩頭するしかない。
「甲賀八郎どのはいわば忍者の貴種であらせられる。かの甲賀弦之介、伊賀朧の忘れがたみであられるとか――もともとは甲賀五宝連のうちの一人。それもその恐るべき瞳術をもってして、十六歳となるを待ち、棟梁となるべきを約束された身とお聞き申した。それが、はかなや、五宝連は、伊賀の五花撰ともども、成尋衆なる妖怪たちによって殲滅せしめられたとお聞き申した――」
「……」
「恐るべきは成尋衆――棟梁の成尋以下、孔雀、啄、輪廻孫六、涅哩底王、夜叉至……いずれもこの世のものとも思われぬ忍法、いや、妖術の遣い手とか。徳川のために――いや、天下万民のために、何としても、あやつらを、成尋五人衆を斃さねばならぬ。きゃつら、いずれ、この地上に、血の雨を降らせ、魔風を呼び、屍の山を築くことになるは火を見るよりも明らかでありますれば。――そうなるまえに、何としても、あやつらを斃せ、というのが天海大僧正様のご大命であらせられる。それにはどうしても、甲賀八郎どののお力が必要でありましてな。それに、得べくんば、伊賀響どののお力が――」
「あいや、お待ちを。それがしごときに何ができましょうや。それは伊賀響にしても同じこと――買いかぶりでござりましょう」
「ご謙遜を。何ゆえもって天海大僧正様のご慧眼に誤りがございましょう。――すでに成尋衆は高野山に現れ出たということでございます。なにしろ途方もなく、化け物めいた鳳輦車を高野山に動かしているとの目撃談がありまして」
「鳳輦車？」
「鳳輦」とは天皇が出御なさるときの御輿である。八郎にもそれぐらいの知識はある。
が、鳳輦車とは何だろう？
「鳳輦車などという名称は聞いたことがないか。さもありなん」

忠長は横から口を出して、
「余が、天皇より位階を下賜たまわるために、父上、兄上と上洛したおり、天皇を二条城にお迎えするとて、行列をくり出し、禁裏へとまかりこす運びとあいなった。そのおりにな、兄上ご所有の鳳輦車を見ることとなった。――鳳輦にな、車輪がついているのだ。それもさしわたしが優に三尺あまりもありそうな途方もない大きさの車輪が前後に四輪ついておった。それがな、ひとりでに動くのだ。自在に動く。じつにまか不思議なるものというほかはない」
「……」
「さればこそ、それを鳳輦車の名称で呼ぶのだという。巨大なるものであってな。見事な細工がほどこされておった。それがしずしずと都大路を渡る姿はじつにもって壮麗というほかはなかった。天皇もことのほかお喜びであってな。兄上は大いに面目をほどこしたものよ」
その話を皮膚坊が引きついで、
「このたび、成尋衆が高野山に持ち出したるはその京の鳳輦車の比ではございませぬ。なにぶんにも巨大にして、途方もない代物でございましてな。それに比べれば、まずは京の鳳輦車などおもちゃのようなものとか。もっとも、それがしも実際にそれを目のあたりにしたわけではござらぬが。ところで――」
皮膚坊が膝を乗り出してきて、

「八郎どのには、神君家康公のご遺骸がいずこにオン埋葬なされているのか、ご承知あらせられるか」
意外なことをいった。
「家康公のご遺骸？」
あまりに唐突な話の変わりようで八郎は面食らった。
「駿河久能山の廟所にオン埋葬なされたのち――翌年、オン遺骨をおさめた墓は、金輿にて、日光東照宮に遷座なされた。そのうえで東照宮・奥の院・宝塔の下にオン埋葬なされたと聞きおり申すが――」
「そのとおりでござる。ただ、それ以外に――これはあまり世に知られておらぬことではござるが――家康公は、将来のこととして、高野山にも――日光の東照宮にあらずして――高野山東照宮を建立し、ご遺骨の一部を、そこに埋葬すべし、とのご遺言を下されたよし。すなわち、家康公のご遺骨は高野山に埋葬された、との異説これあり」
「高野山に……」
驚くべきことか。そう、たしかに驚くべきことではあろうが。――
高野山は彼岸と此岸のあわいに横たわる聖域である。ここには現世のことわりなどいっさい通用しない。
とりわけ高野山・奥の院の「聖地」のありようは世界にも例のないものといっていい。
その一の橋から、弘法大師空海のご廟までの半里ほどの参道には、皇室、公家、大名な

ど、多岐にわたる身分の人たちの墓が、敵味方を問わず、無慮二十万基も林立しているのだという。

そこには、じつに真言・高野山にとっては、前世からの仏敵ともいうべき織田信長の墓までがあるのだと聞いた。

よくいえばおおらか、悪くいえば無節操ともいうべき「聖域」ではあるのだ。

仮に、そこに家康公の遺骨がひそかに埋葬されていたからといって、大いにありうることであり、なにも驚天動地のこと、というほどのことではないかもしれない。

しかし——つづく皮膚坊の言葉を聞いて、さすがに八郎は仰天することになる。

皮膚坊はこういったのだ。

「しかるに、近頃しきりに、高野山のしかるべき高僧たちのあいだで、このように奇怪なる風説が囁かれおり申す」

「奇怪なる風説？」

「されば——高野山のご始祖、弘法大師空海様が入定なされてすでに数百年がたち申す。しかるに数百年をへて、弘法大師空海様は、なおも奥の院にて、そのオン魂、オン身を現世に留めおかれるよし。そのことご承知か」

「話だけは——」

いまだに高野山・奥の院では、毎日、その任にある僧侶が、弘法大師空海のもとに食事を運ぶのだという。日々の食事を運ぶというからには、奥の院には、空海の魂ばかりではなしに、現身もとどまっている、ということになろうが。——

「その、奥の院にあらせられる弘法大師空海様が、近いうちに、同じくオン魂を、奥の院の東照宮にとどめおかれる権現、家康公のもとに伺候なされる、との風聞が囁かれおるよしにて——」

「何と申された？　弘法大師空海が家康公のもとに伺候する、と仰せられたか」

「荒唐無稽と思われるか」

「いや……は」

「いかにも左様、されど、それがかならずしも荒唐無稽とばかり笑い捨てられぬのが、頭の痛いところでござりましてな。目にはさやかに見えねども、たしかに奥の院にて、何ものか大いなるものが胎動し、生まれ出る気配が満ちつつある、のだという——そういう証言が、一件のみならず、何件もあり申す」

「何ものか大いなるもの……」

「左様。すなわちこれは、弘法大師空海の伺候を得て、家康公のオン魂が、現身に受肉なされるしるしなのではあるまいか、家康公がこの世に復活なされるしるしなのではあるまいか、との風説にて——」

「……」

「なに、それが雑魚僧の証言なれば、取るにたらぬ風評として捨ておけばよいでござろうが……いずれも世に聞こえたる名僧、高僧たちの証言とあらば、そうもできず、そうもな

らず――この理、おわかりか」
「……」
「天海大僧正様が仰せあるには――」
皮膚坊はさらに膝を進めると、
「大御所・秀忠様がお身罷りになられ一月余、まさにいまこのときこそが公方様の正念場であらせられる。大御所以来の、酒井、土井ら、重臣連との軋轢、いまだおさまらず、家光公の手足たるべき若き出頭人を取りたてようにも、なかなかもって思うにまかせぬ。よりによって、このような切所に――万に一つ、いや、億に一つ、神君のオン魂が、弘法大師空海の伺候を得て、現世に受肉なさるようなことあらば……それが家光公のこれからのオン治世に、どれほどのさわりになるか、混乱きわまり、混沌ふかまって、ついには乱世に舞い戻ることになるは、火を見るよりも明らか――天海大僧正様はそれが恐ろしいと仰せになられる。何としてもそれだけは避けねばならぬと仰せになられる」
「……」
「ちなみに、かのキリシタンの教えによれば、天帝デウスの使徒たるイエスは、地上にて、異端の罪にて処刑され、それが三日の後に、この世に復活したるよし。この復活ありせしがゆえに、その後、イエスは民衆からの絶大なる支持を得、信仰を得たとのことでござる――このように、家康公が復活なされたとあれば、さあ、その権威、権力がどれほど絶大なるものにあいなるか、じつに想像するだに恐ろしい。まずは、ご当代・家光公のそれをはるかにしのぐことにあいなるに相違ないでありましょうほどに――これはいかにもマズい」
「……」
「しかも、それが、あの、何をたくらんでおるのかもわからぬ、妖しいうえにも妖しき成尋衆の仕儀となればなおさらのこと――これは何としても阻止せねばなりますまい」
「……」
「されば、是非もなし。よしや、ご神君・権現様の再誕をさまたげる仕儀にあいなろうとも、不忠不義のそしりを受けることにあいなろうとも、玉石ともにこれを砕きて、家康公には何としても冥界にお戻りいただくのほかはなし――この理、おわかりか」
「つまりは――それがしに弘法大師空海のオン魂が家康公のオン魂に伺候するをさまたげよ、とそう仰せあるか。魔物退治の手伝いをせよ、とそう仰せられるか」
「左様。――聞けば、成尋衆が高野山に動かしおる鳳輦車は、その名も『叢雲』と称するとか。成尋衆がそう公言するのを聞いた者がおるそうな。徳川は三代、家光公の治世にして、ようやく桜花絢爛たる善政を世に敷く下地ができあがった。あとは仕上げの、画竜点睛を入れるのみ、というこの段にいたって――思うに、成尋衆、それに叢雲をかけようとの所存なり、と見もうした」
「……」
「まずは成尋衆の五人が居る。それ以外に、成尋は――『雨』と称する私兵を何十名も擁

してござってな」

「『雨』……」

「左様、これがどこから降ってきた奴ばらなのか見当もつかぬ――かねてより金剛峯寺、根来寺においては、寺敵との合戦におよぶ僧兵を多数抱えおったよしではあるが――きゃつらがそうした僧兵であろうとも思われず……これが、いずれをとっても見るからに剽悍、屈強そうな奴ばらでござってのう。いささか、やっかいな相手ではある」

「……」

「ただ、きゃつらがどうして『雨』と呼ばれるのかというと――もともと成尋、と申さば、もう何百年も昔、宋に渡り、かの国にて、帝の命により、雨乞いの祈禱をし、見事、雨を降らせた高僧のオン名であって。まさかのことに同一人物であろうはずはないが――その高僧がことを思えば、なにやら『雨』の異名にも思い当たるふしがあるようでもあり――これもまた気味が悪い」

「……」

皮膚坊は、されば、と語気をあらためて、

「よしや神君であらせられようと、何で徳川百年の治世をおめおめ邪魔させてなろうものか。徳川幕藩体制は、家康公、秀忠公、家光公、三代公方様のお力のみによって完成されたるにあらず……とこれは天海大僧正様ご自身の言であらせられる。さればによって――われらに、何としても成尋衆を斃せとのご下知を下された」

「失礼ながら、われら、と仰せあるは」

「われら南光坊天海大僧正の直属の忍法僧にてござるよ。こちらには拙僧以外に三名の忍法僧が派遣されており申す」

「忍法僧……」

戦国時代には、埋葬の必要上から、戦場往来自由を許された僧が少なくなかった。そのなかには、当然のことながら、僧形を隠れ蓑にして、ラッパ、スッパをなりわいとする者が少なからずいたという。皮膚坊もその流れをくむ忍法僧であるのだろう。

「もとより天海様のご命とあらば、われらいかようにも身命を賭してのご奉公をいたす所存ではあるが――ふがいないことを申すようであるが、いかにわれらがごときが身命を賭したからというて……成尋衆ほどの相手をみんごと斃せるとの自信はない。さればによって、甲賀八郎どの、伊賀響どのに――」

「お待ちを――伊賀響の儀はそれがしにお尋ねになられてもお答えいたしかねる」

「なぜに？　妹ごでござろうが」

「妹であればなおさらのこと――それがしの儀も、拙者の一存にてはお答えいたしかねる。まずは忠長公にご相談いたしたく……返答するはそれ以降のことにて願いたい」

そこで八郎はにこりと笑って、

「この理、おわかりか」

三

皮膚坊が辞したあと、書院には忠長、八郎の二人だけが残された。

むろん甲府にて蟄居を命ぜられたとはいえ、さらにお忍びでの駿河入りとはいえ、忠長ほどの貴人が単身で行動するはずがない。何十人もの供を引きつれていることはいうまでもない。

別室、内庭には、その供侍たちが刀に反りを打ち、目釘を湿し、鯉口を切り、何人も侍してはいたが、彼らの姿が目につくことはない。

ただ障子を透かす白光のなかに虚ろに桜の花びらが影を舞わせているだけである。

ややあって、忠長がおもむろに口を開いた。その声は表情同様に生気がない。

「もとより、ここだけの話ではあるが……成尋めは、余に、オン兄上に謀反せよ、と焚きつけおった。そればかりではない。余が浅間神社の猿たちを誅するの愚にうって出たのも、成尋から聞かされた言葉ゆえにのことである」

すなわち、成尋はこうした意味のことをいったのだという。

――浅間神社の鎮守の森が忠長の陣に攻め込んでこぬかぎり、忠長の謀反が露になり、それが破れることはない。

と。――

「余は領内を視察するがために浅間神社に陣を張った。もとより、そのときには、浅間神社の鎮守の森が動かぬかぎり余が滅びるにいたることはない、という成尋めの予言など、まるで失念していた。もとより、そのようなこと、あろうはずがないのだからな。それだけに――いざ現実に、鎮守の森が余の陣めがけて押し寄せてくるのを見たときの余の驚きはいかばかりであったか……」

「何と仰せられる？　鎮守の森が押し寄せてきた、と仰せられるのですか」

「いかにも左様――浅間神社の鎮守の森が動いたのだ。余の陣めがけて押し寄せてきたのだ。猿めが――」

「猿？」

「それも数えきれないほどの猿めが――枝を鳴らし、葉を散らし、余の陣に押し寄せてきた。まさしく鎮守の森が動いたかに見えた。それゆえに、余は猿めらを退治することになった。もとより、浅間神社において猿が神獣とされているのを心得てはいたが――それでも退治せずにはいられなかったのだ」

「それゆえをもってして、浅間神社の神獣であるべき猿をお退治になられた、とそのように仰せられるか」

「そうじゃ」

「殿、しかし、それは……」

さすがに八郎は絶句せざるをえない。忠長の言葉をどう理解すればいいのか判断に迷っ

た。——が、それは忠長も同様であるようだった。その表情には混迷の色が濃い。

「成尋はな、あやつは魔物であるわい。甘言を弄し、妖言を巧みにし、人をたぶらかす。のっぴきならない高みにまで追いあげたあげくに、その梯子をあっさりと外しおる。思えば、余は愚かであった。あなた様にはご謀反するだけの力がある、『神』になるだけのご器量があらせられる、などという阿諛追従の言葉に乗せられたために、ハッ、このざまであるわい」

「……」

「八郎、そちにおりいって頼みたき儀がある——」

「はい」

「すぐる寛永三年、母上がお亡くなりになられたあと、余はそのご供養にと、高野山に石塔を寄進することにした——」

これは事実である。いまも高野山には忠長が母の冥福を祈って寄進した石塔が残されている。

「成尋めは、それをどこで聞きおよんだのか、再度、わがまえに現れると、このように申したのだ。すなわち——『石塔だけではなしに、鳳輦車をも寄進なされてはいかが？　そのことお申しつけいただければ、われら、この身を舎利に変えようも、かならずやご満足のいただける鳳輦車を、期日までにご献納いたしましょうほどに。家光公が都大路にてご披露なされたものよりも、何倍も立派なものを拵えて、ご覧にいれましょう。——恐れながら、大納言様には、大井川にて、兄上様のオン為よかれ、と思しめしになられ、浮橋をお造りになられたよし。にもかかわらず、兄上様からきついお叱りを受けられたよし——そのおりの、左様、屈辱をいまもご記憶あらせられましょうか』と……」

「屈辱？　とはまた思い切ったことを——成尋めはそのように申したのでございましょうか」

「うむ、さらに成尋が申すには」

忠長の目は虚ろに虚空に見ひらかれていた。そのビンの毛が逆立っていた。八郎の言葉が耳に入ったのかどうか、ただ熱にうかされたように言葉をつづける。

「——『大納言様はいずれ〝神〟におなりあそばすオン身ではございませぬか。屈辱を受けたるをそのまま捨ておいてよいご身分ではあらせられぬ——』とこうであった」

「恐れながら、忠長様、それは……」

「うむ、いま思えば、挑発であった。余を毒花へと誘う蜜言であった。うかうかそれに乗り、誘い込まれたるは浅はかにすぎた。愚かであった。——したが、成尋からそれを聞いたときには、これで大井川の無念を晴らすことができる、とただそのことをのみ快に思うばかりであったのだ。この機を逃さば、われついに兄に勝利するをあたわず、『神』になるを得ず、とまで思うた。何じょうもって、この好機を逃してなるものか、と——」

「……」

「——さればこそ、成尋に大金をさしつかわし、その鳳輦車なるものを拵えるように命じ

た。そのあとも、いわれるままに何度か鳳輦車を拵えるのに要する費用をさしつかわした。あれから六年――いつしか鳳輦車のことなど思い出すこととてないようになったのだが。――年明けに、高野山より、鳳輦車が完成したとの報が入った。さればとて、いまの幽閉の身たる余に、何ができようものか。いや、それから数日を経ずして、オン父上がご崩御になられたと聞いては、なおさらのこと、何もする気になれぬ。何もできようはずがない」

「……」

「鳳輦車などにかまってはおられぬ。喪に服し、鳳輦車のことは聞きおき、捨ておいたのであるが――つい先日、近いうちに、その鳳輦車が高野山を下り、江戸に向かう運びとあいなった、との報せが余のもとに届いたのじゃ。父上・大御所のオン供養のため――ということであるが、あの成尋めが、なにゆえもって、そのように殊勝な心がけでいようものか。何かある。きゃつめ、きっと何か悪巧みを働かせているのに相違ない。父上の喪中のこのときに、あれを発動させてはならぬ。江戸に向かわせるなどもってのほか――何としてもそれを阻止せねばならぬ」

「……」

忠長はふいに畳を拳で打つと、いまの余が窮状を見よ、と血を吐くように叫んだ。

「――父上の要らざるご不興をかい、兄上の要らざる疑惑をまねき、進むもならず、退くもならず、甲府に蟄居の身とあいなって、かくも無様に立ち往生するはめにあいなった。このうえ、あの鳳輦車が高野山を発ち、江戸に向かったのでは、いかにしても申し開きが立たぬ。謀反を疑われるは必定であろう。思うに、余は魔に魅入られたのであろう」

「……」

「されば、八郎、そちは先ほどの天海僧の使者の皮膚坊の申し出を受け入れるべきではないか。あの者たち、なにぶんにも得体の知れないところはあるが、天海の命を受け、天下の争乱を防がんがために、高野山に赴こうとしているのは、まぎれもなしに事実である。そのうえで成尋五人衆とあい争い、これを殲滅し、鳳輦車を焼き払わんとの所存なりと申す。されば――」

「お断り申す」

声は低い。――しかし、その声音に込められた軽蔑の重い響きは、鞭で打つように、したたか忠長の顔をたたきつけた。ピシリ、と音さえ発したようであった。

「な、何?」

「恐れながら――忠長様、これ以上、われらにお甘えあそばすな。迷惑でござる」

「何? 何? 何と申した?」

「伊賀・甲賀の忍法合戦で、われら甲賀が負けたがゆえに、忠長様は三代将軍にお就きになれなかった。そのことを不甲斐なくも、申し訳なくも思えばこそ、われら甲賀忍群は、忠長様がお命じになるままに、これまで二心なくお仕えしてきたつもりでござる。それもこれもすべて忠長様のオン身の安泰を願えばこそ。――われら甲賀が忍法合戦に敗れたが

ために、万が一にも、忠長様の身に累が及ぶようなことなどあってはならぬ、とそれのみを念じればこそのことでござった――」

八郎は佩刀を手元に引き寄せると礼すらせずにスッと立ち上がった。その氷のように冷たい目にいつにも増して冷たい光が宿っていた。

「それを何をいまさら――いまは知らず、過去に一度なりとも、将軍職に食指を動かし、世に大乱を招きかねぬを承知で、ご謀反をお考えになった、とあっては、われら、このうえ何をすることができましょう。何ゆえもって、われらにこのうえ、お力添えせねばならぬ義理などありましょうや」

八郎の表情には忠長に対する氷のように冷たい侮蔑の色さえあった。路傍の石に対するように冷然といい放った。

「お忘れか。すぐる慶長十九年、われら甲賀、伊賀の精鋭十八人、たかが徳川の世継ぎ争いのために、技と魂を研ぎに研いだその貴重な命を、あたら無駄に散らすことになったのを。――思えば、その一事のみで、われら甲賀の徳川に対する義理は十分に果たした、といえましょう。これ以上の義理だては、甲賀棟梁、甲賀八郎、いたしかねる」

「たかが徳川の世継ぎ争い、と申したか。たかが、と――いま一度申してみよ。その場には捨て置かぬぞ」

「もはや、たかが徳川の世継ぎ争いのために、われら甲賀忍者の命を砥石にかけるはご免こうむる。さらばでござる。駿河大納言・忠長様」

「誰かある」

忠長が悲鳴のような声を発した。

「この者、不忠――成敗せよ」

襖が一気に引き開けられた。

そこに座していた侍が跳ねあがるように体を起こした。

黒豹のように精悍な若者だ。

声にならない気合が空気を引き裂いた。

鯉口を切った右手がしなやかにどこまでも伸びた。左の腰を引き、胸を張って、右の肩を前に突き出した。それだけでもう剣はなかば以上、鞘から放たれている。剣気が迸るままにまかせて一気に鞘走らせる。鞘の摩擦抵抗が剣を加速させる。キーン、と灼熱した鋼音が虚空に鳴り響いた。

鞘はカタパルトで、剣は戦闘機。切っ先が鞘から放たれるのに〇・一秒と要さなかった。鶺鴒が尾を跳ねあげるように、「抜き」の秘術が、ピュッ、と八郎の股間にするどく切り上げられた。

その剣光は目にもとまらぬほどに速かった。薩摩の「薬丸自顕流」！　抜く手も見せずに抜いて、電光石火、一気に上段から「掛かり」、下段から「抜き」払う。相手は切られたとも覚えずに切られている。

考えたり、徳川忠長！　ただ相手を一瞥するだけで自分に向けられた戦意を敵にブーメ

ランのように逆転させる八郎の予眼術。これを発動させぬためには八郎に見る暇を与えぬ一瞬の抜刀術を用いるほかはない。

忠長にしても、まさか八郎が自分の意向に逆らうときがこようなどと予想していたわけではなかったろうが。……八郎ほどの恐ろしい忍者と対面するときにはこれぐらいの用心をしておくのは君主たる者の当然の備えではあったろう。凄まじい抜刀術の遣い手を隣室に待機させておいた。そしていま、その備えがはからずも役に立った。

抜刀術の若き剣士の五体は爆発的に発動した。彼の脳裏にあってはすでに八郎は股間から腹にかけて切り上げられていた。血しぶきをあげて絶命していたはずなのだ。それなのに――。

パッ、と右手首から血煙をあげたのはその若い侍のほうだった。刀を取り落とした。右手首を左手で押さえ、その場にくずおれる。手負いの獣のようにうめきながら、畳の上に突っ伏した。

「おお！」

若侍の背後から声にならないどよめきが起こった。むしろ悲鳴といったほうがいいかもしれない。

若侍の背後には数人の男たちが待機していたのだ。小座敷にびっしり密集していた。殺気が蒸れるほどに充満していた。声は彼らの口から洩れた。

いずれも白襷をかけ、袴を裾くくりにし、草鞋の緒を男結びにかためていた。なかには手甲に、鉢巻き、目庇をつけ、手槍を手挟んでいる者もいた。

彼らは、若侍の抜刀術が首尾よく八郎に手負いをおわせることを確信していたはずだ。そのうえで八郎の体勢が崩れたところを見はからい、全員で一気に襲いかかる。……何があろうとも八郎に誰かを見つめる隙を与えない。彼の瞳術を十分に警戒したうえでの作戦だった。

まさにその作戦どおり、若侍の抜刀術はその剣光をもとらえ得ぬほどの凄まじい速さで、八郎に襲いかかった。若侍は自分の太刀運びの速さに絶対の自信を持っていたはずなのだ。八郎に見られるまえにこれを斬るという鍛練を積んできた。事実、若侍は、八郎に見られるまえに太刀を送った、と確信したのだった。それなのに――八郎の瞳術が魔法のように発動し、若侍の抜刀術は逆に自分の右手首を傷つけることになったのだ。

が、これは若侍が、「見る＝見られる」という行為を誤解していたがゆえの当然の結果であったろう。自分が誰かに「見られた」ということを、人の脳が認識するには、最低でも、マイクロ・セコンドの時間を要するのだという。それに満たない時間、「見られた」のであれば、脳は自分が見られたことを十分に認識しえない。

若侍は、飛燕の速さを誇るおのれの抜刀術をもってすれば、見られるまえに八郎を斃すことができるはずだ、と錯覚した。

これを錯覚というのは――。

たしかに若侍の脳が「見られた」のを認識するまえに、太刀を相手に送ることは可能で

はあるだろう。が、だからといって、八郎の目から発せられた光子が若侍の眼底に届いたという事実に何ら変わりはない。それが眼底細胞を励起させ、その情報が視神経から脳にまで走って、特定の神経細胞ネットワークを発火、発動させた……。

この場合、若侍が、自分が八郎に見られたのを認識しえたかどうかは、その結果に何の違いもおよぼさないはずなのだ。

かくして八郎の矛眼術は発動されたのだった。いつものように——といおうか。

「まだやるつもりか」

八郎の声は低いが、しかし、その底に恐ろしい威嚇の響きを撓めていた。

「やれば、おのれが無駄に傷つくばかりだぞ」

それまで満々の闘志をみなぎらせていた男たちは、頼みにしていた若侍の抜刀術が通用しなかったのを見て、一瞬のうちにその闘志を削がれてしまったようだ。

「……」

八郎にじろりと見られて、怯んで、一斉に後ずさった。なかには、ヒッ、というような悲鳴をあげて、だらしなく畳に尻餅をついてしまった者もいたほどだ。

「この者の手当てを早くすることだ。手当てが遅れれば右手が不自由になってしまうかもしれない。あたら、これほどの剣士が、そうなってしまうのはいかにも惜しい」

そのまま小座敷を抜け、庭に下り、歩き去る八郎を、忠長はただ呆然と見送るばかりであった。

「殿、あの者をこのまま行かせてもよろしいのでござるか。万が一、あの者の口から、殿のオン気持ちが、ば、幕府に知れるようなことになれば——それこそ謹慎ではあい済まぬことになり申すぞ」

そんな忠長の背中を拳で撲つように背後で重臣の声が爆ぜた。

「きゃつめにきっかいなる瞳術があることはわれらも十分に心得ており申す。残念ながら、刀術ではおよびがつかぬことは只今の仕儀にて骨身に染みてあいわかり申した。だからというて、あれをこのまま行かせていい法やある！　こんなこともあろうかと、槍隊、弓隊、鉄砲隊をそれぞれ外に待機させており申す。殿、ご下知を、なにとぞご下知のほどを——」

「うむ」

忠長は無感動にうなずいて、殺せ、とただ一言、みじかく命じた。

ふと、その目が空をさまよった。座敷に舞う一ひらの桜を追うとはなしに追った。

いや、すでにそのときには、その花びらは書院の窓から再び外に出ていたから、いま忠長の目にあるのはその紅色の残像だけであったのだが。……

四

書院窓から座敷に舞い込んだ桜の花びらは、一瞬、部屋にとどまり、漂って、また、ひ

らり、と庭に舞い戻ってきた。

散、散、舞い落ちる花びら群に逆らうように、ふわり、と上昇気流に乗って、築地塀の檜皮葺屋根まで舞いあがり、それを越えた。

さらに宙を舞いながら——

花びらはすべてを見ている。いや……。

「ダメだ、もう見えぬ」

どこからか、そうため息のような声が聞こえてきて——

花びらは力尽きたように地に落ちた。

築地塀の外には、武家屋敷をめぐる三間あまりの道があり、反対側にはやはり長い築地塀がつづいている。

両側の塀の屋根ごしに何本もの桜の枝々が道のうえにさしかかる。それらは隧道のように路上で交叉し、道をあわい紅色の影に染めあげている。

その淡い紅色の影のなかに、それよりわずかに濃い人影が滲んで、それがスッと立ちあがった。

まだ二十歳そこそこの若さなのに、目の細い、眠そうな顔をした、妙に覇気のない男だった。

これは甲賀の碁石才蔵だった。

菅笠に、裾みじかの着物を着て、腰には刀ではなしに鎌をたばさみ、それでもさすがに足は草鞋でかためているが、すねはむきだしのままに春風にさらしている。

地に落ちた花びらを指でつまみ、それをつかのま見つめると、フッ、と息で吹き飛ばして、

「ふん、おれの念もここまでか」とつまらなそうにつぶやいた。「大したことはないなあ」

才蔵は陰気な若者である。このときも陰気に笑った。碁石才蔵の家は代々、「碁」の術で、忍法御用をつかさどってきた。諸国流浪の「碁の師匠」を表向きの顔にして、探索すべき大名領に潜入し、家中出入りの商人、大百姓、家臣、ときに碁自慢の重臣などのもとに出入りし、必要な情報を求める。

が、才蔵の父の代から、「碁」の才に加うるに、碁打ちの念をもののうえに移動させ、碁の「目」を本物の「目」のように移動させる術——むしろ体質、遺伝、といったほうがいいかもしれないが——をもあわせ持つようになった。

その身は一ツところに据えおきながら、「目」だけを自在にもののうえに移し、必要とするものを見る……。

もちろん、どれだけ「目」をおのれから放すことができるのか、無遠大、というわけにはいかないが、それでも自分を中心にして半径六間（十メートル強）ほどの円球を仮想しうることはできるようだ。

特筆すべきは、もののうえに移動させることのできる「目」が、必ずしも一対、二眼のみにとどまらない、ということだ。

幾つもの「目」で同時に、しかも異なる方向、異なる角度、異なる高さから、マルチに「見る」ことができる。——

才蔵はこの複数の「目」を諸方に飛ばす術を、みずから名づけて、

——「百目」。

と呼んでいる。

いま、才蔵は「目」を舞い散る花びらに託し、築地塀の外から、屋敷内の様子をうかがっていたのだった。

むろん、甲賀八郎の身の安全を確保するためである。

いま、八郎は満で十七歳……もうすぐ十八歳になろうとしてはいるが、それでもすでに三十歳を越えている根来転寝はもちろん、それぞれ二十代前半の碁石才蔵、甲羅式部、蜩七弦たちのなかにあっても最若年であることはいうまでもない。

彼らはその最若年の八郎を棟梁にいただいている。

もともと八郎は、甲賀・棟梁たる弾正、弦之介の正嫡である。五宝連が殲滅されたのち、甲賀の長老たちは鳩首協議して、渋々、根来転寝、碁石才蔵、甲羅式部、蜩七弦たち四人を次代の五宝連とし、その棟梁に八郎を選んだ。

八郎が忠長に召されたとあれば、彼ら四人、それに同行し、八郎を警護するのは当然のことであった。

才蔵が塀の外から忍法「百目」を発動し、屋敷内の様子をうかがっていたのは、そんな

理由からなのだった。

八郎が明屋敷から出てきた……。

「……」

八郎は才蔵にチラリと視線を送ってきたようだ。が、何も見なかったように、そのまま静かに立ち去っていく。その背中に春の陽炎が燃えあがり、花、花、花、花、花、が戯れるように乱れ舞う。

と、そのとき——。

塀の檜皮葺屋根のうえに人影が動いた。討っ手の一人か。屈強な壮年の男だ。屋根のうえを——足裏に目があるがごとく——吸いつくように敏捷に移動した。裾くくりに、上半身はだか——短槍を持っている。立ちどまり、存分に足場をかためた。それまでほんの五、六秒。——上半身を反らし、短槍を頭上にかざす。その穂に光が走る。投げるつもりだ。

男のはだかの体に金剛力士のように筋肉が膨れあがった。その右腕の二頭筋が太い縄をよりあわせるように浮きあがる。

「——」

肩の斜め後ろに振りあげた右腕が前方に弧をえがいた。上腕筋から腕橈骨筋にかけて稲妻のように力が走る。まさに、その力線の先に八郎の後ろ姿があった。

短槍が右手から放たれる瞬間——

才蔵が「百目」を発動させたのだった。
そのとき才蔵が宙に放った「目」はわずかに二つ——。
一つは短槍を投げようとする男の正面に放ち、それをして男を前方から見えせしめる……。もう一つは八郎の目に前方から——コンタクトレンズのように——重ねあわせるように放ち、その「目」の視覚と、八郎の視覚とをいわば同調させる……。
この二つの「目」を同時に発動させることによって八郎が男を正面から凝視したのと同じ効果をもたらした。
すなわち八郎の予眼術が発動した。
これは男にとってじつに計算違い以外の何物でもなかったろう。八郎は背を向けているからその予眼術が発動されるはずがないとそう信じて疑わなかったからだ。が、才蔵の「目」はいわばビリヤードのクッションのように作動した。八郎の視線は球のように一転、二転したのちに男のもとに届いた。男の八郎に対する敵意が、一気閃電、ブーメランのように男のもとに戻ったのだった。
「……」
さすがに男は声をあげるような醜態はさらさなかった。八郎に向かって投げたはずの短槍が自分の肩をつらぬいた。その血しぶきのなか、驚愕と、屈辱、それに苦痛を無言のうちにかみ殺し、静かに築地塀から消えていった。
八郎はそのまま何事もなかったように歩み去っていく。もしかしたら自分が予眼術を発動させたのさえ意識していなかったかもしれない。一瞬、乱れた花びらの舞が、かろうじて八郎の瞳術の痕跡をとどめたかのようではあったのだが……

忠長は用意周到だった。
八郎が自分の意にしたがわぬ場合を想定して、あらかじめ何人かの弓隊を待機させていたのだった。それも八郎の瞳術を警戒して、彼が通るであろう道を事前に予想し、それに面した明屋敷の塀の内側に配置させた。
塀の内側に陣させるのであれば、弓隊の面々は八郎に対峙する必要がなく、その予眼術にさらされる恐れがないからだ。が、塀の内側にあって、いかにして外を歩く八郎に弓を射ることを可能たらしめるのか。
音、である。
その跫音を敏感に聞き取って、塀の内側から天に向かって矢を放ち、それをもってして塀の外を歩む八郎をしとめるという作戦であった。
むろん視力に頼らずして、聴力のみをもってして、矢を射、的を射とめるのは、並たいていの手練ではおぼつかない。まずは名人上手をうたわれる射手をそろえなければ、とうてい覚つかないことだろう。
事実、射手たちはたすきがけに袖をしぼり、ゆぎを負って、その目の配りといい、足場のさだめといい、見るからに優秀そうだった。

ここに蜩七弦がいる。七弦はそのいずれ劣らぬ弓手の矢先を狂わせなければならないのだった。

そのために――。

塀の内側、弓隊が潜んでいるのと同じ庭に茂る蘇鉄のかげにひそんでいる。

外側の道を歩み近づいてくる八郎の跫音が入ってきた。

弓隊を率いる男の右手が静かに挙がると――。

それに応じて弓隊が一糸乱れぬ動きですっと矢を空に向ける。すべては無言のうちのことだ。見事に連繋されていた。――空に放たれた矢は、一斉に地に降りしきり、八郎をハリネズミにせずにはおかないだろう。

いかに八郎に矛眼術があろうと、弓隊と塀でさえぎられていては、それを発動させようがない。

――もやは猶予はならぬ。

蘇鉄の葉のかげに隠れながら七弦はそれを起動させた。

それ――というのはその術にはまだ名がないからである。

いや、術といっていいかどうか、それがはたして忍法の名に値するものなのか、現実のこととしてどのように実用に供することができるか、はなはだ疑問ではあるのだが。――七弦にはほかに何の能もない。ほかに選択肢はないのだ。

心気を澄みわたらせ、らん、と目をみはって、

「――心もて草の宿りを厭えども　なお鈴虫の声ぞふりせぬ……大かたの秋をば憂しと知りにしを　振り捨てがたき鈴虫の声……」

小声で一心にそう唱えた。

一瞬、間があり――まだ春だというのに、しかも真っ昼間だというのに。――

虫のすだく声が、庭の諸方から、リーン、リーン、と一斉にわき起こって聞こえてきたのだった。

その、突如として起こった、「ふりせぬ、振り捨てがたき――」虫の声は、しだいに庭に満ちていき。ついにはあふれんばかりに狂騰した。

鈴虫だろうか。

いや、夏に成育し、十月には死に絶えるという鈴虫がこの季節に鳴くはずがない。なにか別種のバッタだろう。

バッタ、キリギリス、コオロギ、ケラ、カマドウマ……そのどのバッタ目であるのか、それともそのいずれでもあるのか、それはこの時代の人間である七弦にわかろうはずがない。

これは、涙と一緒に鍛錬を重ねているうちに、思いがけず得ることのできた新たな術だった。たぶん、涙のなみだに触発されて、七弦のなかに虫を呼び出す能力が誘引された。それこそ理解の外にある。

その、耳を聾する声に、弓隊を率いている男の聴覚が乱されるのを期待した――わけで

はない。
腐っても鯛、の駿河大納言が、虫の声に動揺するような未熟な射手たちに八郎を討たせようなどと考えるはずがないからだ。
射手たちを率いる男も、射手たちも、じつに沈着冷静で、その不動の姿勢には迷いもなければ、揺らぎもない。が、いかに不動心を保とうと、満ちる鋭気、張りつめる殺気に、ひたい、首筋、あるいは腋下に、緊張の汗が滲むのは避けようがない。
人の緊張——恐れとか、怯え、あるいは殺気などの強い感情は、かならずや体の変化を引き起こし、それが虫たちにも影響をおよぼす。虫たちはそれに直接に、敏感に反応せざるをえない。
すなわち——
襲撃者たちがはらむ緊張を、その汗を、虫たちが感知する。しかるべきのちに、それら虫たちを介して、虫たちを見ることで……その敵意を、害意を、八郎は間接的に見るのではないか、と。——これが七弦の考えたことだ。
庭に舞い散る桜の花びらがフワッと大量に吹きあがった——かに見えた。
そう、見えたのだ。実際に起こったことはそれとは違う。花びらが舞いあがったのではなかった。虫たちが一斉に飛びたったのだった。それが舞い散る花びらにまぎれ、混在し、双方、見分けがつかないままに、両者、渾然と入り乱れた。
花か虫か、虫か花か……虫たちの何匹か、何十匹か、あるいは何百匹かが塀の屋根を越えて外まで飛んでいった。
男の右手がサッと下がった。射手たちは一斉に矢を放った。舞い散る桜の花びらを引き裂いて閃光が空に走った。雨が篠突くようにザアッと羽根が唸りをあげる。
が、ありうることか——その響きはすぐに射手のもとに返ってきたのだ。放った矢がそのまま頭上に降ってきた。たまらず射手たちは逃げまどう。血しぶきのなかに射手たちの怒声と悲鳴が交錯した。
さすがに自分たちの放った矢で死ぬような無能な男たちではない。しかし、まったくの無傷というわけにもいかないだろう。
八郎本人でさえもこのとき何が起こったのかさだかには理解できなかったにちがいない。七弦だけが何が起こったのかわかっていた。——まさに八郎の矛眼術が虫たちを介して射手たちに作動したのだった。
七弦は笑った。
笑いながらその場を即座に離れた。走り去った……
銃声が入り乱れるように何発も聞こえてきた。
だあぁーん
「わっ」

だあぁーん
「わっ」
だあぁーん
「わっ」

そのくり返しだ。
犀防具で身をかためている甲羅式部にしても、それはやはり撃たれれば痛いことには変わりない。それもそうとうに痛い。
八郎を何としても仕留めようと忠長が最後に用意していたのが鉄砲隊だ。
八郎の矛眼術を警戒して去りゆく八郎の後方に——それもかなり遠方に——二列横隊に並んだ。そして一斉射撃をした。
これだけの距離を隔てて八郎を射殺せしめようというのだから、その全員が腕に覚えのある名射手であることは疑いようがない。
それらの弾を防ぐには甲羅式部が鉄砲隊のまえにおどり出る以外にない。
両手をひろげて弾道をさえぎった。大声で叫んだ。
「撃つのはやめろ」
やめるわけがない。
一斉射撃にさらされた。

まるで狩り場の鴨だ。
鴨なら飛んで逃げることもできるが式部にそんな能はない。
全弾あまさず命中した。
鋼線を何重にもよりあわせた鋼外骨殻は、弾を跳ね返しはするが、その着弾の衝撃までも吸収してくれるわけではない。鋼筋の下のヒフがアザになる。裂けて血が吹き出る。それでも懲りずに倒れては起きるのをくり返す。——ほんとうのバカである。
が、どんなにバカであろうと——
火縄銃を使うには、弾と火薬を銃口から入れ、それをさく杖で押し込め、さらに火皿に点火剤を入れて、火を点じた火縄を火挟みに挟み込む……という一連の手順を必要とする。いかに二列横隊に銃口を並べても無制限に発射できるわけではないのだ。かならずその射撃に隙が生じる……
その好機を見逃すはずがない。
一瞬、銃火が熄んだその隙に、桜の花びらを蹴りあげながら、猛然とダッシュした。さながら重戦車の突進に似ていた。前途をさえぎるものはことごとくこれを破壊してやまない。まさに金剛不壊のたくましさだ。
その鋼筋で補強された足はこれで地を蹴ればさながら空を飛ぶような素晴らしい加速を得ることができる。鋼筋で覆われた腕はこれを一旋すれば石垣すらつき崩すことが可能だ。

鉄砲隊のなかに飛び込んだ。

相手はとっさに銃を捨て、剣を抜き放とうとしたが、凄まじい速度をはらむ式部の鋼筋腕、鋼筋足がそれを許す道理がなかった。

式部の体が独楽のように回転した。

ブン、という風切り音が鳴りわたり、鋼筋腕が回転し、鋼筋足が飛んだ。その破壊力に抗するすべとてあろうはずがない。血が飛び散り、肉が裂け、骨が折れた。剣さえへし折ったのだ。銃さえ踏みつぶしたのだ。八人の銃士はことごとく薙ぎ倒され、あっというまに鉄砲隊は粉砕された。

「……」

式部は息さえ上がっていなかった。ただ血の泥濘のなか、凝然と立ちすくんでいるのみであった。舞い散る桜にいろどられ、その姿は金剛力士のように揺るぎない。

「汝、犀の角のように独り歩め……」

とつぶやいた。その口調はどこか悲しげでさえあった。

仏陀の言葉だという。もともと犀防具という言葉はこの「犀」から来ている。犀防具の製造者である根来転寝が命名した。

犀防具はなにも武器として発明、製作されたわけではない。もともと甲羅式部の筋肉は異常に発達しすぎていて思春期を迎えたころから頻繁に肉が内側から裂けるようになった。それを外側から抑え込むために造られたのが犀防具なのだった。まさかそれが甲羅式

部の力、瞬発力を怪物的なまでに増進させる力があろうなどとは夢にも思っていなかった。じつに偶然の産物といっていい。

もともと式部は赤ん坊のころ寺門のまえに捨てられ、一度は僧になるところだった。それだけ人より慈愛の心が強いのかもしれない。優しいのだ。――それだけにこの犀防具を使って戦って、敵を粉砕すると、式部はゆえのない罪悪感にかられることがある。自分でもよく理由の知れない悲哀にかられてしまう……。このときもそうだった。

一瞬、地に倒れ、苦痛にうめいている鉄砲隊の銃士たちを見まわしたのは、治療したい、という気持ちが働いたからにちがいない。しかし、いまの式部にはそんな時間の余裕はないし、第一、傷ついた銃士たちが彼の治療など快く受け入れるはずがない。自分たちに対するひどい侮辱だと思うだろう。

「……」

式部はうなだれながらその場を離れた。その金剛力士のような姿に悲哀の念がたちこめていた……

ふと八郎は足をとめた。

両側を閉ざす築地塀の屋根ごしにのびる桜の枝々のかげに何か「気配」のようなものを感じたのだ。

その「気配」に視線を向けた先に――

ヒョイ、と一匹の猿が顔を覗かせたのだ。
それもただの猿ではない。
赤いのだ。
常識的には、やや赤みがかった体毛が、桜に映え、赤く見えるにすぎない——と考えるべきだろうが、とてもその程度に留まるような「赤」ではない。
まるで血に染まったかのように全身これ真っ赤なのだった。
その真っ赤な猿が桜の花陰からジッと八郎のことを見つめる。
その「赤猿」の背後にひろがる桜の花々、枝々に、おびただしい生き物の気配が感じられた。——猿の群れが。
「なるほど、結界の正体は猿の群れであったか。これは正体が知れぬはずだ——」
八郎は笑い出したが、すぐに真顔に戻り、
「おまえ、猿ではないな。何がとり憑いている？　成尋衆の、何者か」
と訊いた。
赤猿はにやりと笑う。
身をひるがえすや否や、満開の桜の花のなかに溶け込むように消えた。そのまえに、キャッ、と一声鳴いたようである。
「ついて来い、というのか——いいだろう。仰せにしたがうことにしようか」
八郎もまた散りしきる桜の花びらのなかに消えていった……。

五

駿河・浅間神社は霊峰・富士を御神体として仰ぎたてまつり、木花之佐久夜毘売命を大神に祀りいただいているのだという。
花之佐久とはすなわち「桜の咲く」の謂でもあって、桜をご神木とみなしているらしい。それだからか、広大な境内、鎮守の森に、無数といっていいほどの桜が植林されている。この季節、おびただしい満開の桜が、神域すべてを艶にいろどり、まるで境内全体が薄紅色の雲に覆われたかのようにも見える。
いま、その浅間神社に甲賀八郎は現れた。こともあろうに猿に誘われて。
ふしぎに他に人の姿はない。
桜に絢爛といろどられた鎮守の森をじっと見つめた。その目がほのかに紅色に染まった。
すると——。
ふいにその森が風もないのにざわざわと激しく波うったのだ。波濤から水しぶきが散るようにおびただしい桜の花びらが舞いあがる。妖々と。——
しかも森は波うちながらも徐々にこちらに近づいてくるようではないか。花びらがさらに激しく狂おしいまでに舞いあがる。

——猿だ。
数えきれないほどの猿たちが森に群れ、枝から枝に飛びかい、木々を揺らし、桜を散らせ、全体として森をざわざわ波うたせているのだ。そのために森が近づきつつあるように見えるのだった。
——浅間神社の森が攻めこんでこぬかぎり謀反が破れることはない……。
そう言葉巧みにいい含められた忠長が、しかし、かりそめにも、その森が現実に動いているように見えるのを目のあたりにすれば、狂気におちいるのは当然のことだ。
——成尋はな、あやつは魔物であるわい。甘言を弄し、妖言を巧みにし、人をたぶらかす。のっぴきならない高みにまで追いあげたあげくに、その梯子をあっさりと外しおる……。
ふいに成尋に対する、いいしれぬ怒りがこみあげてきた。——
鎮守の森に向きなおった。あらためて狂奔する猿たちを見る。
そう、ただ見たのではない。瞳眼術を起動させたのだ。
こうなれば八郎の「視線」には動揺もなければ迷いもない。さながら一本の短槍が投擲されるかのように——鎮守の森に狂奔する猿の群れめがけ、ただひたすら一直線に向かうのみだった。
その「視線」が猿の群れに突き刺さったとたん——。
たちどころに「有情」が形成された。

そしてそれは、いまはどこか遠くにいるはずの響の盾眼術と、朗々と共鳴しあい、瞬時に「桜花」が読み込まれる。
思えば、これは六年ぶりのことだ。——その長い「不在」などなかったかのように、両者、打てばたちどころに響きあう。
おそらく響のほうは自分の「桜花」が召喚されたことに気づいてもいないだろう。二人にあってはそれほどまでにこれは自然なことなのだから。
矛眼術の「有情」に、盾眼術の「桜花」——その両者の重なりあうところに「異時空間」が立ち上げられる。
われわれの通常の「時空間」と、八郎、響のふたりの瞳術がたがいに共鳴し、どこかに立ち上げる「異時空間」とはどう違うのか？
いわば互換性はあるが、フォーマットが異なる二種のワープロ・ソフトのような関係にあるとでも考えればいいのかもしれない。——矛眼術、盾眼術いずれか、あるいは両者が発動された視線を向けられ、その「異時空間」に落とし込まれたものはことごとく、別次元の相をさらすことになる。
それら猿の群れもその例外ではなかった。
そのピラミッドを成す頂点に——。
ボス猿がいた。
それは巨体を誇り——優に普通のオスの一・五倍ほどの大きさがあった——老いて体毛

の先端を苔のように褪色させた、しかし、いまだに体力も、知力も、凶暴ささえも失っていない、恐るべき暴君なのだった。

事実、いまも他のオス猿を暴力で屈服させるだけの獰猛さと、意に染まぬ――つまり自分のメスが他のオスによって孕まされた――赤ん坊サルを両手で引き裂くだけの膂力を十分に残していた。もう十数年もこの群れをひきしたがえて、これまで、ただの一度としてクーデターを許そうとはしなかった。

――棟梁猿！

矛眼術に照射され、赤い階層ピラミッドの頂点に浮かびあがる「棟梁猿」をなにより特徴的に、忌まわしく、恐ろしげに見せているのは、その首から首輪をぶらさげていることだ。

その棟梁猿が殺したのか。たぶん赤ん坊サルたちの骨片だろう。それらに穴を開け、ツルの繊維をよりあわせて編んだ細いヒモを通し、輪っかにしてある。それを首からぶら下げているのだ。それら骨片が血に黒ずんでいるのがなおさら棟梁猿をおぞましい存在に見せていた。妖怪めいていた。

彼の、猿としてはまずまず秀でていたはずの頭脳が、いまは深々と狂気をうがたれ、いまにも全面崩壊の危機にさらされていた。もちろん彼に、そのことについてのはっきりとした自覚などはなかったが。

そうなる以前の彼についていえば、群れを完全に支配し、掌握しきっていることに、絶

対の自信を持っていた。自分の境涯にとりたてて不満はなかった。

それがいつしか、脳に一点、奇妙な欠落感めいたものを覚えるようになった。のみならず、それは日を追うにつれ、鬱塊となって際限もなしに膨れあがり、いまでは棟梁猿の精神を万力のように圧迫するまでになっていた。

――つまり、狂った。

むろん猿のことであるから、その鬱塊が何から生じたものか、それを論理的に突きとめるだけの能があるはずはなかったが、それでもそれが何から派生しているのかを――無意識のうちに――必死に模索した。

そして、ふいにそれがわかった。棟梁猿は驚愕した。それも頭のなかをしたたかに蹴りつけられたような驚愕を覚えた。なぜなら、それは、

――「神」になりたい。

という不可能でもあり、不可触でもある祈念に、すべて原因があったからだ。

――何だって！

八郎もまた、それを知って愕然とした。ほとんど恐怖にさらされている。

――何てこいつは途方もなく、愚かしい妄念にとり憑かれていることか！

もっとも、正確にいえば、八郎の瞳術は相手が考えていることを読みとるわけではない。矛眼術はテレパシーではないのだから。

矛眼術は、相手の心のうちではなく、相手の、八郎に対する敵意、悪意のみを――さな

がら名医が執刀するメスのように——正確に摘出するのだ。そして、それをそのままそっくり相手へと——さらにその先にあるものへ逆流させる。

その先にあるもの？　それは何か？

——それこそがあの怪物僧の成尋なのではないか。

と八郎はそう思うのだ。——そうであればこそ、その「神になりたい」という狂念が、忠長にも、この棟梁猿にも共通しているのではないか。

——よし、いまここで、きさまの腹の底を見すかしてやる。きさまの正体を見とどけてくれようほどに……

成尋の心底を見さだめるにはどうすればいいか。

棟梁猿だ。棟梁猿の心の底に深く潜っていくほかはない。

——棟梁猿よ、わが目を見よ。

瞳にありったけの思念を凝らした。ぎりぎりまで矛眼術を駆使した。そのうえで、あらためて棟梁猿を見た。棟梁猿の心の底に頭からぐんぐん潜水していった。悪念を摘出することに渾身の力をこめた。

八郎の矛眼術が発動した。

すると八郎の意識のなかに——。

極限まで磨きこまれ、奇跡的なほどに澄みわたる、一枚の鏡のようなものがまるで霊峰のように敢然と聳えたったのだった。

さながら、閻魔大王が亡者の正邪をそれで見さだめるのだという「破邪鏡」のように——

棟梁猿のかげに隠れ、どこか、はるかなる遠方、その暗所に座している成尋の影が茫々と映し出されたのだ。

その、真っ赤な猿の姿を！　あたかも蜘蛛の巣あやなす「狂気」の背後に座しているかのように。

その、どことも知れぬ虚空に、成尋の笑い声が、狂、と響いた。虚空をつんざくように声がとどろいた。

——すなわちこれこそは忍法「狂儡」なり。

と。

「忍法？　これが忍法……」

さすがに八郎は慄然とした。

人を——あるいは猿までも——狂気におとしいれ、その狂気を自在にあやつる。……それは恐ろしいが、いや、それだけでも十分に恐ろしいが、おそらく成尋の忍法「狂儡」をただそれだけのものと考えるのは理解を誤ることになるのではないか。

人の狂気をあやつる、ということは、すなわち人の精神をあやつる、ということになりはしないか。人の精神に駆動され、展開されるこの世界そのものをあやつる、ということになりはしないだろうか。

――「世界」をあやつる忍法！

もちろん、八郎にそんな知識もないし、そんな語彙の持ちあわせもないが、成尋こそはキリスト教世界にはびこり、跳梁する「悪魔」そのものとはいえないだろうか。

六

棟梁猿の狂気が爆発した。

八郎の矛眼術に照射され、その凶暴さと狂気をあらわにさらけ出し、舞い散る桜の花びらを血の雨に変えながら――。

「グワァァッ！」

棟梁猿が牙を咬み鳴らしながら咆吼したのだった。首から下げた骨片の首輪がジャラジャラ鳴った。両拳を地に突き、上半身をグウッと極限まで伸びあがらせる。野生の獣が戦うときにおのれの体を最大限の大きさに見せるウォー・ディスプレイだ。全身を怒りと狂気に震わせながら、二声、三声、天に向かって吠えたてる。長々と尾を曳いて空にこだました。

「やめろ」八郎が静かに警告した。「おれに、おまえと争うつもりはない」

しかし、もうこうなっては、棟梁猿の狂気は誰にも押しとどめることはできそうにない。なおさらに荒れ狂う。

「グワァァ！　グワァァ！」

これはどういうつもりなのか、数匹の赤ん坊サルを自分の胸元、腹の下に抱き寄せている。三匹、いや、四匹ほどはいるだろうか。もがいて、逃げようとする赤ん坊サルたちを、しきりに腕で自分のもとに引き寄せているのだ。まわりで母親猿たちがパニックにかられ、キィー、キィー、と抗議の声をあげているが、そんなことにはおかまいなしだ。赤ん坊サルたちを自分のもとから放そうとはしない。そのうえで全身の体毛を逆立たせながら八郎を全力で威嚇しているのだ。獰猛な敵意をむき出しにしてはばからない。

そして八郎に向かって走った！　矢のように一直線に放たれた。それと同時に鎮守の森が動いた。猿の群れが一斉に発進したのだった。桜の花びらがドッと舞い上がる。凶暴な殺意の風が八郎の顔に強烈に吹き寄せてきた。

「やめないか」

八郎が思わず声に出してそういう。猿を相手に言葉が通じるはずがない。猿を相手に本気で戦う気になれるはずもない。が、八郎の意志がどうあれ、そのときにはすでに矛眼術は相手の敵意に感作されていた。もう棟梁猿との激突は避けられそうにない。

せめて、

――猿の群れを傷つけるようなことは避けたい。

とそう思う。

棟梁猿の狂気に汚染されているだけで猿の群れには何の罪もないからだ。討つべきは棟

梁猿一匹だけであろう。

が――

何十匹、いや、何百匹もの猿が、八郎に向けて猛然と敵意と殺意を集中しているときに、そのうちの一匹に絞って――つまり棟梁猿だけに絞って、だ――矛眼術を機能させるなどということができるだろうか。そんなことが可能なのか。

それは八郎にもわからないことだった。これまで経験したことがないからだ。

――できるかどうか。

それはわからないが、やってみるほかはない。ほかに選択肢はない。

どこまで有効に機能するのか、自分でも覚つかないままに、群れの先頭を真っ先かけて走ってくる棟梁猿にむかって視線を――いわば標的をロック・オンするように――集中させた。そのうえで一気に矛眼術を全開させた。

――ああ！

八郎はカッと瞠目した。喉から声がほとばしる。ほとんど悲鳴に近かった。

棟梁猿は矛眼術を照射されても、みずからを滅ぼそうとはしなかった。それどころか怯みさえしなかった。両手、両足を前後させて、猛烈な勢いで迫る、その勢いにもまったく衰えがない。そうして全速力で走りながら、自分に抱きついていた赤ん坊サルの一匹の体を無残に引き裂いたのだ。パッと血煙があがる。その血を虹のようにあとに曳きながらさらに走る。赤ん坊サルの死骸をボロ切れのように地に投げ捨てた。その頭部と胴体が後方

に飛ぶように転がった。

――これは何だ？　どうしたことだ。

どうしたもこうしたもない。これは八郎の矛眼術のせいにちがいない！　そのことは反射的に確信した。おれの矛眼術のために無辜な赤ん坊サルをむざむざ惨死させてしまったのだ、と――悲痛な思いが胸を走った。鋭い刃物で切り裂かれたような痛みをともなって。

――どうして矛眼術を集中させた棟梁猿が赤ん坊サルをそんなふうに残酷に殺さなければならなかったのか？

どうして？　どうして？　どうして？　その因果関係がさだかにわからずに、ただもう混乱させられるばかりなのだ。

八郎にわかるはずのないことではあるが……。

たぶん、こういうことではないか。――棟梁猿の脳裡にあっては、群れの赤ん坊サルはすべて自分に属するものとして意識されているのではないか。とりわけ赤ん坊サルは自分の一部のように感じられている。自分の手足も同然なのだ。

まさに八郎の矛眼術は正常に発動した。八郎に害意を抱くものはその害がすべて自分のもとに戻ってくる……それが棟梁猿の場合、たまたま自分の体の一部である赤ん坊サルであった、ということに他ならない。

いかに棟梁猿が狡猾であろうと、まさかこうなることを予感して事前に四匹ほどの赤ん

坊サルを自分で抱き寄せたはずはない。一種、本能的なものであろうが、その本能の——ほとんど超能力ともいっていい——冴えこそが恐ろしい。この冴えがあればこそ、棟梁猿は十数年もの長きにわたって群れを支配してこれたのにちがいないからだ。

理屈ではわからない。しかし——棟梁猿に矛眼術をかければ赤ん坊サルが死ぬことになるのだ……と八郎は魂でそのことを理解した。まさに慄然としたといっていい。

——これを

どうすればいいのか、と自問して、

——そうするしかない。

と、思いついたことがある。

うまくいくかどうか確信はないが、ほかに選択肢はない。

反射的に——矛眼術を棟梁猿に集中させた、そのロック・オンを外した。

そして矛眼術を棟梁猿に抱きついている赤ん坊サルに集中させたのだ。

七

棟梁猿はあまりに自我（エゴ）が肥大化しすぎているために、自分と赤ん坊サルとの意識が分離されておらず、ほとんど同一化している。

が、赤ん坊サルのほうはその逆に、自我が未発達のために、棟梁猿の意識と自分のそれとが別であることがよく了解されていない。

両者の意識は「自他未分化」の精神状態のなかでないまぜになり、一つに溶けてうごめいた。

赤ん坊サルたちの意識のなかには、棟梁猿の八郎に対する敵意、殺意が、そのまま注入されている。

八郎の矛眼術によってそれがブーメランのようにおのれに返ってくることとなった。

この場合の、おのれ、というのは赤ん坊サルではなしに、赤ん坊サルと自他未分化の意識状態にある棟梁猿のことにほかならない。

つまり——

三匹の赤ん坊サルたちは一斉に棟梁猿の体に嚙みついたのだった。その生（は）えたばかりの牙が深々と棟梁猿の体に食い込んだ。

相手は赤ん坊サルだ。一匹に嚙みつかれたぐらいでは何ともないだろう。二匹でもさしたる苦痛はないかもしれない。が、それが三匹同時となると話はべつだ。血しぶきが散って、毛が舞いあがった。

「きーっ！」

棟梁猿の悲鳴が響きわたった。真っ赤に染まった「苦痛」が八郎の「有情」のなかを渦を巻きながら奔（はし）った。八郎の「有情」をつんざいて、響の「桜花」をも突き破り、「現実」まで達した。八郎の意識が一瞬のうちに現実にたち戻ったのだ。

いま、「現実」のなかにいる八郎は、剣を上段にかまえ、棟梁猿のまえに立ちはだかっていた。

「おまえだけは死ね」

八郎の剣光が落雷のように真っ青にひらめいてズゥーンと地に墜ちた。棟梁猿を頭から尻まで真っ二つにした。両断された体から真っ赤に血が噴きあがる。棟梁猿は声さえあげなかった。

「『神』になろうとした増上慢の報い、小猿を殺した報いを受けよ」

驚くべし！　棟梁猿を両断しながら、その体にしがみつく三匹の赤ん坊サルに、それこそ毛ほどの傷も与えなかった、その八郎の神業こそ瞠目すべきであろう。

が――。

棟梁猿を失ったからといって、狂奔、怒濤の猿の群れが急にその暴走をとめられようはずがない。巨大な一本の槍のように一直線に八郎のもとに向かってくる。

もはや指呼の間に近づいた。口々に吠えたてた。牙が咬みならされ、爪が打ちならされ、それらが剣戟の響きと化して、狂騒のうちに高まった。轟ッ、と迫った。

いかに八郎の剣術をもってしても、これだけの数の狂乱した猿をいちどきに相手にできようはずもないし、ましてや無傷で済もうはずがない。このままでは四肢を引き裂かれ、重傷を負うか、絶命することになるのは目に見えていた。

さすがに八郎は動揺した。これだけの猿の群れを相手にどう対処すればいいのか。

背後に人の気配を感じたのだ。そうと感じたときにはそれはすでに八郎たちの頭上を軽々と怪鳥のように飛び越えていた。怪鳥のように、といったのは、その墨染めの衣が翼のようにはばたいたからだ。宙に桜の花びらが乱れた。

「おお、皮膚坊――」

すでに宙にあるときから皮膚坊は左手に錫杖をかまえている。それが仕込みであることはわかっている。右手を柄に当てた。

「殺すな」

その声が皮膚坊に届いたのだろう。皮膚坊は仕込みは抜かずに錫杖だけを右に左に払った。地に下りたったときにはもう七匹もの猿を打ちのめしていた。そのまま猿の群れのなかを一直線に走る。

しかし――。

相手は人間ではない。猿だ。

飛ぶ、跳ねる、宙返り、後ろ宙返り、地を擦ってかいくぐり抜けようとする……

その動きは人の予想を裏切って変幻自在。いかに優れた剣士であろうと、これを正確にとらえるのは容易なことではないはずなのだが。――

皮膚坊の錫杖は魔法のように猿の動きをとらえて放さない。いや、錫杖が、ではない。皮膚坊の動きそのものがまさに魔法さながらの自在さなのだ。まるで骨を持たないかのようでさえある。筋肉さえも重力から解き放たれたかのように奔放に宙に舞う。その錫杖が

物理的にありえない軌跡を残して猿たちを地にたたき落とす。
「あれは――人間の動きじゃないぜ」
いつからそこにいたのか、根来転寝の声が背後から聞こえてきた。その声は畏怖の響きをこめて、なかばうめくようでもあった。
「見ろよ、あいつの体幹を――ふつうの人間にはとてもあんな動きはできない」
そのとおりだ。
皮膚坊の動きは、人間のそれというより、あたかも人間大の節足動物のように変幻きわまりないものだった。
肩、肘、胸、腹部、腰、膝……が自在に反転、屈折、回転し、それぞれに違う方向に動きを見せる――どうしてこれが人間の動きであるものか。
どうやら皮膚坊の体幹構造はどこか「節足動物」に似たところがあるようだ。
節足動物は、多くの体節のうち、前部にある体節を頭部に変え、つづく二つの体節を融合させて腹部に変え、残りのすべての体節を尾部に変えるのだという。
長くつながった体節が一つの構造を作るわけだが、各単位が部位を変えることで、理論的には無限に多様な構造体を作ることが可能になる。
たぶん、皮膚坊が人体のつくりからはありえないほどの変幻自在の動きを見せるのは、その体の構造が節足動物のそれに共通するものがあるからではないか。彼の体幹には疑似節足のような分節があって、しかもそれが瞬間、瞬間に、接続部位を変えるのではないだろうか。
ありえない？　そう、たしかにありえないことではあるが、そうとでも考えなければ、皮膚坊の、この、あたかも全身に多関節を配したような動きを説明することはできそうにない。
いずれにせよ、皮膚坊が端倪すべからざる体術の持ち主であることは疑いようがない。その柔軟きわまりない動きから発せられる錫杖の運びは融通無碍にして、電光石火、いかに敏捷、迅速な相手であろうと、これを的確にとらえて逃すことがない。
といっても皮膚坊は明らかに手加減しているようだ。猿たちはつかのま地に伏すが、すぐに起き上がるのだから。ただ、いずれも闘志は喪失してしまうようで、そのままコソコソ逃げ出してしまう。
それを見ながら、
「たしかに凄い」
と八郎が嘆息するようにいい、
「どうだ、根来転寝、おまえならあれに勝てる――いや、勝てないまでも、まずは互角にわたりあえるんじゃないか」
と振り返ってそう尋ねるのに、
「なにを寝ぼけたことを――どうしておれがあれに勝てるものかよ。こうして阿修羅に寝たきりのおれなのに――」

転寝は含み笑いで応じた。はなから八郎の言葉など相手にしないふうだった。
気がついたときには猿の群れはどこかに消え失せていた。
「いかが――」
皮膚坊は端然として笑った。息を乱してさえいない。
皮膚坊の後ろに三人の僧がいた。いずれも墨染めの衣を着て、花、降りしきるなか、影のようにたたずんでいた。――これが皮膚坊が江戸からともなったのだという三人の忍法僧なのだろう。
八郎の視線に気がついたのか、左端から順に頭を下げて――。
「守宮坊と申す」と、これはひどく痩せた、しかし鋼線を束ねて筋肉を縒りあわせたように精悍な男がいう。
「拙僧は明滅坊と申してな」とこれは、目を半眼に閉ざし、なかば眠ったように目立たぬ男だ。
「曾肥坊でござるよ。以後、お見知りおきのほどを」と丁寧に頭を下げたのは、色白にして、豊かな頬、唇だけが妙に赤い、なにかブヨブヨした印象の男――。
八郎も礼を返したが、自分は名乗ろうとはせずに、四肢をもぎ取られ、地に投げ捨てられた赤ん坊サルの死骸を見ている。――その目に沈痛な色が濃かった。
「いずれも一騎当千の豪の者でありますれば、味方につければ、これほど頼もしい者たちは居り申さぬ。それにしても――むごいことでござるな」

皮膚坊が深沈とした声でいった。
「いま成尋衆を成敗せねば、その子猿の運命がそのまま人の子の運命でござれば――その一事をもってしても、何としても、成尋衆を斃さねばならぬ。どうか、われらに助力あれ。ともに力をあわせ、成尋衆を斃そうではござらぬか」
一瞬、間があり、
「いや、やめておこう」
と八郎は静かにいう。
「やめる？　なぜにでござる？　成尋衆のこれほどの暴虐を目のあたりにしながら――」
「だから、おれは一人でやる。おれにはそのほうがいい――」
「一人で……」
「うん、そのほうがいい」
八郎は皮膚坊に背を向けた。その背に向かって、これは根来転寝が、
「おれはな、おれは――いつかおまえがそんなことをいいだすんじゃないかと思ってたよ。だがな、おい、甲賀八郎――」
いつもながらに屈託のない声でそういった。いや、屈託はなさそうだが、その声にどこか一抹、哀感の響きがあるようでもある。
「ほんとうにそれでいいのか。たしかに、いまのおまえのうでがあれば、一人のほうが好きに動けていいかもしれないが。この坊さんたちのことはいざ知らず、おれたち子供時代

の仲間からまで離れてしまって——ほんとうにそれでいいのか」

一瞬、間があり、八郎は背中を向けたままで、

「おれたちが子供のころ、よく甲賀・伊賀忍法合戦ごっこをして遊んだな。覚えてるか——才蔵、七弦、現、涙の四人は、誰が伊賀の室賀豹馬の役をやるか、いつも取りあいになってた。室賀豹馬は人気があった。甲羅式部は如月左衛門をやりたがった。いまと同じ、あのころも怠け者だったおまえは、地虫十兵衛の役をやって、太平楽に寝ころんでいた。覚えているか」

「うむ、忘れるものか。あのころは楽しかった——はて、おまえは何の役をやったのだったか？　ふつうであれば、おやじ殿の弦之介様であるべきだが、そうではなかったような……」

「おやじの役はやりたくなかったよ。響もおふくろ様の朧の役はやりたくなかったはずだ——好きおうていた二人があのように敵味方に別れて殺しあう……何とむごいことではないか」

「おうさ、むごいことだ。あってはならぬことよ」

「それがな、根来転寝、どういうものか、おれはこのごろ、このままおまえたちと一緒にいつづけると、いつか響と殺しあうことになるような——そんな気がしてならぬのだ」

「何？」

根来転寝は目を剝いた。かま首をもたげて八郎をカッと凝視した。

「な、何をバカなことを——」

「だからさ、おれは一人のほうがいい。一人になるべきなのさ」

そのまま、しずかに歩みはじめる甲賀八郎に、

「どちらに行かれるか」

皮膚坊が訊いた。

「高野山に」

「それはそれは——あちらでご一緒することになりましょうか、のう」

「それはわからぬ」

歩き去る八郎の背に桜の花びらが舞う。それも、いつしか消えた。

つかのま沈黙があり、ご坊、と根来転寝は皮膚坊に声をかけて、

「かの織田上総守信長公が本能寺の奇禍に遭われて仰せになられた言をご存知か」

「いや、知らぬ。何であろうか」

「是非もない——」

根来転寝は平手で上から下にべろんと顔を撫で下ろした。

「そういうことさ——甲賀八郎のことも、つまりは、是非もない、だ。おれたちにはどうにもならぬよ」

このときの根来転寝は、数日うちに、その言葉がまったくちがう意味あいで使われることになろうなどとは夢にも思っていなかったのであるが。

「ところで――根来転寝どのでござるよな。何でも、機械仕掛けに特異な才をお持ちとか」
皮膚坊は転寝が寝ころんでいる阿修羅を見おろしながら、
「その才を見込んで、ぜひともお願いしたき儀がござってな」
「おれに？」
「左様」
「それはおもしろいことかい」転寝は太平楽な表情でいった。「おれはおもしろいことしかやらないと決めてるんだけどね」
「まずは」
皮膚坊は笑いをかみ殺すようにいった。
「相当に――おもしろいことでござるよ」

鳳輦車「叢雲」

一

紀伊藩領、慈尊院村。――
紀伊藩領主は「南海の竜」とたたえられ、名君とうたわれた徳川頼宣である。
その治世よろしきを得て、慈尊院村は平和のうちにまどろみ、四季の恵みを受けながら、紀ノ川に寄り添うように静かに横たわっているのだった。
その対岸、高野山領側は、あまねく満開の桜に覆われ、河原がひろがっている。――その河原の向こうに、長い堤がつづいているのが見える。かなり高い堤だ。桜の木々の間に見え隠れしながら東西にどこまでも伸びている。
二年前の寛永七年（一六三〇）、高野山の根本大塔が焼失した。その普請のため、寛永八年、材木を集積する必要が生じ、そこに土を盛り、俵を積みあげて、延々、築かれたのがこの堤である。
村々によって、「上様堤」とか「高野堤」とかさまざまに呼ばれているようだが、ここ慈尊院村では「大師堤」と呼んでいる。――「大師堤」では桜のみならず、春の可憐な

花々が咲きみだれて目を楽しませてくれる。

その「大師堤」に――

突然、巨大な鳳輦車が姿を現してから、すでに五日が過ぎている。

それなのに紀伊藩領側は、此岸、堤防を、兵でかためる以外に、めだった動きを見せてはいない。――物見のために接近した役人たちは、何があったのか、そのまま戻ってこなかったのだという。

それにしても――

いったい、この鳳輦車はどこからやってきたのだろう。これほど巨大なものが、いままで高野山のどこに秘匿されていたのか。いかにして山から紀ノ川の岸にまで下ろすことができたのか？　わからない。わかるはずがない。――どれほど巧妙に秘匿されようと、かぎられた高野山寺域にあって、これだけのものをこうまで完璧に秘匿しおおせるのは不可能なはずなのだから。

ただ、忽然とそこに現れた。――そうとしかいいようがない。

いまだに鳳輦車は動き出す気配を見せないが、いずれは始動し、京か、あるいは江戸へと向かうのにちがいない。

京に向かうのだとしたら、生駒山脈の麓をほとんど一直線に南北に走る東高野街道を選ぶであろうか。――高野詣での人たちはもっぱら、天王山南麓の大山崎・男山八幡宮下の橋本にて渡河していたらしい。

江戸に向かうのだとしたら、紀伊藩がもっぱら参勤交代に利用した伊勢街道を選ぶことになるか。

なにしろ鳳輦車はあまりに大きすぎる。

天皇のおわす京か、公方が支配する江戸か。

いずれに向かうにせよ、まずはその絶対的な前提条件として、この紀ノ川の大河を高野山寺領から紀伊藩領にと渡らなければならないのだが。

そもそもこれだけの巨大なる鳳輦車が、紀ノ川を渡河することなど可能なのか。いかに「無限軌道」があろうと、紀ノ川の深さを突破することは不可能なのではないか。

高野山に参詣する人々のための船着き場ならあるが、それをもってして鳳輦車を渡河させるのなど、その可能性を論じるだに愚かしい。不可能だ。

ほかに船着き場はない。もとより橋などあろうはずがない。

であれば……

――いかにして成尋衆は鳳輦車をして紀ノ川を渡らせるつもりであるか。

二

いまはもう現存しないが、このころ慈尊院村からすこし歩いたところに、街道の交差する「辻堂屋輔」なる地名があって、その西方に船着き場が設けられていた。

ここから、紀州藩に住まいを持ち、高野山領で荷売り商いをしたり、参詣人相手の商いをしたりする人たちが、毎朝、渡し船で対岸にわたる。

渡し船で紀ノ川をわたる人たちはいやでも対岸の堤にそびえる鳳輦車を――それが鳳輦車と呼ばれるものであることはいつしか人々の間で知られるようになっていた。――目にすることになる。

滑婆（なめんば）もその一人である。

どんなに見ても、見あきることがない。誰かにそう指摘されても、けっしてそれを本人が認めることはないだろうが、彼女は鳳輦車に魅せられてしまっているのだ。

それというのも滑婆は、かつて「落とし」を専門とした女忍であって、敵兵に十重二十重に囲まれた城から奥方、姫君を落とし参らせるときに、

――この城ごと動かすことができればどんなに楽なことか。

何度かそう嘆じたことがあるからだ。

その動く城が現にそこにある。彼女がそれに魅せられないはずがない。

毎朝、鳳輦車を見る……

鳳輦車は多宝塔のように二重の屋根を持っている。

最下層は、柱間（はしらま）五つの正方形の建物であり、それに屋根が載っている。そのうえに四層の円塔が載っていて、さらにそのうえに屋根を載せている。すなわち二重構造の屋根になっているわけだ。

最上階、それも屋根近くに、ひときわ大きな窓があいているようである。遠目にも、その窓が、あざやかに青空を煌（きら）めかせ、悠然たる白雲を映し出しているのが見える。それがふしぎだった。鏡が窓に嵌（は）められてでもいるのだろうか。

四層の円塔に、下層の正方形の建物を加えるのだから、全体で五層構造ということになる。ちょっとした城郭（じょうかく）、それも天守閣をいただいた城ほどの高さになろうか。

最下層の正方形の構造物は地上からかなり浮きあがっている。平屋の屋根ぐらいの高さはあろうか。――その下に車輪を履いているからだ。どうしてもそれぐらいの高さは必要になる。

といっても、それが下部に履いているのは通常の車輪ではない。ちょっと変わった「車輪」。小さな――といっても人間の背丈（せたけ）ほどはありそうだが――車輪が幾つも組みあわされ、それらが帯状の鋼板にかこまれて、びっしり装着されているのだ。

さすがに後世の「戦車」ほどには完成されていないが、設計思想としては、まさしく「無限軌道」そのものに他ならない。この時代の不整地に稼働させ、進攻させるには、自然、そうした構造にならざるをえなかったのにちがいない。

建物も大きいが、その大きい建物を支え、あまつさえそれを動かさなければならないのだから、その駆動部分も相応に大きい。

もとより遠目に見る滑婆に、正確な大きさなど測りようがないが、おそらく下層の正方

形は一辺が優に五間以上（十メートルほど）はあるのではないだろうか。

高さは――

あえて目測すれば、たしかに二十間（三十六メートル強）以上はあるのではないかと思われる。現代でいえば八、九階建てのオフィス・ビルの高さに匹敵するだろうか。――この時代にあっては、いや、現代であっても、これほどの高さ、重量のものを稼働させるのは容易なことではないはずだ。

この時代の匠たちの手によるものであるから、基本的に木造であることはいうまでもないが、いたるところ鋲打ちされた鉄に補強され、そこかしこ、ぶ厚そうな鋼板に装甲されているために、まるで鉄塔がそびえ建っているかのような威圧感をもたらしている。

が、なによりそれを、壮麗、古怪、幻想的あらしめているのは、塔壁、屋根、露台、通廊いたるところに彫像が据えられ、一様に下界を見おろしているからかもしれない。

円塔のそこかしこに配された、それら諸像は、金剛界マンダラに安置される諸仏、諸菩薩とはまるで違う何かであるようだ。――およそ金剛界マンダラの荘厳、華麗さからはほど遠い、ただ凶悪にまがまがしいばかりの何か。

おそらく、その何かは、この国の人々にはなじみがなく、したがって遠く理解もおよばない、異形の神、魔物、魔獣たちであるのかもしれない。

これもまた見るべき人が見れば、の話であるが――それらは端的に、たとえばパリのノートルダム大聖堂のガーゴイル像の数々を連想させる。つまり悪魔を想わせる。

嘘だと思うなら――こころみに円塔の屋根を見てみればいい。そこには巨大な「鳥」の造り物が翼をひろげている。全身をうろこで覆われ、両手のかぎ爪に竜王をつかみ、頭に角をいただいている。どうしてこれが鳳凰でなどあるものか。じつに「凶鳥」としかいいようのない禍々しさ、おぞましさなのだ。

これまで数えきれないほど「落とし」の修羅場を重ねてきて、いまは新たなる女忍「伊賀五花撰」を率いるほどの滑婆が、思わず後ずさりしそうになってしまうほどに。

――この恐ろしさは何だろう。このおぞましさはどうしたことか。

それでも懸命に視線を凝らし。見るべきものはすべて見ようと努めて――。

ついに、それを見たのだ。

円塔の屋根のうえ、あるいは「凶鳥」の背に立ちはだかり、あるいはかぎ爪の後ろに侍して――ああ！　春の白光はこれほど燦然とまばゆいというのに――陰々滅々たる影を浮かび上がらせている者どもの姿を。

――成尋衆。

反射的にそう直感した。全身に氷柱のような悪寒が走るのを覚える。

これまで滑婆はただの一度も成尋衆の姿を間近に見たことがない。響の「桜花」を介して、夢のように――いや、むしろ悪夢のように、というべきかもしれないが――おぼろに見たにすぎない。それなのに、それらの影を成尋衆と直感し、しかもその直感は絶対に正しいと確信した。

ただ、不審なことがある。
屋根のうえの人影は五人――それでいい。数はあう。たしかに成尋衆は五人のはずなのだから。

成尋。
孔雀啄。
輪廻孫六。
涅哩底王。
夜叉至。

その五人、だ。
それなのに屋根のうえにもう一人いるかのように感じるのはどうしてなのだろう。六人めがいるように感じられてならないのはなぜなのか。
見えない、しかし感じるのだ。
感じる、感じる、感じる……執拗なまでに感じられ、それが熾烈に胸を打つ。
いまはまだ目に見えない。どこにもいない。しかし、たしかに六人目はいる……この不吉で、強烈な胸騒ぎはどうしたことなのか。この嵐の予感は何なのだろう？　……この感覚をどう説明すればいいのか。そもそも説明しうることなのか。

もちろん何か根拠があることでもなければ、理由があることでもない。それなのに、もう一人、成尋衆がいる、という、この、じつに強迫神経症的な思いは、紀ノ川をわたり終えるまで、ついに滑婆の胸から消えることはなかった。悪寒がしつづけた……

三

さっきから店先に読経の声がしていた。それが一段落ついたと思ったら、
「托鉢の僧でござる。一椀のご報謝にあずかりたい――」
そうものさびて、しゃがれた声が聞こえてきた。
「はい、ただいま」
滑婆の声は明るい。
ちょうど奥の台所で夕餉の支度をしているところだった。いつもそうとはかぎらないが、さいわい今夜はお米の用意がある。それを木椀によそって、だれか手の空いている者はいないか、と台所を見まわした。
台所では何人もの少女たちが、あるいは菜を切り、あるいは竈に火を入れ、あるいは蒸籠に餅米を蒸したりして、忙しげにたち働いている。いずれも幼くして親を亡くし、家を失った境遇の娘たちばかりだ。
おとしの女忍として、幾人もの奥方、姫君を落城まぎわの城から落としまいらせ、また

慈尊院村で「妹」たちを育てあげた経験から、いつしか滑婆は孤児の娘たちを引き取り、その面倒をみるのを、天職として心得るようになっていた。

このころの高野山は現代の高野山とはかなり趣が違う。宗教都市であることに変わりはないが、真言密教の霊場であるのと同様に、いや、それ以上に教学を学ぶ僧たちのための、一大・大学都市でもあったのだ。

山上のほぼ全域が金剛峯寺の境内地となっていて、その壇上伽藍を中心にし、おびただしい数の子院が林立していた。その数じつに千八百軒をこえていたという。

が、いまに変わらぬこともある。

当時すでに、高野山の目抜き通りをなしていた本通りには、店として商人に貸与される「貸長屋群」が、ずらりと軒をつらねていたことだ。

このころの高野山は女人禁制であるが、高野七口と呼ばれる七ヵ所の上がり道・入り口までは、女人が立ち入るのを許されていた。

そこで滑婆は、その手前の一軒を借り受け、古着屋を商うのと同時に、店先を拡張し、参詣人相手に茶屋を開いたのである。

名物の「おとし団子」は、一応、ほっぺたが落ちるほどに美味しいから、というのが表向きの理由になっているが、じつはかつての滑婆の「専門」に対する郷愁からの命名だということは、「妹」たちだけが知っている事実だ。

名づけて「おとし茶屋」——これが思いのほか成功した。参詣人はもちろん、厳しい修行の明け暮れにこっそり学院を抜け出して団子をあがないにくる学侶方、雑務のあいまに息抜きを求める行人方たちがひっきりなしに訪れて、客足の絶えるときがない。

いまでは両どなりの店も借り、その店先に大きな幟をじつに何十棹もかかげて、いわく

——

あらいかに煩悩おとし候べきか
されば此所にておとし候え
おとし茶屋

その幟が、どんな繊維でできているものか、透き通るような、それでいてじつに強靱な布地で編まれている。南蛮わたりの絹だ、としたり顔に説明する者もいるが、ほんとうのところは誰にもわからない。——まずはその幟が評判を呼んだ。

ひかえ目に見ても滑婆の商才はかなりのものといっていい。もしかしたら女忍の才よりもあるのではないか。

商売繁盛の理由のもう一つには、滑婆、蓮、現、涙、響の五人が、見る者だれをも目をみはらせずにはおかない、とびきりの美形ということもあるかもしれない。

——あれらの女人は、修行の身の学侶たちには、煩悩にうち克つための、よき試練の砥石とあいなろう。

と、とある高僧がのたまわったとか、いや、いやしくも高僧たる者がそんな下世話なことをいうはずがない、とか、いろいろとかまびすしいなか――

連日、感心なり、けなげなり、煩悩の試練にうち克とうとか、修行にはげむ若い僧たちで門前、市をなす。……

この日も、ようやく商いを終え、それでもホッと息をつぐまもなく、明日の仕込みとか、店の掃除とかに、誰もが追いまわされるように働いていて、托鉢の僧に報謝しようにも、あいにく手の空いている者がいない。

いや――

そのとき響が裏から入ってきた。笊に何本も洗った大根を積みあげている。

「この忙しいときに何やってんのよ」

「何やってるって」

響は口をとがらせた。

「見りゃわかるだろ――大根洗ってきたんだよ」

「あんたって子は暇さえありゃ大根ばっか洗ってて――そんなに大根が好きか」

「そんないいぐさないだろよ。大根洗わずにどうやって漬物を――」

「いいから、これ、店のまえのお坊さんにさしあげて」

滑婆は手早く握り飯に香の物を二切れ添えて響にさし出した。

「はあい」

響はふてくされたような声をあげて、店先に出ていった。が、「姉」たちを相手にしているときはべつにして、響は基本的に礼儀正しいし、心優しい。

托鉢のお坊さんにはきちんと合掌しているはずであり、

「ご苦労さまでございます」

という丁寧な声が聞こえてきた。しとやか、でさえある。

それを耳にしながら、

「ああ、そんなんじゃダメだ」

滑婆は窯場のほうに飛んでいった。

ゆめ、という名の、十歳になったばかり、まだ童女のようにあどけなさを残した少女が、窯のまえにすわり、しきりに火吹き筒を吹いている。灰をまきあげるばかりで火を熾す役にはたっていない。

「ああ、滑婆――」

ゆめは滑婆を見あげて嬉しそうに笑う。――ほかにも何人か「おとし茶屋」には幼い少女たちが働いている。ゆめは彼女たちのアネキぶんであり、滑婆のことをいわば自分のロール・モデルのように考えているふしがある。滑婆を慕っている。

「滑婆いうな、おとしだ――」

ゆめもまた伊賀の里から引きとった女忍の血をひく少女であった。

四

響は店先に立ち、
「ご苦労様でございます」
托鉢僧が片手に持つ鉢のなかに握り飯を入れようとし、その鉢の底に水が入っていて、二つ、白い睡蓮が浮かんでいるのを見て、
——ああ、きれい。
と思い、そう思いながらすでに、これは托鉢僧などではないな、ということに気づいていた。
たしかに托鉢僧のいでたちはしている。が、托鉢僧はけっして、自分の鉢のなかに水を入れ、睡蓮など浮かべはしない。托鉢僧の鉢は命の糧を得るための大切な修行の道具なのだからして。——ましてや腰に脇差しをおび、それを鞘ぐるみ、半分ほど出して、その黒い下げ緒を指でたぐるなどもってのほかだろう。
とっさに飛びすさろうとした。が、体が動かない。
睡蓮の一つが、ポン、と軽やかな音をたてて花ひらいた。そのなかに——
全裸の八郎が座していた。
響は十二歳のときに八郎と「桜花」を介して接続している。が、八郎は八郎で「有情」

を介しての接触であり、文字どおりの隔靴掻痒の出会いに過ぎなかった。ほんとうにあれで出会ったといえるのかどうかも自分ではわからない。
響が実際に八郎と会ったのは、慈尊院村外れにある「天膳桜」の下で、それぞれ甲賀五宝連、伊賀五花撰に引き取られ、別れた、あの九歳のときのことだ。
あれ以来、響はあの桜をひそかに胸のうちで「天膳桜」と呼ぶようになっていた。
伊賀の薬師寺天膳の名はとりわけ「死なない忍者」として、いまも伝説のなかに妖光を放って残されている。
響たちが子供のころのお気に入りの遊びは「甲賀・伊賀忍法合戦」ごっこだった。そのころの子供たちがなりたい忍者の筆頭三番の名前のなかにはかならず「如月左衛門」、「室賀豹馬」と並んで「薬師寺天膳」の名前があった。——ただ一人、根来転寝だけはいつも地虫十兵衛を選んだのがおかしかったが。
響があの桜にひそかに「天膳桜」の名をつけたのはもちろん、いつまでも枯れないように、という想いからであった。どうか二人のあのときの想いがいつまでも枯れませんように……
その天膳桜のもとで別れて以来、じつに九年ものあいだ、響は八郎に会っていない。天膳桜はいまも枯れずに華麗に桜の花を咲かせ、散らしているけれど。——
が——その睡蓮のなかに座している八郎は、あのときの九歳の八郎ではない。いまの十八歳の八郎なのである。どうしてか響にはそれがすぐにわかった。

八郎の全裸はたくましい。そして鞣し革のように清らかで美しい。見まい、と思っても、ついその下腹部に目がいってしまう。その性器さえも美しい……。

「ああ……」

思わず吐息が洩れた。

それを聞きつけたのか網代笠の下で「托鉢僧」がニンマリと笑った。

「もう一輪の睡蓮にははだかのおまえが座している。どうだ？　それも開いてみせようか。もうやせ我慢する必要もあるまい。おまえたちは若いが、若さなどすぐにも枯れてしまう。枯れるまえに、若い、好きおうた二人、思う存分、おなじはちす台のうえで抱きあってはどうか」

「そうかい」

ふいに響はにこりと笑った。若々しい、晴朗な笑い顔だった。どこかイタズラっぽくもあった。下からヒョイと網代笠の下を覗き込んだ。

「ほんとうにそうかい、輪廻孫六」

もう一つの睡蓮が開いた。そこには小さな雨蛙が乗っていた。雨蛙はかわいい声でケロケロ鳴いた。響は笑う。

「脇差しの下げ緒だけではおまえの『金剛楼閣』もさしたる術効を発揮できないのではないか。わたしをコマすにゃせめて大刀の下げ緒ぐらいは用意しなきゃ。あまり響の盾眼術をなめないほうがいい」

輪廻孫六は武士だ。これがいつもであればたちどころに刀を抜いたろうが、いまは托鉢僧に化けたばかりに大刀をおびていない。いや、それどころかピクリとも身動きできなくなってしまっている。

それというのも響が網代笠の——それもちょうど目に当たる部位に、グサリ、とダンゴのクシを刺し入れているからである。ちょっとでも動くそぶりを見せようものなら、そのクシは容赦なく輪廻孫六の目を刺しつらぬくことだろう。

「……」

網代笠に隠されてよくその顔を見てとることはできないが、さぞかし輪廻孫六の顔は屈辱に歪んでいるにちがいない。成尋衆の輪廻孫六ともあろう者がこともあろうに十八歳の小娘にしてやられたのだから。

「なかなかやるね、嬢ちゃん——」

背後、フッと息がかかった。首筋にかかった息なのに、もうそれだけでそれが蜜のように甘いのがわかった。

「だけど、わたしの『宿命通』にはかなわない」

「夜叉至——」

響は輪廻孫六の笠にクシを刺したまま体をひねって後ろを見ようとした。その響にさらに甘い息をかけると——

「これがおまえの運命だ」

夜叉至は骰子をかざして見せた。骰子の目は四――死、だ。
わずか五寸（十五センチほど）の空間で響の体がしなやかに動いた。網代笠からクシを引き抜きざま、それで夜叉至の指のなかにある骰子を宙に突きあげ、落ちてくるのを、あざやかにつまみ取り、それを夜叉至にかざして見せた。
骰子の目は六――無。
「そして、これがおまえの運命だ。おばちゃん――」
夜叉至の顔色が変わった。
そのとき――店から幼い女の子たちが出てこなければ、まちがいなく、ここで死闘がくりひろげられることになったろう。
響の顔がこわばるのと対照的に、夜叉至の顔に美しい、しかし邪悪な笑いがひろがっていった。
「おとなしくわれらのいうことを聞くべきであろうな」
網代笠の下から輪廻孫六の渋い声が聞こえてきた。
「さすれば、あの子たちに危害がおよぶようなことはないゆえに、のう」
それから四半刻（三十分）ほどバタバタしていて、店から蓮が入ってくるのを見て、ふとその手をとめ、足をとめた。
なにしろ、落としの滑婆だ。

どんなに市井の日常に忙しくまみれていても、落城寸前の城にあって、いつ奥方を落とし参らせるか、姫君をお救い申しあげるか、そのヤスリをかけられるような緊張感に身をさらしていたときの心ばえを忘れようはずもない。
このときも何かを感じた。胸のなかで燧が火花を発した。響の身に何かがあった、とそう直感した。
と同時に、茶屋、古着屋のおかみのおとしから、女忍の滑婆に瞬時に変わっている。
「響を見なかった？」
そう尋ね、いつものように蓮が無言で首を振るのを見て、パッと前垂れを取り、細身の包丁をクルクル布に巻き、ふところに差し入れ、あとは頼んだよ、と少女たちに言い残し、店を飛び出した。
そして走った。
蓮は滑婆の右腕だ。
何をいわずとも滑婆の心を的確に読みとり行動する。このときも滑婆のあとについて走っているのを確信していた。後ろを見る必要はない。
すでに夕暮れのとばりが蒼々と高野山を閉ざしつつあった。通りに夕餉の香りがたちこめているが、人影はまるでない。残照のなかに、ただ山桜だけが雪洞のようにほんのり明るかった。
それでもここは目抜き通りだ。

茶屋のおかみが狼のように疾走しているのを誰かに見られでもしたら、後あと面倒なことになりかねない。

が、さいわい響は山のほうに向かって拉致されたようだ。

すぐに目抜き通りをそれた。山道を藪から藪に縫うように走る。すでに山はとっぷり暮色に閉ざされ、ただ頭上の梢だけがわずかに茜色の光を滴らせていた。

山肌を駆けあがりながら、

「……」

滑婆はわれしらずニヤリと笑う。

本通りの路上から、山のけもの道にかけて、点々と大根の葉っぱが散っているのを見てとったからだ。——いうまでもなく響が目印に落としていったものにちがいない。大根の葉っぱを選んだのは、そんなに大根が好きか、と滑婆にいわれたしっぺ返しのつもりか。

響はいわば伊賀のお姫様だが、世にあんなに物騒なお姫様はいない。女忍としても優秀だし、その瞳術の凄まじさたるや、すでに優秀などという評価の域をこえている。

要するに、おとなしくさらわれるようなたまではないのだ。それが抵抗もせずに拉致されたのだとしたら、相手の正体と目的を見きわめたい、という思いがあったからに相違ない。

そう思い、確信もする一方で、しかし滑婆は一抹の不安を拭い切れずにいた。

花びらを夕暮れの空に舞いあげながら、山襞をひた走る二人の女忍は、さながら彼女たち自身が「桜の精」ででもあるかのようだった。

山里の遅い春に、あたかも散り急ぐかのように走る、走る……

五

たしかに高野山は女人禁制ではあるが、それは高野十谷と呼ばれる谷々内でのことといっていい。いったん、それらを囲繞する山々に踏み込んでしまえば、結界はあってなきがごとし、まずは女人だからといって、見とがめられる恐れはない。——山のなかには、関所もなければ、見張り小屋の一軒とてあるわけではないからだ。

ましてや花の精、風に舞う蝶ででもあるかのような伊賀の女忍たちにあっては、女人禁制の結界などあってなきがごとし。——

女忍たちは走る。

峰から、

峰に。

見おろせば、高野十谷の景観は一面、残照のなかに靄然と浮かびあがり、美しい。目路の達するかぎり、伽藍、寺院のいらか、檜皮葺の屋根が波うちながら、どこまでもひろがり、赤い夕陽をきらきら撥ねているのだった。

が、下界の明るさとは裏腹に、山は森にうっそうと覆われ、うす暗い。

その薄暗がりを走り抜け、斜面を駆けあがると——

そこは峠だ。一気に視界がひらける。

その峠に、夕映えの暗い空を背景にし、それよりさらに暗々と、四つの人影が片膝つきで地に座していた。茫々たる草やぶのなかにあって苔むした墓石のように動かない。

いや、四つの人影のように見えたのは誤りだ。人数は十二人だ。縦に三列、前後に寸分の狂いもなく重なりあうように、同じ姿勢の片膝つきで地に座しているために、それが四人に見えたのだ。彼らはそろって火縄銃をかまえている。

こともあろうに、その銃口のまえに、滑婆と蓮は飛び出してしまったのだ。

不覚といえばこれほどの不覚もないだろうが——

しかし、それも一面、無理からぬことではあったのだ。それというのも、にわかには信じかねる話ではあるが、彼らの火縄銃からは——どんな仕掛けがほどこされているのか——火縄のにおいが一切しないからだ。これでは直前まで火縄銃の存在に気がつかないのも当然だろう。

「え……」

滑婆はそのことにあっけにとられてしまったようだ。彼女らしくもなく、芸もなしに、銃口のまえに立ちすくみ、両手をあげてしまったかのように見えた。

が、さすがに銃に慣れている蓮の反応はちがった。とっさに前方に身を投げ、地に一回転し、起きあがったときには、もう両手に蓮根銃をかまえていた。

二挺の蓮根銃に装塡された銃弾は計にして十二発——そして相手は十二人……蓮としては撃ちあいたかったろうが、しかし、そこには滑婆がいる。いつもは表情をめったに顔に出すことがない蓮がこのときばかりは動揺をあらわにした。

すると——

十二人の鉄砲隊の最後列から、低い、含み笑いの声が聞こえてきた。

「おお、おまえも撃ちあいたいか。音に聞こえた蓮根銃の蓮であればさもありなん。宜なり。われらも伊賀の蓮と思う存分、撃ちあいたい。われら『雨』のうちの鉄砲陣——『雷雨』なりせば——」

「『雨』の『雷雨』……」

と、これは滑婆だ。——蓮はいつものように何も話そうとはしない。ただ二挺の蓮根銃を相手に向けている。

「だが、われらは成尋衆の命にしたがうのが仕事であってな。響を拉致し、連れもどる成尋衆を追う者あらば、何者であろうとこれを射殺すべし——というのがわれらに下された命である。さればこそ、おまえたち二人を何としてもここで射殺せねばならぬ」

「……」

「残念だ、蓮、おまえ一人であれば、いかようにも好きに撃ちあえるものを。そのように足手まといの女をかかえていては、おまえも好きに動くことはできぬ。われらに撃たれずにいられまい」

「足手まといの女か」滑婆が両手をあげたままボヤいた。「ひどい言われようだ」
また男は含み笑いをして、
「いかにもひどい言われようかもしれぬが――事実だ。さすがの伊賀の滑婆がわれら『雷雨』にかかってはかたなしであるわい」
「そうでもないさ」
滑婆は高くあげた両手をわずかに開いてみせた。なにやら、その両手に小石のようなものが握られているのが見えた。
「落としの滑婆は炸薬使いの名手だと聞いたことはないかい。二発の炸裂弾があればあんたたち全員を吹っ飛ばすぐらいは造作もない。気をつけな。わたしを初弾でしとめないとあんたたちみんな手足がバラバラになるぜ」
蓮がスッと立ち上がる。両手の蓮根銃を前方にまっすぐ「雷雨」に突きつけた。美しい狼のように笑った。
「わたしは響を返してもらえばそれで何の文句もない。争いは好まない。響を返せ。そしたらここから引き返す」
「そうしたいのはやまやまではあるが――さっきもいったように成尋衆の命にしたがうのがわれらの仕事でな」
男の含み笑いが消えた。鉄砲隊に殺気がみなぎった。
「……」

ピンと糸が張りつめるような緊張が走って、それがじりじりと極限までのぼりつめていくのが感じられた。それが頂点に達し、緊張が一気に解き放たれたとき、必殺の銃弾に変わるはずである。
が――
山のなかに何かの轟音が聞こえてきたのだ。地面が震えた。その轟音がしだいに近づいてきた。
地面に降り積もっていたのであろう桜の花びらがドッと吹き寄せてきた。見るみる、この場を覆っていく……

六

それらが散ったときには――
「雷雨」の姿はきれいに消えていた。雷雨があがるようにサッと去っていた。それと入れ替わるように――とんでもないものがそこにあった。
とんでもないもの……それまでそこになかった、なにか寺門のようなものが目のまえにそびえていたのである。二層に屋根があり、下部に大きな車輪を履いていた。屋根のうえには鳳凰の作り物があるらしい。下からはかろうじてその翼の先端だけが見えていた。夕陽の最後の光をあびて赤くきらめいていた。

「これも鳳輦車……」
滑婆がつぶやいた。
紀ノ川に現れた鳳輦車とは、その大きさ、迫力において、数段も、数十段もおとるが——というか、まるでおもちゃのようでもあるが——それもまた鳳輦車であることはまぎれもなかった。
その鳳輦車の背後に二人の雲水がつきしたがっている。その衣の袖に桜が舞う。
頭上から声が落ちてきた。おだやかな、低い声だった。
「これはすぐる六年まえ、将軍家が上洛したおりに、家光公が都大路にて披露なされた鳳輦車でな。もともとは家光公につけいって成尋衆が造ったものである。いまにして思えば、きゃつらには、あの『叢雲』のための試作品のつもりがあったのであろうて。かなり小ぶりではあるが、これも鳳輦車であることに変わりはない。なにかの役に立つこともあろうかと、法印、大和尚、南光坊天海大僧正様からの、高野山に搬送せよ、とのじきじきのご命であってな。『叢雲』を破壊するのに使えるやもしれぬ、とな——はてさて、船があるからどうにかなったものの、これだけのものを京から搬送するのには、ひどく往生させられたわい」
これもやはり僧形だ。上層に勾欄が設えられている。そこに立っている。手燭をささげ持っていた。ひらり、と欄干を乗り越えると、おどるように地上に下りてきた。そして、いう。

「ちなみにこれを『桜花』と名づけた」
「桜花……」
たしか響も自分の「異時空間」に「桜花」と名づけたはず。——これは偶然か。
「なに、あちらが『叢雲』だというから、それに見あう名前を探しただけのことでな。さしたる深い意味はない、唐の詩にこうある。いわく——」
べつの僧が受けて、
「花に嵐のたとえもあるぞ」
もう一人が、
「さよならだけが人生だ」
という。
雲水たちのあいだに笑いがひろがる。
妙なのは、それに賛意を示すように、「桜花」が、ごとん、と車輪を一回転、さきに進めたことだ。「桜花」には誰か、もう一人、乗っているのであろうか。
そのまま「桜花」は森のなかに進んでいった。やはり誰かもう一人が、それを操縦しているらしい。すぐに視界から消えた……
どうしてだろう？　視界から消えたのちも、なにか「桜花」のことが気にかかるのだ。懐かしい気さえする。妙に心に残った。
が、いつまでもそうしているわけにはいかない。気を取り直し、

「御坊たちは？」
と尋ねた。
「わしは皮膚坊――そこの二人は守宮坊に、明滅坊……天海大僧正の命を受けて、『叢雲』を破壊せんがために参った者であるが、いやはや、八郎には助力を断られるし、それでは響はどうかと思えば――直前に、トンビにあぶらげさらわれて、成尋衆に拉致されるし、まことに前途多難ではある」
皮膚坊が笑う。
「ご承知のとおり、『叢雲』は五層構造である。成尋衆の棟梁たる成尋は、その最上層にて、連日、修法を――左様、われらが探索いたしたるところ、恐れ多くも、勿体なくも、ご神君・家康公をオン復活せしめんがための修法を――進めておるとのことである」
「え……？」
「家康公が、ご還世なさったあかつきには、ご神君をオン大将にいただき、京か、江戸に、『叢雲』を進軍させる所存とか。――むろん、われらもそのように荒唐無稽で、たわけた話を信じているわけではないが。成尋衆の妖力の凄まじさは、つとに知られたところであれば、あるいは、という一抹の危惧も捨て切れぬところにて――」
「……」
「いずれにせよ、徳川家のためにも、また、ご神君のオン名誉のためにも、断じてそのようなことを実現あらしめてはならぬ。命にかけても阻止せよ――とこれは天海大僧正様よりのご詔にて。すなわち、われら、成尋の修法を阻止せしめるために、何としても最上層まで登りつめねばならぬのではあるが。しかるに――」
皮膚坊の喉仏がゴクリと上下した。その必死の形相がさらにきわまる。
「きゃつらは、この『叢雲』の五層を、六道輪廻に模し、立体マンダラにあらず、立体輪廻あらしめたるよし――」
「立体輪廻……」
「左様さ、輪廻に六界あり。されど、きゃつらには天上界の必要などはない、ということか。実際には、『叢雲』のなかには、畜生界、餓鬼界、修羅界、地獄界、人間界の五界を数えるのみ、ということである」
皮膚坊は右手を突き出した。すでに親指が折られている。それからさらに順々に指を折っていきながら、
「第一層の『畜生堂』には夜叉至が。――第二層の『餓鬼堂』には涅哩底王が。――第三層の『修羅堂』には輪廻孫六が。――第四層の『地獄堂』には孔雀啄が。――つまりは輪廻四獄の悪鬼羅刹が、それぞれの階に詰めておるとやら。これで難関が四つ――最上層の成尋を斃すはそのうえでのことになる」
ついに五本の指がすべて折られた。拳をかためた。拳は震えていた。
滑婆はそれを見て、
――それだけではない。

危うくそういいそうになった。
滑婆が「叢雲」の円塔の屋根に見た人影は六体……もう一人いる。あのもう一人は何者であるか？　が、もちろん、滑婆は真偽さだかならぬことをうかつに口に出すようなことはしない。かろうじて自制した。
「いやさ、まずはそのまえに、外にて『叢雲』を護る『雨』を斃さねばならぬ――成尋衆は数十名の『雨』を擁す。『雨』にはさきほどの鉄砲隊の『雷雨』あり、抜刀隊の『驟雨』あり、それにもう一組、いまだに正体の知れぬ『霖雨』なる組があるとのこと――」
「……」
「明朝、紀州藩が『叢雲』を総がかりに攻める手筈になっており申す。その隙をついて、われらが『叢雲』に潜入する所存でござれば――」
さらに皮膚坊が、低い、血を吐くような声でいう。
「あえて徳川の世のために、とはいわぬ。万民のために、とも申すまい。かく襲撃の手配がさだまったからには、『叢雲』を滅するは、すでにわれらの前世からの因縁のごときものであるゆえに、のう」
と、それに呼応するように、闇のなかに新たな人影が現れた。近づいてきた。
パッ、と皮膚坊たちは立ちあがり、闇を透かし見た。錫杖をかまえた。
「おう、曾肥坊ではないか」
と皮膚坊がいう。

「どうかしたのか」
「『叢雲』が消えた……」
曾肥坊の声が魂を抜かれた者のそれであるかのように虚ろに響いた。
「なに？」
皮膚坊は眉をひそめた。
「『叢雲』が消えたのだ――紀ノ川の堤から消えてしもうた。探したが――それは懸命に探したが――見つからぬ。まるで煙のように消えてしもうた……」
明滅坊、それに守宮坊は動転したようだ。こもごも口に出す声がうわずっていた。
「ば、馬鹿な――あれだけのものがどこに消えるというのだ」
「おぬし夢でも見たのではないか」
「それとも狐狸のたぐいにたぶらかされでもしたか」
何をいわれても、曾肥坊はぼんやり首を横に振るばかりだ。
「ほんとうに消えたのだ……どこにもおらぬのだ……」
「何を愚かなことを――よいわ。この目で確かめてくれようほどに」
まず守宮坊が動いて、明滅坊、曾肥坊がそれにしたがう。
「わしは残る――『桜花』を無人で残してはおけぬ」
皮膚坊だけが落ち着いていた。静かにそういった。
三僧はそれにはただうなずき、墨染めの衣の裾をひるがえすや否や、まるで鳥のよう

に、いや、夜空に舞うこうもりのごとく、星も出ていない夜空に飛びたった。
「蓮――」
蓮は聡い。
滑婆に名を呼ばれただけで、彼女の意を敏感に察して、すぐさま動いた。――ほんとうに「叢雲」が消えたのかどうか、それを偵察するために闇に走り去った。
ややあって、さて、とおもむろに皮膚坊が口を開いて、
「なにかいいたいことがおありになるのではないかな」
「響がさらわれた」
「承知してござる」
「たぶん響は『叢雲』のなかに連れ込まれたんじゃないかと思う」
「ほう、確信がおありか」
「ないさ。でも、そう思う」
「……」
「いっしょに響を助けよう。というか、ぜひとも響を助けるのに、あなたたちの助力を得たい――」
「それはかまわぬが――かんじんの『叢雲』がどこにあるのかがわからないのでは――」
「わかる――」
「ほう」

「わたしなら『叢雲』がどこに消えたのかわかると思う。協力する。だけど、いいかい、これに手をかすのは、わたし一人だけのことだ。伊賀五花撰、甲賀五宝連は一切これにかかわらせない。ほかの者には、このことは黙っていてもらう。それがわたしの条件だ。呑むか」
一瞬、間があり、
「それはまたどうしてかな」
と皮膚坊が訊いた。興味津々といった表情になっている。
「あいつらが好きだからさ。いい奴らだから、一人も死なせたくないから、わたしの妹、弟たちだから――」
「さあ、それは――われらが承知したとて、その儀がかなうかどうか……」
皮膚坊は首をひねりながら、草のうえに腰を下ろし、首の頭陀袋に手を入れる。
「まずはこれに尋ねてみることにいたそうか」
「これ？」
「左様、これじゃ」
袋のなかから取り出したのは小さな髑髏だ。表面に金箔が張られている。人間のものではない。人間のものにしてはあまりに小さすぎる。
滑婆が知らないことではあるが、それは数日前に、浅間神社にて落命した赤ん坊サルの髑髏なのだった。煮沸し、肉をそぎ落とし、よく洗う。そのあとで表面に何重にも金箔を

貼りあわせる……

密教の秘儀によくこうした髑髏が使われる。霊を呼ぶのだという。あるいは守護仏を呼ぶのだという……つまるところ忍法僧などというものは妖術使いの範疇に入れるべき存在なのかもしれない。だとしたら、皮膚坊にそうした秘術の心得があったとしてもふしぎはないだろう。

皮膚坊は髑髏をおしいただき、それを目のまえにかざしながら、ブツブツと呪文を唱えた。そして、さらに髑髏を見つめると、

「これはこれは……」

バッと吹きだした。笑いころげた。何がそんなにおかしいのか。いつまでも笑いつづける。

「……」

もちろん、滑婆には皮膚坊が髑髏から何を得たのかはわからない。何をそんなに笑っているのかもわからない。

ただ、いつまでも笑いつづける皮膚坊を、あっけにとられて見つめるばかりである。

ひとしきり笑ったのち、やおら皮膚坊は滑婆に向きなおり、威儀をただすと、

「いさい承知つかまつった。仰せのままに致すとしようか」

静かにこうべを垂れた。その俯いた顔からは彼の真意を読みとることはできそうにない。

桜花、集うべし

一

高野山は、教学と修行に専心する学侶方集団と、諸施設の管理や雑用に従事する行人方集団とに分かれている。

これまで学侶方と行人方との間で、寺領の所領支配をめぐって、しばしば紛争が生じた。

そのため家康は、学侶方と行人方とを別々の近世領主としてあつかい、それぞれに所領安堵状を与える配慮を示したが、それでもなお両者のいざこざは絶えることがなかったらしい。

あたかも駿河・浅間神社の猿の群れが、いずれが棟梁猿となるのか、あい争うかのように、といおうか。

大坂の陣を挟んで、行人方が徳川家の支持を得て、しだいに学侶方をしのぐようにはなっていったが、それでも完全に圧倒するまでにはいたらなかった。

依然として、両者の抗争の火ダネが消えることはなかったのである。

このころ寛永八年（一六三一）から九年にかけて――
高野山に奇妙な噂が流れた。
この時期、行人方の有力者が率先し、御影堂が再建されつつあった。
いうまでもないことだが、御影堂はかつて弘法大師空海の生前の住房だった仏堂である。
生前、といったが、弘法大師空海は入定後（死後）もなお奥の院の霊廟にて生きている、という入定留身信仰がある。
その弘法大師空海が、徳川の御代を寿ぐために、奥の院霊廟からお出ましになられる、という風説がまことしやかに囁かれたのだった。
そのためにこそ御影堂は再建されなければならないのだ、と……
その先、噂はさらに奇怪な相貌をおびることになる。
入定してなおこの世に身を留めているという弘法大師空海が、わざわざ奥の院から東照宮までお渡りになられるというのに――
権現家康が入滅なされたままであるはずがない、というのだ。
権現家康公もまたこの現世に復活するのではないか！　家康公再誕ありせしばこの世はどのように変わってしまうのだろう？
もとより、これは噂である。
たんなる風聞にすぎない。

が、それゆえになおさらのこと、この噂、風説は、学侶方、行人方双方に、なにか不気味で、奇怪な印象を残すことになったのであるが。――
鯛七弦、碁石才蔵、甲羅式部の三人は、大和国から紀ノ川筋を下って、高野山へと急いでいた。
もとより三人、別行動である。
忍者の足は速い。一日、四十里を稼ぐという。一緒に動けばいやでも人目についてしまうからだ。
高野山まで三里のところに本街道と脇街道が交叉する辻がある。
そこで三人、合流する約束になっていた。
鯛七弦がほかの二人に先んじて紀州領に入った。
すでに夕刻にさしかかっていた。日はまだ明るい。
その辻の街道筋に武士の姿を見た。
辻のわきに大きな桜の木がある。
その幹に背中を凭せかけ、草深い野に腰をおろし、休んでいるのか、眠っているのか、深々とうなだれている武士の姿があったのだ。
深編み笠をかぶっているために、その容貌を見てとることはできない。ただ大小を鞘ぐるみ、腰からなかば引き出して、その下げ緒をしきりに右手で繰るようにしているのが、

多少、目を惹いた。
深編み笠に桜の花びらが散っていた。
七弦は、目の端に武士の姿をとらえはしたが、気にもとめずに行き過ぎた。
辻を抜け、両側に満々と桜が覆いかぶさる隧道のようなところに足を踏み入れ、四半刻（三十分）ほど歩いて、はじめて異常に気がついた。
行けども、行けども、その桜の隧道から出ることがかなわない。
まるで魔物が巣くう、桃色の無限地獄にさまよい込みでもしたかのように、どこまで行っても、桜、桜、桜……の隧道が尽きることなく、ひたすら延びているのだ。それこそ気が狂いそうなまでに。——
半刻（一時間）、一刻と歩きつづけるうちに、しだいに狂おしい想いがつのり、いつしか意識がもうろうとかすんでいった。
その茫々たる脳裏に、ただ桜の花びらだけが、妖、として舞い散って、いやがうえにも気力を削がれずにいられないのだ。
——そういえば成尋衆に輪廻孫六という忍者がおるそうな。『金剛楼閣』という忍法を使うのだと聞いた。どうやらおれはその『金剛楼閣』に引きずり込まれたらしい。
ようやくそのことに思いいたったが、時すでに遅い。
——何はともあれ、この『金剛楼閣』から逃げなければなるまいよ。
そう自分にいい聞かせたが、もう一つ切迫感を覚えない。それというのも、

——どうもこういうのはおれの任ではないなあ。おれはどちらかというと女専門の忍者だからなあ。
七弦にその自覚があるからだ。
あごを指で掻きながら、いや、そうともいえないか、と苦笑する。
——いまや、そちらのほうもあまり得意とはいえぬかもしれないからなあ。
忍法「松籟」——いったん女人とまぐわえば、その女人は七弦を恋いこがれて、狂乱したようになる……これが七弦のいわば表芸ではあるのだが。
七弦にとって深刻でもあり、一面、喜劇的でもあるのは——
彼はじつは生まれながらにそのことに対して淡泊なのだ。好きではない。
女人を性の虜囚なさしめて、その色仕掛けをもってして諜報、謀略のかなめに利用する……それを期待されるべき忍者が、その肝心かなめたる性交をあまり好きではない、というのだから、これは冗談では済まされない。じつに忍者失格といっていいほどなのだ。
そもそも女人を対象とする術者でありながら、七弦はこれまで本気で異性を好きになったことがない。あの色っぽい涙に対しても、一緒に術の研鑽をしあっている仲でありながら、これまで一度として好きだと感じたことはない。二人の間に何らかの感情があるとしたら、それはいわば同志愛のようなものであるだろう。それに——
どうやら涙にはほかに好きな相手がいるようなのだ。彼女はそのことを深く胸に秘めていて、もしかしたら自分でも気づいていないのではないか、と思われるふしさえあるのだ

が、「女性専科」の七弦にはそれが手にとるようによくわかる。相手が誰かまではわからなかったが。

ただ、七弦は自分でも気づかずにいたが、そのことに対する深い渇きの念があった。

――さて、どうしたものか。どうやってこの「金剛楼閣」を抜けたらいいものか。

七弦は思案にくれた。――茫乎とした視線を桜にさまよわせる。そして、その視線の先に……

めくるめく白光が炸裂し、そのまばゆい光の氾濫のなか、頭に宝鏡冠を戴いて、白衣をまとい、短衣の襦袢のうえには瓔珞、手には腕釧、様々にきらびやかな宝飾を身につけた女人が姿を現す。

「あ……」

あとから、このときのことを思い返せば、そのことがふしぎに感じられるのだが――自分が異常なものを見ているという自覚がなかった。それどころか妙な懐かしささえ覚えた。

子供のころに慈尊院村の堂宇に安置されている観音像を見たことがある。

――この観音様は観音三十三応現身のうちのひとつ、合掌観音と仰せられる。白衣を着て、合掌すれば、延命、安産、求児、育児の利益がある。すなわち母の慈愛を化身なさる観音様であらせられる。念じる者の心がけひとつで、やはり観音三十三応現身のひとつ、その魚籃にてひろく衆生を救いたまわるのだという魚籃観音にも変化なされば、また憤

裸形の六臂像・阿修羅神にも変化なさるのだという。

寺の和尚にそう教えられたのを子供心に覚えている。そうか、これは母者の観音なのか、と子供心に納得した。胸に染みた。

――母者……

これが幼いころに母を亡くした七弦の渇きの正体なのだった。母に対する渇望が、その思慕の念が。――その想いがあまりに強くあればこそ、「女性専科」であるはずの七弦が、いまだに心の底から女性を愛することができずにいるのだった。

いま、その合掌観音が現身にオン現れになられたのに、

――母上様、母上様……

幼子のように無心に呼びかけ、手をさしのべる。

合掌観音もまた、その手にした白蓮華をさしのべて、艶やかに笑いかけ、

――甲賀五宝連の碁石才蔵、甲羅式部のことを教えよ。碁石才蔵はいかなる術を使うのか。また甲羅式部はなぜにあのようにいつも甲冑、面頬で身を鎧っているのか。

そう尋ねかけてきた。

その顔は、成尋衆のうちの一人、夜叉至のそれになっていたのだが、もちろん七弦がそのことを知ろうはずはなかった。

「おい、何をぼんやりしてるんだ」

そう声をかけられ、ハッ、とわれに返ったときには、目のまえに碁石才蔵、甲羅式部の二人の顔があった。

「あ、いや……」

七弦は急いで立ち上がり、顔を撫でおろした。その手のひらに粘つく汗を覚えた。

二人を待っているうちに眠り込んでしまったのだろうか、と自問した。なにか不自然な意識の空白があった。妙な夢を見たように思うが、どんな夢だったのか覚えていない。あれは……

「慈尊院村は近い。急ごうぞ」

才蔵にうながされるまま、

「あ、ああ……」

七弦はなにか釈然としない思いを抱いたまま、ぼんやりと歩き出した。

三人が行き去ったあと、舞いしきる桜の花びらのなかに、蒼然と、これもやはり三人の人影が浮かびあがった。

輪廻孫六、涅哩底王、夜叉至の三人であった。

涅哩底王が、ホッ、ホッ、と笑い、

「見事、わが『魔獣召喚』の術と、夜叉至の『宿命通』の術を合体することができたではないか」

そういうのに、

「これで、あの蜩七弦という男、われらのいいなりに、いついかなるときにも仲間を裏切ることにあいなりましょう。五宝連にとってはまさに獅子身中の虫なれば。それに――」

夜叉至は婉然と笑い、

「碁石才蔵の『百目』なる術がどのようなものであるかを知り、甲羅式部がなぜに全身を鎧っていなければならないのかをも知ったいま、五宝連を滅ぼすは赤子の手をひねるより、たやすいことでありましょう」

「甲羅式部という男、つねに鎧って、体を外側から押さえつけていないと、肉が爆ぜてしまうのだという。面頬を外せばどうなるか。顔が爆ぜるかどうか、見てみたいものよ、のう」

輪廻孫六が、いつもながらに重厚で、沈鬱な、しかし、その口調に似つかわしくない、ひどく残酷なことを口にした。

二

この夜、興山寺の東照宮家康廟に忍び込んだ賊がいる。

ひとしきり闇から闇に、丹念に影を拾い集めるように、あまねく廟を渉猟した後に、ついに格天井から屋根にあがった。

屋根からは、紀ノ川の堤に、おびただしい松明の灯が、参集をくり返しているのが望見

できる。そのどよめきをかすかに風が運んできた。
突然、鳳輦車が堤から消えてしまったことに、紀州藩士らが上を下への大騒ぎになっていることは想像に難くない。この世にありうべきことではないからだ。
が、その影は、そのことについて、とりたてての感慨はないようだ。身じろぎもせずにいる。
「ここには家康の遺骸はない。骨もなければ灰もない……ここではない。ここでなければ、どこなのか。それとも――」
そうつぶやいて――星さえ見えない夜空に飛影を残し、むささびのように屋根から屋根をかすめ去った。
いうまでもない。これは甲賀八郎だ。
闇の底を疾走する。
奥の院・霊廟前の灯籠堂に向かう。
家康廟には数えるほどの灯明しかなかった。人もいなかった。
が、ここ、灯籠堂はちがう。さすがに入定し、なお数百年、この世に身を留めおき、いまにいたるといわれる弘法大師空海の廟だけのことはある。灯籠堂にはおびただしい灯明が灯され、何人か不寝番の若い僧の姿もあった。
もちろん甲賀八郎にあっては、どれほど灯明があり、不寝番がいようと、そんなことはものの数に入らない。

闇を盗んで、影を拾って、灯籠堂のなかに忍び込んだ。
そう、たしかに八郎にとって、あまたの灯明も、不寝番ものの数に入らない。困難とするには当たらないのだ。しかし――
「う……」
これはどうだ？　これをどう理解すればいい？
この灯籠堂あまねくところ、いたるところに偏在しながら、それでいてどこも特定できないそこに――
目に見えない、しかし、たしかに存在する厚い壁のようなものが、厳として立ちはだかっているのが感じられるのだった。山のようにそびえたっていた。
「しゃあ」
八郎はほとんどそれに体を跳ね返されていた。反射的に飛びすさり、忍び刀に手をやった。柄に触れる手がかすかに震えた。八郎ともあろう者が怖かったのだ。恐ろしくてならなかった。――なにしろ圧倒的な存在感なのだった。
――あまりに大きい。大きすぎる。
これはこの世のものではない。しかし、あの世のものでもない。彼岸と、此岸の双方にまたがるように在るのだが――それはある意味、無い、ともいえるような独特な在り方でもあって――生、死、そのいずれにも慈愛の目を配り、しかし、必要とあらばいつなりと降魔の剣を振るうのを辞さない冷徹な力に裏打ちされてもいて――つまり、これは、この

存在は……

——ああ！　弘法大師空海様！

どうっ、と豪風に吹き飛ばされる思いがした。あたかも風にさらされた、かぼそい灯明でもあるかのように、自分という存在があっけなくかき消される気がした。

「あ——」

と叫んで、危うくその場にひれ伏しそうになった。が、しなかった。どうしてしなかったのか、耐え切ることができたかは、自分でもわからない。

なにか忍者の矜持とでもいうようなものが働いたのか？　そうだとしたら、偉大なる弘法大師空海をまえにして、虫ケラのような忍者が何を人がましいことを——と自嘲せざるをえない。笑止、というほかはないのであるが。

ただ八郎は、この弘法大師空海の不可視の存在感に対して、なにか漠然とした既視感のようなものを覚えたのだ。そのことは、まぎれもなしに事実といっていい。

漠然とした既視感……比べるのさえ恐れ多いことながら——それは八郎の「有情」、響の「桜花」、その双方またがるところに展開される、あの「異時空間」に共通するものがあるように感じた。

そう感じたとたんに、持ちまえの反骨精神が不敵に頭をもたげるのを覚えた。何かが八郎のなかでグイと肩をそびやかした。

——似ている……であれば何も一方的にそれを恐れることはない。

不敬か。たしかに。不遜か。まちがいなく——しかし、元来、忍者というものはそういうものだったのだ。決まったあるじを持たずに、報酬によって、雇用を転々とする、いわば傭兵として生きていた。もともと忠誠心にとぼしいし、信仰心などなきに等しい。要するに、不逞のやからだ。

いまの弘法大師空海はあまねく偏在する。ここにありてあそこにあり、あそこにありてここにある……その意味では、まさに神に匹敵する存在といっていいだろう。

なるほど、徳川の男たちはこういうものになりたいと念じたわけか、と八郎は内心でうなずいた。何かがわかった、いや、わかりかけた気がした。

八郎は真言密教には門外漢だ。何も知るところがないし、そもそも仏道には何の興味もない。弘法大師空海の偏在する「気配」に圧倒されこそすれ、それをありがたいと思う気持ちは薄い。もともとが罰当たりなタチなのだ。

それどころか、弘法大師空海の盤石のような存在感に押しひしがれそうになりながら、八郎が真っ先に考えたのは、見えない相手に矛眼術を放つことは可能か、というそのことに尽きた。つまり、

——神におれの矛眼術は通用するか。

ということに。

が、それを考えるのは、いまの八郎には荷が重すぎることだった。それに、これ以上、弘法大師空海と共にありつづけることは精神的にも肉体的にもあまりに負担が大きすぎ

た。とても耐えられそうにない。
「ここでもない。ここでなければ、どこなのか……」
八郎は身をひるがえした。灯籠堂から、弘法大師空海から一目散に逃げた。
そして——
ついにそれに行きあたることができたのだ。とうとう目的とするものに遭遇することができたのだった……

三

……高野山寺域は広い。院、塔の数はかぎりがない。八郎にしてもその全域をすべて知悉しているわけではない。そんなことはとても不可能だ。
その広大な寺域をくまなく探索した。いつしか夜明けが近づいた。
だから、それがどこであるのか正確に知ることはできなかった。そこかしこ跳梁しているうちに偶然に出くわしたからだ。
——これだ。
が、見たとたんにそうと確信した。体が反応した。
それを眼下に見ながら、寺院の大屋根から大屋根に走った。
全速で走りながら瓦一枚鳴らさない。さすがの体術だ。

それは——暗い寺域をしずしずと移動する一群の男たちなのだ。十五人、いや、二十人はいるだろうか。
その半数近くが松明を持っていて、そのまわりだけが真昼のように明るい。何にしても異様な集団というほかはない。
六人もの男たちがうやうやしく架台を運んでいる。見るからに立派な作りの架台だ。そのうえに、金糸、銀糸であやなされた豪奢なうちかけがかけられた何かが載っている。いや、いまさら、何か、などと言葉をつくろう必要はないだろう。
架台につきそう男たちがしきりに香炉を振っているのを見れば、それが何であるかは一目瞭然だからだ。死骸なのだ。香は死臭を消すために焚かれている。香炉からたちのぼる煙は、赤、黄色、緑とさまざまに色あやなして美しい。
一行の先頭には白い礼装の子供が二人、わきに抱えている大カゴから花を取りながら、それをしきりに撒いている。
つまり、その架台で運ばれているのは、最大級の敬意を払われるべき貴人である、ということだ。
——あれだ。あれに相違ない。
八郎はそう考えた。そう見た。
さらに疾走した。
いかに甲賀八郎が優れた術者であろうと、一人で鳳輦車を襲撃するのはむずかしい。ま

してや、一人で鳳輦車を撃滅するのは、ほとんど不可能に近いことだろう。それよりも、鳳輦車に搬送される家康公の遺骸を、その途中で襲い、これを破壊するほうが、はるかに成功率が高いだろう。

八郎はそう考え、ひそかに隙をうかがっていた。

そして――

昨日、突然、鳳輦車が紀ノ川堤から消えた、ということを聞いて、今夜こそが、家康公の遺骸が搬送される可能性がいちばん高い、とそう見込みをつけたのだ。

その見込みがまさに的中した。

それが木乃伊であれば焼きつくす、骨であれば粉々にして川に捨てる、灰であれば風に撒く……その不屈の覚悟で高野山に潜入したのだったが。

――これは何だ？

いま、寺院の大屋根からのぞむその遺骸の、この異様なまでの迫力をどう考えるべきだろうか。ひしひしと何か波動のようなものが押し寄せてくるのを感じるのだ。相手は死骸なのに――いや、死骸であればなおさらのこと、その存在感の巨大さにいまにも圧倒されそうになるのを感じる。

それはあの弘法大師空海をまえにしたときに劣らぬ、いや、もしかしたらそれにはるかにまさる巨大な存在感であるかもしれない。

だが、死してなお、弘法大師空海にまさるほどの存在感を発揮する――そんな人間がはたしてこの世に存在しうるものなのか。そもそも、それを人間と呼んでいいものか！

たぶん、それを感じとることができるのも、八郎に矛眼術があり、「有情」を感じ取り、異時空間に身を置いた体験があればこそのことだろう。ふつうの人間であれば、それをわずかなりとも感じることはできないにちがいないのだ。

が、いずれにせよ、その圧倒的な迫力を放つそれに、いつまでも怯んでばかりはいられなかった。その遺骸が何者であるにせよ、あるいは何であるにせよ、これを襲って破壊する、と決めた以上、それを実行するほかはないのだった。

――ままよ。

八郎は男たちに向かって飛び下りようとした。一気に切り込もうとした。

が、そうはならなかった。

それというのも、そのとき――

背後から、バッ、と桜の花びらが大量に吹き寄せてきて、それが八郎の頭上を越え、目のまえに、燦然、滝のようになだれ落ちたからだった。

それが見るまに、妖、と一ヵ所に吹き寄せられ、瞬時に人の姿を取った。

そこに妖艶と立つは、大振り袖に、精好織りの袴、その襟にさした一輪の桜の花も華やかな、前髪だちの美少年。――

「やあ」八郎があげたその声には懐かしそうな響きさえあった。「孔雀啄ではないか」

「はい」少年は花のように微笑んだ。「いかにも孔雀啄でございます」

四

夜が明けつつある。

が、いつもの夜明けのようではない。

異様なまでの濃霧が地上を覆っている。大地の釜からたちのぼる蒸気のように濛々とたちこめて視覚を奪う。聴覚さえも閉ざす。憂愁の厚い壁を下ろして人がそこから脱するのを許さない……

ここは慈尊院村に近い段丘状台地だ。背後、紀ノ川を指呼の間に見ながら、岩塊が層々と積み重なっている。ここもまた濃霧に包まれて視界がさだかではない。

その濃霧がふいに動いた。——流れた。揺れた。波うった。

大船の舳先に切り裂かれるのを見るように——ゆるやかに尾を残し、渦を巻きながら、徐々に左右に分かれていった。

そのあわいに見えてきたのは、磊々と岩層を積みあげた絶壁と、それを覆うツルや、蔦、シダ、鬱蒼と生い茂る灌木林の濃いみどり。——

いま、その植物群がざわざわと波うったかのように見えると——舞台の幕が開かれるように——左右にしずしずと開いていったのだ。

そこに大洞穴が黒々と口を開いた。

慈尊院村の村人たちもこんなところにそんなものがあろうとはほとんど知らないのではないか。これまで崖面を植物群に隠されて人目に触れなかったからだ。

じつのところ、洞穴と呼ぶには、それはあまりに巨大すぎるかもしれない。高さが数十メートルにもおよぶ。上部を岩天井に覆われているものの、それはほとんど渓谷と呼んでいいほどの規模を有している。いわば隠れ渓谷だ。

その隠れ渓谷とも大洞穴ともいうべきそこから現れたのは——

「叢雲」なのだった。

巨人が立ちはだかるように天地を圧した。動き出した。

進むにつれ、霧を奔騰させるように激しく波だたせた。ツタを引きちぎり、ツルを引きずり、木々をへし折り、枝を散らした。轟音が鳴りわたった。そして。——

バァッ、と全山の桜が散った。

濃霧にまぎれて花びらがまるで吹雪のようだ。霏々として降りしきる……

そのなかを「叢雲」の影が移動する。それにしても——この巨大さはどうだ。

その円塔を空に突き刺さんばかりに聳えさせているのだ。——あまりに高いために、その頂部を曇天とも濃霧ともつかない空間にけぶらせ、溶け込ませ、それをさだかに見ることができないほどなのだ。

灰汁を流したような天涯空間に。——

キューン、キューン、と鵺の鳴き声めいた奇怪な機械音、金属音を反響させながら、ゆ

つくりと、それこそ蝸牛が這うようにゆっくりと霧のなかを進んでいる。

足部に履いた「無限軌道」が容赦なく岩盤を圧し潰すのか。濛々と砂埃が舞いあがってそれがさらに霧の陰影を深める……

その霧のなかを人影がよぎる。まるで猿のように敏捷に岩から岩に飛び移って移動する。霧のあいだにチラチラ見え隠れするその姿は、いずれも僧衣、総髪、山刀をさしている。声をたてず、衣擦れの音さえたてず、まるで驟雨が地を掃うように静かに移動する。

「あれが――」

と、忍者話法の、声ではない「声」が聞こえてきた。

「真田の抜け穴でござるか」

声ではない「声」なのに、誰のものだかわかる、というのも妙な話ではあるが――それは皮膚坊の「声」のようだった。

「そのように伝わってはいるようですが」とこれは滑婆の「声」だ。

「真田様が九度山に隠棲される以前から、あのような抜け穴があると、土地の古老たちの間ではいい伝えられていたとのことです。真田様と、あの大洞窟とは、本来、何のかかわりもないとのことです」

「つまりは俗説か」

「はい、そのようです」

高野山・九度山に、慶長十九年、冬の陣が始まるまで、真田父子が隠棲していた。その

ころから真田の抜け穴がある、という言い伝えがあったのだが、現代では、じつはそれは古墳時代末期に築造された横穴式石室のことだった、というのが定説になっている。

といっても、そのいわゆる真田古墳は、数メートルの玄室と隧道からなる、ごく小規模なもので、そこにあるそれとはちがう。紀ノ川周囲には、陵山古墳など大小の古墳があり、いま「叢雲」が出てきたそれも、そうした古墳の一つなのにちがいない。

じつに、その古墳横穴は、紀ノ川の下をくぐって、高野山側から、紀伊藩領まで通じているようなのだ。植物群に覆われているために、土地の古老たちもすでにその正確な場所を知らない者が多いのだという。

かくして「叢雲」は高野山側から紀伊藩側へと紀ノ川を渡りきった。――

どうして成尋衆が土地の古老たちすらさだかには知らないこの古墳道の存在を知っていたのか？　それは誰にもわからないことであろうが。

いま――

皮膚坊、曾肥坊、守宮坊、それに滑婆の四人は、「叢雲」を見おろす丘陵地の、点在する岩かげに身を潜めている。

また皮膚坊の「声」が離れた岩陰にひそむ滑婆に届いた。

「それにしてもさすがは落としの滑婆であるわい。ようもあの抜け穴のことを事前に調べあげておいたものよ、のう」

「習い性、になっておりますれば」

滑婆の含み笑いが霧にそよいだ。
「どこに身を置いてもまず、そこからどう抜けるのかを真っ先に調べるのが、癖になっておりまする」
「なるほど――それにしても、なぜにそう熱心に、このことに当たるのか。いやさ、響を助け出したいという思いがあるのは、重々、承知のうえのことではあるが――それにしても、のう」
一瞬、ためらうような間があり、
「はい、ある尊いご身分の女性とのお約束がございましたゆえに――」
「ほう、約定とな。それはまたどのような？」
「徳川の男が『神』にならんと欲するのを何としても防いで欲しい、との」
「何？」
「さあ、そのときにはそれがどういうご依頼なのか、よく腑に落ちませんでしたが……いまはそれが、『神』たらんと欲するほどに貪欲、恥知らずな権力の鬼たる男たちから、女たちの身を救って欲しい、無事に落として欲しい、とのご諚であらせられたに相違ない、とそのように得心するにいたりました――」
「……」
「あの『叢雲』あるかぎり、世はいずれまた乱世にたち戻ることになりましょう。そうなれば、そのにえにあいなるは、また女子供でありましょう。いかにおとしのわたしが、女子供を城から落としても、落としても、ついには落とし切れぬ、という仕儀になりかねましょうほどに」
「はて、わかったようなわからぬような――して、その尊いご身分の女性とはどなた様のことでござろうかな。さしつかえなければお教えいただきたい」
「故・大御所秀忠卿のご正室・大御台所・江様でございます」
「な、何と――」
「それに豊太閤・秀吉様の両御台様……高台院おね様、淀君様のお二人にて――」
「……」
さすがの皮膚坊があっけにとられたようだ。もう「声」は滑婆のもとに届かない。もしかしたら滑婆の正気を疑ってさえいるのかもしれない。
それも当然だろう。たかが知れた女忍が、先の大御台所様に拝謁の栄にあずかった、というだけでも信じがたいのに、太閤秀吉の両御台にお目見えしたなどというにいたっては正気の沙汰ではない。
そもそもこの女忍は何歳なのだろうか。その年齢からいっても豊太閤の両御台に拝謁するなどありえない話ではないか。
が、もうそれ以上、滑婆に説明するつもりはないようだった。
いや、説明しようにも、すでにその時間がない。「叢雲」はその全容をあらわし、濃霧のなかを着実に前進しつつある。どこに？　慈尊院村に向かって。――

「もう詮索なさいますな。皮膚坊様……すでにしてここは戦場にてございますれば」
滑婆は明るい笑い声を放った。
岩のうえにひらりと飛び乗った。
柿色の忍び装束、左肩にさした短槍と、腰の箙に入れた矢羽を、背にぶっちがいにして、忍び刀を落とし差しにしている。夏の陣にて、千姫を落としまいらせて以来、じつに十数年もの間、彼女がこの装束に身をかためたことはない。颯爽と、若々しく、そして美しかった。
きりり、と大弓に矢をつがえる。空に向けた。
鏃で煙をたちのぼらせているのは狼煙だ。
滑婆はじつに炸薬をあつかうのを得意とする女忍なのだ。
木炭に硫黄、それに硝石を混ぜ、ありとあらゆる種類の炸薬を使いこなす。発火剤としての炸薬、時間差をもって順次に着火なす炸薬、大音量を放つ炸薬……いずれも女人を落としまいらせるときには欠かすべからざる必需品である。
その鏃の先——
霧と雲とが濛々とないまぜになって暗灰色にたなびく空に、大御台所・江様のお顔が浮かんだようであった。
——思え、徳川家のもとに天下が巡り来たるまでに、どれほどの良民たちが無惨にあい果てることになったことか、どれほどの無辜の女たちが悲嘆の淵に沈むことになったこと

か。どれほど大勢の後家、尼僧たちが身の危険もかえりみず、戦地を往還し、持てる外交術のかぎりをつくし、平和浄土の実現のために奔走したことか。
また、そこに霧のようにたなびき、雲のようによぎるのは、伊賀の女忍たち、甲賀の男たちの貌でもあった。
「かわいい伊賀の妹たち、頼りない甲賀の男たち——見てな。派手にぶちかますよ」
滑婆は笑った。
精悍、凄絶きわまりない美しい雌豹の笑顔であった。
はっし、と矢を放った。
矢は霧を引き裂いて、空に飛び、真っ赤に発光した。——濃霧の空があかあか照らし出される。
それを見とどけるとすぐさま上着を脱いだ。
その下に、薄い、とても薄い布地を何枚も重ね着している。あたかもレースのように透き通ってその下に肌がかすかに見えた。その一枚に、
——あらいかに煩悩おとし候べきか。
の文字があった。ほかの文言もその下に透けて見えるようだ。これは要するに、おとし茶屋の幟なのだった。それを何枚も縫いあわせ、つなぎあわせ、いわばハンググライダーのパラシュートのようにしている。
滑婆は巌頭に立った。空を仰いで、両手をひろげた。

まるで天女の羽衣のように着衣が大きくひろがった。たたみ何畳ぶんかの広さはありそうだ。いや、もっとか。それが風に膨らんで優雅にたなびいた。

これは伊賀の女忍に伝わる蜘蛛の糸を縫い合わせた布地なのだった。蜘蛛の糸は弾丸さえも跳ね返す強靱さを持ち、しかも非常に薄い。軽い。それゆえに十分な大きさがあれば、風をはらみ、その浮力で、優に人間の体を持ちあげることができる。

滑婆は巌頭から崖下に身を投じた。

落ちずに、風に乗った。

そのまま、濃霧のなかを、「叢雲」に向かって、静かに滑空していった。濃霧にさえぎられ、とぼしいはずの陽光が、しかし、その「羽衣」にだけ集中されたかのように、純白にきらめいた……

このとき成尋衆と伊賀・甲賀連合隊との最後の戦いが火蓋を切って落とされたのだった。——

五

「それに——」

と、これは屋根の上方から、ホッ、ホッ、ホッ、と笑い声が降ってきた。

「存じよりの涅哩底王もここにおるわい。いや、久しいぞよ、甲賀八郎、じつに久しいではないか」

涅哩底王は、八郎の上方——屋根のうえに、肘枕で身を横たえていた。あいかわらずの長い道服姿だ。とねりこの杖を、体に引きつけるように、横に置いている。

二人の姿がほんのり浮かびあがるように見えているのは、すでに夜明けの光が射しかけているからかもしれない。屋根の縁がかすかに蒼い光を放っていた……

成尋衆の化け物二人をまえにして、しかし八郎に恐れの色はない。平然と孔雀啄を見やって、

「おまえは歳をとらぬのか」

とそう訊いた。

「おれはご覧のように子供から大人に育ったが——いまもおまえは前髪だちのままではないか。いまではおれより年下のように見える。それでは何かと不便であろう」

「お察しあれ。なにぶんにも、わたくしには『時逆鉾』がございますゆえに、なかなかもって歳をとるのが難しゅうございますゆえに——そんなことより、まあ、あなた様はそのように血相をかえて何をなさるおつもりなので」

「なに、あれに」

と八郎は下を行く遺送の男たちにあごをしゃくって、こともなげにいう。

「切り込むつもりでいるのさ」

「とは物騒な」孔雀の目が光った。「それはまた、なにゆえに、でござりましょうや」
「鳳輦車『叢雲』で復活させるべき遺骸があれに運ばれている、とそう見ているからだ。もっとも、あれがほんとうに家康公のご遺骸であるかどうか、いささか眉ツバ物だとは思っているが――なにしろ、おまえたち成尋衆ほど油断ならない奴らはいないからなあ。本心のところ、何を考えているのか、わかったものではない。なかなかに安心できぬのさ」
ほう、とこれは涅哩底王が感に堪えかねたようにつぶやいた。
「甲賀八郎――おのし、ちょっと見ぬまに、すこし人が変わったような……」
「いずれにせよ――」
孔雀の顔にやや血がさした。八郎の、まるで自分たちを恐れていない様子に、いささか怒りを覚えたのかもしれない。
「あれのじゃまをしてもろうたのでは当方も困じますゆえ――どうあっても、じゃまをするというのであれば、やむをえますまいなあ、一手、お手あわせを願うこととあいなりましょうか」
孔雀は艶然と微笑んだが、その笑いには何がなし、それまでにはなかった凄みのようなものが感じられるようだ。
「あなた様を、ぜひに『叢雲』にご案内せよ、との成尋様のご命が下ったことでもありますし。何やら、あなた様に大切なご用がおありだとか」
「おれに用？」

「左様。あれもあり、これもありで、いいおりでございましょうほどに」
襟もとから、スッ、と桜の枝を抜いて、それを八郎に突きつける。先端の桜の花がわずかに揺れた。
「ほう」八郎は目を丸くした。「その花枝でおれと立ちあおうというのか」
「ときは春、ころも桜の頃――でございますれば、これもまた一興かと」
「なるほどなあ、それは風雅なことだ」
八郎は笑って、
「それじゃ、おれはこれで立ちあうことにしようか」
サッと右手を一閃させた。宙に舞う桜の花びらを一摑みする。その拳を孔雀に突きつけた。指のあいだから花びらがソヨソヨと散りこぼれる。
「バカなことを」
孔雀の顔にはじめて憤怒の色があらわになった。これだけの美少年でありながら――いや、それだけになおさらか、その顔に凶悪無残な悪念があぶり出されるように底から浮かびあがった。
「されば――」
一声発して、その体が動いた。足裏をツツッと瓦に擦るようにして八郎に近づいていった。そして下から斜め上に花枝の一打を放ったのだ。その動きにつれて花びらがパッと舞い散った。虹のように後ろに尾を曳いて流れた。

花枝の動きは一瞬の閃光がひらめくように速い。しかし、散る花の動きはゆるやかに遅い——はずが、ふいにその相対速度に変化が生じた。花びらの速度だけが急に増した。爆風にあおられたようにほとんど吹っ飛んだ。しかも逆動し、瞬時に枝に戻ったのだ。

忍法「時逆鉾」だ。わずかにではあるが、時間を逆流させた。そのためにチリのように軽いはずの桜の花びらが、速度を何倍にも増して、もとの枝に戻っていった。

そんなことが何の役に立つのか？　立つ。

戦士にとって、一瞬の命のやりとり、その須臾の間に、時間感覚をずらされ、間を狂わされることは、文字どおりの命取りになりかねない。いかなる精妙な剣法、超絶の忍法といえども、逆行する時間のなかにあっては、無用の長物たらざるをえないからだ。

しかも孔雀啄だけは逆行する時間のなかを順行することができるのだ。いかなる相手であろうとこれには幻惑されざるをえないだろう。

たかが桜の花枝ではある。が、これは、ほかの者にあらず、孔雀啄が放った一打なのだ。その打撃力は優に木刀のそれにまさる。それをしたたかに食らえば、鼻の骨を折られることにもなりかねない。いかなる豪の者であろうと失神をまぬがれないだろう。それはいかに八郎であっても例外ではないはずなのだが。

これが——じつに例外だったのだ。

最初から孔雀啄に矛眼術は通用しないと見切りをつけていた。その見切りは正しい。いずれ逆行する時間のなかでは、八郎の目から放射される光子は相手の目に届かないからだ。その脳細胞まで達しえないからだ。つまり矛眼術は機能しない。

が、いまの八郎には、よしや矛眼術が通用せずとも、それに替わる、それから派生した「有情」がある。

孔雀が花枝の一打を放つのより、一瞬、早く——拳を口に当て、それをフッと吹いた。指のあいだから花吹雪が華麗にひろがった。と同時に「有情」を起動させた。花びらは「有情」のなかに舞う。

もともと「有情」は一種の疑似時空間なのだ。そこでの空間としての性質のありよう、時間の働きは、通常のそれとは大きく異なる。ほとんど想像を絶し、理解を絶するものがあるといっていい。

たしかに、逆行する時間のなかでは、拳から吹き出された桜は花吹雪にはならないはずだろうが……それは通常時空間のなかでのことであり、「有情」ではちがう。そもそもの物理法則が異なるのだ。

つまり、孔雀啄の「逆行された時間」のなかに、八郎の「有情」がくさびのように食い込んだのだ。花吹雪は——逆行された時間のなかをではなく——「有情」のなかを、燦々とひろがった。

八郎は「時逆鉾」にて惑乱されたし、孔雀啄は「有情」にて悩乱された。桜の花びらの幻惑きわまりない動きが二人の判断を狂わせた。そのかぎりにおいて、これは相撃ちといってもいいかもしれない。

実際に起こったことはこうだ。
八郎の場合。——たしかに孔雀の「時逆鉾」に感覚を狂わされはした。が、そんなことでその運動神経に遅滞を生じさせたりはしない。顔にたたきつけられようとした桜の枝を下からの手刀できれいに折った。宙に舞いあがった枝をもう一方の手で受けとめる。その切り口は刃物のように鋭かった。それを一閃させ、その先端を、孔雀の顔に走らせた。
孔雀はどうか。これがなみの忍者であれば桜の花枝を切り飛ばされたことに動揺したことだろう。が、孔雀はちがう。「有情」に驚愕はしてもそれに怯んだりはしない。むしろ、その切り口が刃物の鋭さを増したことに勢いを得た。それをさらに加速させた。八郎の顔に走らせた。
「えやあっ」
「とうっ」
二人は火花が散るように宙に飛びちがった。
桜の花びらが二人を包んで桃色の尾を曳き流した。
一瞬の後に——
八郎はそれまでの孔雀の位置に、孔雀はそれまでの八郎の位置に足場を移していた。二人の手にはそれぞれに桜の枝があった。
そのとき二人の顔に、一筋の、ほんの一筋だけ曙光が射した。
曇天だ。陽は弱い。

ぼんやり照らし出されたその顔に——
甲賀八郎のひたいから流れ落ちる血、孔雀啄のほおからしたたり落ちる血が、紅色に映えた。
と——
「おお、あれは何じゃ」
涅哩底王の素っ頓狂な声が夜明けの空に響き渡った。
暗褐色の空に狼煙があがっているのだ。それも忍者に特有の狼煙のようだ。消えぬ、落ちぬ——いつまでも白光を放ちながら宙空にとどまっている。
「孔雀啄、こうはしておられぬて。急げ」
涅哩底王は道服の裾をひるがえし風をくらったように屋根から飛び去っていった。
孔雀啄は指で、スッ、とほおの血を拭うと、それをペロリと舐め、艶やかに笑った。
「甲賀八郎、『叢雲』に来い。むろん、われら成尋衆も待っているが、待っているのはわれらだけではない」
「なに、それはどういうことだ?」
「響だ。響はわれらがもとにいる」
「響が……」
八郎の声が上ずった。孔雀のもとに駆け寄ろうとする。孔雀は後ずさりながら笑い声を放った。思わず顔をそむけたくなるほど毒々しい悪念のこもった笑い声だった。

「取り返したくば『叢雲』まで来い」
孔雀啄の体がひらりと宙に舞う。
「待て、卑怯であろう」
が、その声は虚しく空に消え、花びらを散らせただけにとどまった。そのときにはもう孔雀啄の姿は消えていた。
むろん、あの遺送の一行もとうに寺域から消え去っていた。
八郎は呆然として空の狼煙を見た。
「あれは……」
つぶやいた。
「滑婆の狼煙――」
大屋根から見やる高野山の谷に濛々と濃霧がたちのぼるのが見えていた。

桜花、咲くべし

一

「起きな」
声がした。久しぶりに――どれぐらいかも覚えていないぐらいに――じつに久しぶりに聞いた蓮の声だった。
が、伊賀の女忍だ。そのことに驚くよりも先に体のほうが反応した。飛び起きた。
現、それに涙の二人――莫蓙に転がった。ネコのような身のこなしだ。もともとは蚕室に使われていた部屋だ。広い。
隅に隠し戸棚がある。戸棚は五段。女忍五人のそれぞれの忍び衣装、忍び刀、手甲、鎖帷子、手裏剣、クナイ、マキビシなどが格納されている。
息を三つか、四つ、つぐ間に忍びの身支度を整えたのはさすがだ。一気に階下に駆けおり、外に飛び出した。
職場たる「おとし茶屋」は高野山寺領側にある。毎朝、響たちは渡し船で、慈尊院村から高野山寺領に渡るわけなのだ。――慈尊院村にある住まいは、いわば「おとし茶屋」の

寮のようなもので、働いている全員がそこで寝起きしているのだった。——それがいまは誰もいない。

いや、蓮がそこにいた。

辻に立っている。——あの蓮根銃を持って空を見上げた。

「どうしたんだよ、蓮——」

「何があったのよ」

二人、蓮のもとに駆け寄った。そして自分たちも蓮の視線の先に目をやった。

「……」

霧が濃い。まるで噴煙が地上から立ちのぼっているかのように濛々と空を暗灰色にけぶらせている。もうすでに朝日は東天に射しているはずなのに、重く垂れ下がった雲はほとんど夜のように暗い。いや——

その濃霧とも、曇天ともつかない空に、一筋、赤い光芒を曳きながら、狼煙があがっている。宙の一点にとどまって光りつづけているのだ。

遠く、その狼煙の残光のなかに、城郭のようなものが、一瞬、切り取られるように浮かびあがるのが見えた。しかも動いていた。

「え、何、あれ、お城？」

と、現がいう。

「ちがう、あれは」

と、涙がいう。

「『叢雲』だ——」

高野山寺領にあったはずの「叢雲」がいつのまにか紀州藩領側に渡ってきている……

「どうして？」

「どこから」

二人、目をみはってそれを確かめようとした。しかし、そのとき——狼煙が霧に吸い込まれるように消えた。

が、なおも濃霧のなかに「叢雲」は巨大な陰影を残したままだ。ときおり、背景の曇天を蒼い閃光がかすめるのは、雷雲でも近づいているのかもしれない。かすかに雷鳴が聞こえてきた。

「あれって——滑婆の火炎術だよね」

「ということは——」

二人、顔を見あわせた。

——滑婆は「叢雲」近くにいる！

また雷光がつづけざまにひらめいた。——その度ごとに「叢雲」の城郭めいた姿形が、青い輝線に輪郭を縁どられつつ、パッ、パッ、と浮かびあがっては消えるのをくり返すのだった。なにか非常に不吉な印象を受けた。しかも、それがあたかも小山が揺らぐように慈尊院村にじりじりと近づきつつあるのだった。そして——

キューン、キューン、キューン……。

という何やら鋼をこすり合わせるような響きが空から降ってくる。それと同時に地響きのような唸りが地を這うように近づいてきた。さらにあわせて——軍馬の蹄鉄の音、甲冑の響き、わあっ、という叫びの声が天にのぼった。たしかにおびただしい矢風が空を切る音さえ伝わってきた。

数頭の馬が蹄を鳴らして街道を駆けてきた。乗っているのは甲冑武者だ。

「叢雲」のほうに走っていくのではない。「叢雲」のほうから走ってきたのだ。

——紀州藩士だろうか。

女忍たちは身がまえた。視線を凝らした。

指し物の紋を確かめようとしたが、すでに旗は血でべっとり汚れていて、子細に見てとることはできなかった。

いや、それどころか——なかの一人は完全に死んでいた。頭から血の泥濘をかぶったように真っ赤なのだ。

死にながら、暴れ馬に揺られるままに、ひた走りに走り去った。鬼火のような青い燐光をあとに残した。

「ええい、どけ、どけえ」

ほかの騎馬武者たちも疾風のように慈尊院村を走り抜けていった。誰もが死に物狂いの形相になっていた。——これは明らかに敗残の兵士たちだった。

「何があったか見てくる」

蓮の姿が消えた。

「今日の蓮はおしゃべりだ」

とこれは現が感心したようにいった。

「ほんとうだ」

涙もうなずいた。

と、そのとき——

「わぁああー」

にわかにあたりに怒号と悲鳴が満ちた。それが一気に押し寄せてきた。

濃霧のなかから何十人もの男たちが現れたのだった。まるで幽鬼の群れだ。いずれも惨憺たるありさまになっていた。血にまみれ、槍は折れ、刀は曲がり、着衣がズタズタに裂けていた。悲鳴と、怒号がないまぜになり、坩堝と化して、怒濤のように炸裂した。混乱のきわみのなか、算を乱して逃げてくる。

これもまた敗残兵のようだ。ただ、こちらは雑兵の集団であり、最前線に押し出されて、ほとんど半強制的に戦わされる連中だ。そのぶんだけ、さっきの騎馬集団より被害が大きいということかもしれない。事実、見るからにひどい。

負傷者は数えきれず。なかには手足がもげている者さえいる。地べたをはいずりまわり、転げまわるようにして、懸命に移動している始末なのだ。その地面にしてからが、彼らが流す大量の血に、真っ赤な泥濘のように、どろどろにこねくり返されていた。

「ちょっと、おじさん――」

涙が逃げる男の一人のひじを摑み、むりやり引きずり寄せた。

「これって何なのよ、何でみんな逃げてるわけ？」

「放さんかい。それどころの話や――」

男は反射的に手を振り払おうとしたが、涙を見るなり、でれっと相好を崩した。

「何や、姉ちゃん、何ぞ用かいな」

相手が男であるかぎり、どんなときにも涙の色気は最大限に威力を発揮する。全身血にまみれ、胴丸には折れた矢が突き刺さっているというのに、男は髪を撫でつけようとさえしたほどだ。

「だから、何があったのか教えてくれない。何でみんなこんなふうに逃げてるわけ」

「何でもなにも……」

男は唇を震わせた。好色半分、恐怖半分で、混乱しきっているようだ。笑っていいのか、怯えていいのか、判断できずにいるらしい。

「こんな戦あるかいな。城に切り込もうにもよう近づけんのや。大鎌が降ってきよるねん。火の玉が落ちてきよんねん。わやや。ようやっと近づけば今度は弓矢も鉄砲も通用せんときとる。何もかも跳ね返されるばっかしや。あげくのはては皆殺しにあう」

「鎌が降ってくる？　火の玉が落ちてくるって……」

涙はけげんそうな表情になった。

「何、それ？　どういう意味？」

「だから、そのとおりの意味やないかい」

「何だかわからないよ」

「わからんでええから、姉ちゃん、わいと一緒に逃げよやないか、それでわいと――」

男の言葉がふいにとぎれた。その口がパクパクと開閉して、し、ょ、た、い、を――とだけかろうじて言葉をつないで、そこでブハッと血を吐いた。そのまま地面にゆっくりくずおれていく。その首筋に人さし指ほどの長さのある矢が刺さっていた。吹き矢の矢だ。

「チィッ！」

女忍二人は飛びすさった。

その彼女たちの耳に、

「霖雨だ、霖雨が来たぞ」

という声が飛び込んできた。声、というより悲鳴だ。

霖雨――というのはよほど人々の恐怖を誘う名称であるらしい。悲鳴は悲鳴を呼び、怒号は怒号を誘い、人々は逃げまどい、しかしどちらに逃げていいのかもわからずに、あちらでぶつかりあい、こちらでもつれあい、阿鼻叫喚の騒ぎを引き起こしている。

「霖雨――」
涙と現は顔を見あわせた。
「って何だろ？」
女忍二人が顔を見あわせていたのは、ほんの一瞬のことだった。
すぐに「霖雨」の襲撃がはじまったからだ。まさにその名称が暗示するように、長い、長い襲撃が。――

二

轟ッ、と吹き荒れる血風、死の颶風に、河原に薙ぎたおされる葦のごとく、敗残兵たちは次から次に地にたたきつけられている。その血煙に霧までが赤く染まる。死臭がムッと瘴気のようにたちこめる。
「霖雨」が慈尊院村の辻外れに現れた。村のなかを一槍の穂先のようにたじろがず突き進んできた――といってもそれほど多人数ではない。まずは十数名といったところか。なのに、まるで大軍が押し寄せてきたかのような迫力を感じるのは、それだけ彼らが発している殺気が凄絶無比、圧倒的なものであるからにちがいない。
もっとも彼らに精兵、強軍の印象はない。――見たところ武士ではない。地侍、郷士までもいかないだろう。まずは落ち武者狩りに熱中する土民といったところが妥当か。が、それが逆に、彼ら「霖雨」の恐ろしさたるゆえんでもある。
それは彼らがおのおの手にしている得物からも明らかだろう。吹き矢あり、短弓あり、鎖鎌あり、手斧あり、釘をびっしり隙間なしに埋め込んだ棍棒あり、で――まるで野ぶせりの寄せ集めだ。およそ統一感に欠ける。
が、それはあくまでも得物にかぎってのことであって――いったん彼らが攻撃に移ると、その見事に連繋された動きには誰しも驚かずにはいられないだろう。じつに統一がとれていないどころの話ではない。
短弓の強力な援護のもと、まずは鎖鎌が敵陣を攪乱、突破し、手斧、棍棒が個別の撃破に当たり、さらに吹き矢が仕上げにかかる――その殲滅行動は徹底、熾烈をきわめ、あとに一草一木とて残さない。
彼らには武士の矜持がない。地侍の愛郷心もない。郷士の仏心もない。失うものが何もない。それゆえに相手を殲滅するのに、いかなる卑劣な行為も辞さない。一片の慈悲心も持たずに、ただもう残虐をきわめる。――
軍団「雨」のなかにあっては、抜刀隊の「驟雨」、鉄砲隊の「雷雨」の援軍、あるいは別働隊の位置づけにすぎないながら、彼らが鬼のように人々から恐れられるのはそのためなのだ。
現にいまも、「霖雨」に襲撃されるままに、敗残兵たちはなすすべもなく、それどころか最後の気概さえ失って、ただもう敗走に次ぐ敗走という醜態を重ねている。

彼らがいくところ、血煙たちのぼり、肉片舞うのみ――斬殺、刺殺、撲殺、扼殺……さながら残虐博覧会の様相をていする。敗残兵たちが一人残らず斬殺されるまでにさほど時間を要さないだろう。たぶん、「霖雨」たちは惨殺を楽しんでさえいる。

もちろん、涙も、現も逃げるつもりでいたのだ。狂牛の群れなす暴走に巻き込まれるようなもので、こんな集団とかかわりあいになったところで、ろくな結果にならない。怪我でもしたらつまらない。ここは避難するにしくはないだろう。

が――

このころになってようやく村民たちが騒ぎ出したのだ。恐怖にかられ、悲鳴をあげながら、家から飛び出してきたりもする。そのなかには女たちも混じっている。少女どころか、童女さえもいる。なかに、おとし茶屋の少女たちまでもが混じっているのを見たのでは、涙と、現も色を失わざるをえない。

これまでの「霖雨」の暴虐無残な行動から、彼らがどんな人間たちであるか、およその見当はついた。いや、そもそも彼らは人間の名に値しない。飢狼だ。戦場での女は自分たちに対する報奨と信じて疑おうともしない。陵辱、暴行のかぎりを尽くし、ときには楽しみのために惨殺さえもする……

現に、彼らはいま浅ましいまでに歓声をあげながら、怒濤のごとく、女たちに向かって殺到しつつあるではないか。これを放置して自分たちだけ逃散していいものか。

「……」

涙と、現は、一瞬、顔を見あわせ、たがいの目に悲痛な覚悟を確認した。

――やるか。

――やるしかない。

まず動いたのは涙だった。眼帯をかなぐり捨て、「蓮、帰ってこい」と叫んで、「霖雨」に向かって走った。ふところにクナイを握りしめている。

そのあとを現が走る。スカーフを首からスルスルと取った。みじか刀を鞘から抜いた。涙の目になみだが滲んだ。いかなる男も引き寄せずにおかない蠱惑をはらんだ涙だった。

彼女の涙には昆虫のいわゆる「触発フェロモン」に似た成分があるのかもしれない。「触発フェロモン」には、対象となる相手の行動を「誘発」して、それを変化させるという効果がある。

これを、名づけて、忍法「胡蝶」――

この世に、涙のなみだに抗しうる男など皆無といっていい。事実、いったんは女たちのもとに押し寄せようとした「霖雨」たちが、たたらを踏むように立ちどまり、一斉に涙を振り返ったのだ。「胡蝶」に感応した。それは男たちの顔に一種異様な照りのようなものがあぶり出されたことからもわかった。その目にそろって鬼火のように陰惨な光を宿した。

一呼吸か、二呼吸の静寂ののちに、

「この女、おれがもらったァ。手出ししやがるやつはぶっ殺すぞ」
列の先頭にいた男がそうわめきざま、両手を突き出しながら、走り寄ってきた。その口ぶりから、どうやら棟梁格らしいことが察せられた。粗暴ながらも、どこか威のようなものがそなわっていた。ただし、せっかくの威も、口からヨダレの泡を噴きこぼしているのでは、台なしではあろうが。
男なら誰しも思春期の疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドランク）の凄まじいまでの性の渇望に覚えがあるはずだ。自分は色情狂ではないか、と疑ってしまうほどのあの激情、あの凄まじいまでの乾き――
それを涙の「胡蝶」は成人男子の性衝動に植えつけてしまう。いかなる聖人君子といえども、思考はもちろん、運動神経までもが狂わされてしまう。色に狂った男はいわば夢遊病者のようなものなのだ。
この場合の、その男がそうだ。涙に摑みかかったつもりが、微妙に動きがずれて、その腕が宙を泳いだ。
「けだもの――」
涙はそう吐き捨て、跳躍しざま、跳びちがって、男の喉をクナイでかっ切った。パッ、と血煙がたちのぼる。
女忍ふたり対「霖雨」十五人の死闘がはじまった。

三

「ぬぉおおう！」
「霖雨」の男たちの間に声にならないどよめきが走った。驚声、あるいは怒声、というべきかもしれない。
が、それはすぐに歓喜のおたけびへと変わったのだ。そう、棟梁格が殺されるのを目のあたりにしながら、それを悼むどころか、あるいは憤るどころか、彼らは口々に歓びの声をあげたのだった。すでに人の声ではなかった。飢狼の群れが吠えたてるのと何ら変わりなかった。発音を鳴らし、一斉に涙に向かって殺到してきた。
――これほどまでになまめかしい女体を、いかに棟梁であろうと、独り占めにする法やある！　南無三、罰が当たったのだ。
それが彼らに共通した思いであったかもしれない。棟梁が頓死したのを、なにか自分たちへの饗応のようにさえ感じているらしい。これで自分たちも涙を抱けると有頂天になっているふしさえある。じつに唾棄すべき人間獣たちではあった。
涙の「胡蝶」に獣性をかきたてられたのは事実だとしても、フェロモンに触発されるまでもなく、もともと彼らにはこうなるだけの下地がそなわっていたのにちがいない。そうでなければ、棟梁が殺されたのを目のあたりにしながら、こうまでしゃにむに涙に挑みか

かってきたりはしない。

が――

「ちょっと待って――わたしのことも忘れないでよね」

現が彼らのまえに立ちはだかった。ニコリと笑う。――その手のなかでしきりにスカーフをもてあそんでいる。

「じゃまするな――」

男たちは涙を抱きたい、という情欲に身を焦がすあまり、ほとんど理性を失ってしまっていた。一人は、どけ、と乱暴に押しのけようとしたし、もう一人はあろうことか手斧で頭をかち割ろうとさえしたのだ。

が――

「待て、待て――いや、この女もなかなかのものではないか」

「そ、そういえば――」

「いや、おれをこの女に一番乗りさせてくれるのであれば、あちらのほうは後回しにしてもいい……」

男たちは二手に分かれた。

こちらでは現に群がり、あちらでは涙に群がり――

「こちらに来て――」

現が男たちに艶やかに笑いかける。誘うように体をくねらせる。腕をさしのべる……な

まじ、高雅なお姫様を連想させる顔だちなだけに、その蠱惑、媚態には抵抗しがたいものがある。

男たちのなかで何かが外れた。一斉に現に飛びかかった。狼のように唸り声をあげていた。五人、いや、六人か。

が、飛びかかったのはいいが、そこに現の姿はなかった。突然、消えた。いや、消えたのではない。もともと、いなかったのだ。彼らが現と思い込んでいたのは、じつは現ではなかった。人間ですらなかった。それどころか――そもそもそこは、現実の場所ですらなかった。彼らは非現実の場所で、非現実の少女に挑みかかっていったのだった。スカーフのなかの庭園で、スカーフのなかの少女に。――

現実に起こったことはこうだ。

現がスカーフをひろげ、それを闘牛のまえに赤い布をちらつかせるように、振って見せた……

手を動かしているわけではない。たんに手首だけをうねらせている。するとスカーフもまた微妙にうねるのだ。精妙に波うつのだ。そして何かが動き出す……

スカーフの裏表には彩色豊かに、じつに緻密に、緻密に、コマ割りされた絵が描き込まれているのだ。南蛮わたりのスカーフだ。当然、そこに縫い込まれ、鮮やかに描かれているのは、南蛮の装飾文様だ。

これは南蛮式の庭園ででもあろうか。幾何学的に――などという言葉は現は知らなかっ

たが——刈り込まれた植え込みのあいだを、目もあやに着飾った貴婦人たちが散策し、絢爛たる羽模様を競うかのように孔雀、雉などが地をついばんでいるのだ。そこかしこ、現などは名も知らない花々が、原色あざやかに描き込まれている。

そのほかにも、現が見たこともなければ、そもそも何に使うものなのかもわからないさまざまなものが、華麗な装飾文様のなかに綿密に描き込まれている。いつまで見てても飽きることがない。

現が自分独自の忍法をあみだすことができたのは、そのなかに描かれた、仰向けに川に浮かんでいる少女の姿に魅せられたからだった。

白い衣装を着け、花々の挿頭のある木の天冠をかぶり、金色の長いおぐしを川の水に豊かにひろげ、手に一本の花をつまみ、恍惚と川を流れているその少女が——じつのところはぜんぜん似ていないのに——自分とうり二つのように思われたのだ。

じつのところ、彼女はオフィーリアであり、日本の一少女に似ているはずもないのだが、とにかく、そう思った。

そう思うと、なおさら魅せられ、魅せられれば、なおさら似ているように思われ……どんどん深みにはまっていって、寝ては夢みて、現実に夢みて、いつしか夢とうつつの間を、スカーフの文様を手がかり、足がかりにして——これこそまさに「夢の浮橋」さながらに——自在に、往還することができるようになった。

恋ひ死ねと　するわざならし　むばたまの　夜はすがらに　夢に見えつつ

「されば男たち、心おきなく——」現はうっとりつぶやく。「恋い、死に候え」

現が、碁石才蔵とともにいたのは、この術があればこそのことだった。才蔵の「百目」を、現のこの術とかけあわせ、新たな境地に進もうとした。

男たちは現に誘われたつもりでいる。まさか、それがスカーフのなかの少女だなどとは、それこそ夢にも思わない。誘惑されるままに無防備にスカーフのなかの南蛮マンダラに導き入れられる。どんなに獰猛、果敢な男たちであってもスカーフのなかでは無力だ。夢のなかでは抵抗しようがない。難なく殺すことができる。

少なくとも現の主観上において起こっているのはこういうことなのだが——

現実にもそうか、となると——なにしろ現自身が夢とうつつのなかを往還しているだけに、第三者としての視線を確保しようがない。つまり、客観的に何が起こっているのか、それを見きわめることは不可能だ。

この時代、催眠術、という名称こそないものの、忍者のあいだでは、幻惑術という名称のもと、その現象、作用があることはよく知られていた。

だから、現もときにこれを、自分で自分に幻惑術をかけているのではないか、また男たちに幻惑術をかけているのではないか、と疑うことはある。これはとてもそのような範疇におさまるべきことではない、とは思うのだが、そのことに絶対の確信があるわけではな

いからだ。
いずれにせよ――
これが現の忍法「夢寐うつつ」なのだ。
これにかかった男たちは、
「ぐあぁぁあぁぁ！」
血煙をあげて息絶えることになる。
スカーフのなかの南蛮マンダラのなかにさまよい込んで、自分がどこに居るのか迷い、現を失い、はては自分自身さえをも失ってしまうのだから当然だろう。現の襲撃に抗するすべを失ってしまうからだ。
すでに現は五人の男を斃した。いずれも、みじか刀で喉をかっ切った。――むろん、そのこと自体に後悔はない。
成尋衆はこの世に最大の災厄がもたらされるのを大いなる悲願にしているのだという、悪逆、非情なる化け物たちといっていい。「雨」はその子飼いの男たちで、とりわけ「霖雨」は彼ら自身が、略奪、暴行、虐殺をも辞さない外道たちなのだ。いわば地獄の獄卒ともいうべき集団で、それに天誅を加えるのに何をためらうことがあるだろう。ない。
しかし――
「夢寐うつつ」の名称こそきれいだが、実際には、男を身近に引き寄せ、その喉を突き、あるいはかっさばくのであるから、その返り血を全身に浴びることになり、その名称のまるきれい事には終わらない。
それに――どんなに女に狂い、色に迷った男でも、いざ喉をかっ切られれば、我に返る、死に物狂いに抵抗する。
「霖雨」はしぶとい。あるいは剽悍、あるいは凶暴である。しかも、この場合、文字どおりに必死になっている。最期の最期に、ハッ、とわれに返って――あとはもうしゃにむに摑みかかってくる。切りかかってくる……その結果、現の着衣はズタズタに裂けてしまう。いつしか半裸も同然の姿になってしまう。その雪の肌が花と血にまみれて凄惨そのものだ。
現は刃物のあつかいに長けてはいるが、なにしろ相手は多数であり、彼女の体力にもかぎりがある。いつもいつも刃物の一颯、一掻きで相手を瞬時のうちに絶息させるというわけにはいかない。そこまで手際はよくない。そこまでの腕はない。
ときに、もつれあい、転がりあう。殴りあうこともある。首を絞める。目を爪で掻きむしる。耳に咬みつく……これは殺しあいなのだ。きれいごとは通用しない。
現はまだしもなのだ。涙にいたっては、「胡蝶」をいわば蜜にして、男を呼び寄せるわけなのだから、どうしても接近戦にならざるをえない。――涙は現よりは巧みに刃物をあやつるが、それでも血まみれの消耗戦になるのは避けられない。涙はいつしか双の乳房をあらわにまでして「霖雨」たちと戦っていた。つまり、必死だ。
刹那！　涙と現が――

二身の桜の妖精のように舞い散る花びらのなかに交叉した。
その剝き出しの肌、乳房が触れあい、離れた。
そのとき二人がともに覚えた電撃のような感覚はこれまで彼女たちが一度として体験したことのないものだった。
いや、そうではない。これまでも何かのおり、何かの拍子、ふと指先が触れあったり、肩が触れたりしたときなど、なにか妙に切ない想いがこみあげてきたことはある。
実は彼女たちは心の底では自分たちの深い想いを承知していた。察していた。
いつの時代であろうと、人が人を愛するのにはさまざまな形態があり、多彩な結びつきがあることに変わりはない。
ただ、この時代、男色はなかば公認されていたものの、女性のゲイはまだ不可視化されていた。深いタブーが彼女たちの意識を閉ざしていた。
だから、涙も、現も、これまで自分の想いに気づいていなかった。いや、気づいていないふりをしていた。
が、この命のやりとりをする切所にのぞんで、胸のうち深くに秘めていた想いはもう隠しきれないまでに激しいものになっていた。溶岩のように噴きだした。
「……」
一瞬、飛びかう二人の視線が、宙に激しく、切なく、交叉して、彼女たちの秘めた想いを何よりも雄弁にもの語った。

このとき涙と現の二人はそれぞれの想いを、愛を、確認しあったのだった。
が、いまは修羅場だ。
次の瞬間、パッ、と二人は離れて、それぞれの相手に向きなおった。
血煙がたちこめる。霧が赤い。そのなかで死闘がつづいている、いつまでもつづいている……

四

濃い霧のなかに四羽の鴉が舞い下りた。そう見えた。が、鴉ではない。あの四人の忍者僧だ。
「お待ちあれ、甲賀八郎どの」
霧のなかからそう声がかかった。皮膚坊の声だ。——今日の彼らは、網代笠ではなしに、袈裟頭巾に頭を包んでいる。戦闘態勢、ということか。
紀州藩領側にある堤、だ。
紀ノ川を右に見ながら、この堤を数百メートルも歩めば、そこに材木集積場がある。その広大な空き地に「叢雲」が出現した。
いま、八郎はそこに向かっているところだが、その声に足をとめた。
「ご坊たちか」

八郎は微笑んだ。
「『叢雲』にお行きあるか、八郎どの」
「そのつもりだ。響がさらわれたらしい。助けたい。それに――」
「それに？」
「成尋衆を斃したい」
「善き哉。およばずながらご助力いたす」
「助力は不要だとそういったはずだが」
「お気づかいあるな。われらが助力いたすは――」
皮膚坊はそこでフッと妙な笑い方をして、唐突に、
「拙僧、いささか占術の心得がござれば――先日、はたして成尋衆との戦いがいかなる結末にあい終わるかを占い申した。すると、われらは成尋衆に負けると、されど勝つと――そのような卦でござった」
「負ける、されど勝つ……はて、それはどのような占であろうか」
「なに、らちもないことでござるよ。お考えあるな。ただ、お心の片隅におとどめおきくだされば、それでよろしいかと。――われらの話はすでに浅間神社にて終わっており申す。されば、かくお呼びとめいたしたるは、われらの用にあらずして――」
皮膚坊が振り返る視線の先に――
霧が流れ、そこに人ほどもある巨鳥の影がぼうと浮かびあがり、しかもその両翼を上下に力強く動かしながら、見るまに神輿のように迫り出してきて……まずは大きな車輪が目を奪った。
「ほう」
と思わず八郎は声をあげた。それを仰ぎ見た。
見事な細工だ。――屋根に大きな鳳凰の造り物を戴き、その屋根を載せた廻廊四柱には、水竜、地竜、火竜、風竜の四竜がとぐろを巻いて、さらにその奥に唐獅子牡丹が精密に彫刻されている――
京の都大路を行進したのだという鳳輦車のことは忠長から子細に聞いた。さてはこれがそうか、と思い当たった。想像していたのより、はるかに大きい。屋根に鳳凰の造り物があった、とは聞いたが、その翼が動くとまでは知らなかった。どのようなからくりであろうか。
「出立のおり、何かの役に立とう、これを使え、と天海大僧正様よりさしつかわされた鳳輦車でござってな。われら、これを『桜花』と名づけました――」
「『桜花』……」
八郎がそう感慨ありげにつぶやいたのは、それが偶然にも、響の「桜花」と同名であることに驚いたからであろう。
「なかに人が入って動かすようになっており申す。八郎どのに用があるのは、その御仁――操縦者とでも申せばよろしいか――でござってな」

「おれだ、おれだ」
根来転寝の声だ。——車輪の後ろから、カタン、という蓋を開けるような音が聞こえてきて、いつものように阿修羅に寝そべった転寝が滑り出てきた。一方の肩に、白い、長い縄のようなものをグルグル巻きにしている。
「根来転寝……またどうして……」
「驚いたか。さもあろうが、いまはことの成りゆきを話している余裕がない。おまえに頼みたいことがある。もし、『叢雲』の最上層に登るようなことがあれば——おれはあると信じているが——その勾欄にこの縄をこれこのように——」
根来転寝は指で縄の形をつくって、
「ぶらさげてはくれぬか。これは滑婆が蜘蛛の糸を編んだものをさらによりあわせて作ったものだ。軽いし、丈夫だ。持ち歩くのにさして邪魔にはならないはずだ」
「それはかまわぬが——」
何にする、とも聞かずに、八郎は縄を受け取りながら、
「転寝、成尋衆とやりあうつもりなのか。よしたほうがいいのではないか」
「おまえならよすかね。いや、やめることができるかね。響がさらわれ、滑婆が戦いに向かったんだぜ。それに——」
転寝はヒョイとあごをしゃくって、
「あれが聞こえぬか」

遠くから人々の阿鼻叫喚の声が聞こえる。慈尊院村が壊滅されつつある地鳴りのような音が伝わってくる……
「おれたちが育った慈尊院村が『叢雲』の鉄輪に無残に蹂躙されようとしている。おれはやるよ——いや、おればかりでなしに、甲羅式部や、涙たちもやるだろうさ。慈尊院村はおれたちみんなの宝であったからな。それをむざむざ灰にされては黙っておられぬ。そうじゃないか」
一瞬、八郎は、と胸を突かれたように沈黙したが、すぐに、
「気持ちはわかるが——いや、わかりすぎるほどにわかるが……転寝、相手はあの成尋衆なんだぜ。どうか思いとどまってはくれないか。そういえば——おれは駿府で桜を見て妙な歌を思いついた……いま、そのことを思い出したよ」
「ほう、どんな？」
「散る桜、残る桜も、散る桜……」
「なるほど、それはいい」根来転寝は妙な笑い方をした。「おれたちは散る桜、か」
「根来転寝、いま一度いう。いや、頼む。どうか思いとどまってくれ——その『桜花』で特攻したからといって何になる。玉砕したからといって何になる？」
はからずも八郎はここで、「特攻」という言葉を使い、「玉砕」という言葉を使った。それは、ながい時の射程を越え、はるかなる未来、第二次大戦の末期に使用された航空特攻兵器に「桜花」をつないだ。まったくの偶然ではあるが。——

「おれは特攻もしなければ玉砕もしないよ。勇ましいのは嫌いでな。たしかに、桜はどれも散る桜には相違ないが、同時にまた、来年には咲き戻ってくる桜――でもあるんだぜ。そうじゃないか」

「……」

「さればよ、おれはこれより根来転寝一世一代の大忍法を披露するつもりでいる」

「一世一代の大忍法？　何を？」

「それはあとのお楽しみということにしとこうぜ。いま話してしまったんじゃ一世一代の大忍法ということにならない」

「それもそうか」

八郎はかすかに笑う。

「だから来年も咲かなきゃ話にならない。おれとしても、おまえの――甲賀棟梁の――口からあとの評判を聞きたいじゃないか」

「来年も、咲けるかな」

「咲くさ」

根来転寝はこともなげにそういって、

「おれのことより、いや、おれたちのことより、甲賀八郎、おまえこそ散らないようにしてくれなきゃいけないぜ。おまえは甲賀五宝連の棟梁なんだからな」

「わかった、もう何もいうまい。根来転寝、くれぐれも、おんみ大事に、な」

「ああ、おまえもな」

「行く」

そのまま歩み去ろうとする八郎に、

「われら、これより露払いにかかる。先陣切ってさきがけいたす所存にて――これにてお別れ申す。甲賀の棟梁に思いがけず、知りあうを得て、楽しゅうござった。さらばでござる――」

皮膚坊がそう声をかけ、四人の忍法僧は合掌すると、深々、頭を下げた。

五

どうにか、あと三人までこぎつけた。しかし、その三人がてごわい。彼らとて、この死闘をへて、なおも女に執着しつづけるほど風狂でもなければ、愚かでもない。すでに「胡蝶」もきかず、「夢寐うつつ」もきかない。女忍たちも必死なら、彼らも必死。いずれも悪鬼の形相になっていた。

一人は雲つくような大男、これが棍棒を持ち、ほかの一人が手斧、もう一人が鎌をかまえている。いずれも得物を尋常にかまえ、現と、涙の二人を、三方から囲み、その包囲をじりじりと縮めつつあった。彼らは体力をまだ十分に余しているし、さすがにここにきて、仲間たちを殺されたことに報復のほむらを燃やしはじめてもいる。

それに比して、涙と、現の二人はもう体力がぎりぎり底を尽きかけている。そうして二本の足で立っているのがやっとだ。すでに息は完全にあがっているし、極度の疲労に目がくらむまでになっている。現はまだしも、涙はほとんど喪神状態におちいっていた。——涙のクナイも、現のみじか刀も、血と脂にどろどろにまみれ、まるで、ものの役に立たなくなってしまっている。

男たちからはすでに、女に夢をつむぐ幻想も、性の渇望をいやしたい期待感も、あとかたもなく失われてしまっている。あとに残されたのは、ヒリヒリひりつく現実の、ざらついた感触、その猛烈な殺意だけだった。

ここまできたらもう男も女もない。人間ですらない。ただ野獣たちが命を賭して牙を剝きあっているだけだ。あとはもう殺しあうだけ——

「ようも、ようも、ここまで、われら『霖雨』をコケにしてくれおったな。こうなれば楽には死なせぬ。死なせてなるものか。ゆるゆる時間をかけ、じわじわ一寸刻み、五分刻みにしてくれようほどに——雌狐ら、楽しみにしておれ」

「……」

二人の女忍はたがいに、チラリ、と視線を交わしあった。この場合に、ニヤリ、と笑いあった。そして動いた。

彼女たちは男たちの誰も予想もしなかった行動に出た。それぞれの刃物を右上から左下に斜めにピュッと振り下ろしたのだ。血が飛んだ。脂が散った。それがまともに男たちの目に飛び込んでいった。

「わっ」

男たちは声をあげた。ただの目つぶしではない。仲間たちの血と脂の目つぶしなのだ。さすがにこれには平然としていられない。動転した。

その一瞬の隙を女忍たちは見逃さなかった。二人そろって血泥の地面のうえを鞠のように前方に転がった。渾身、最後の力を振りしぼってのことだ。立ちあがりざま、まずは手斧と、鎌の男の喉をかっ切ろうとした。

が——

男たちの動きのほうが速かった。手斧の男はとっさに涙の背後にまわった。後ろから涙の剝き出しの乳房をわし摑みにした。五本の指を食い込ませてきた。乳房がつぶされそうなほどの猛烈な握力だ。あまりの苦痛に絶叫を放った。

鎌の男は現の喉に両手を飛ばしてきた。これもの凄い力で絞めつけてきた。現は必死にそれを引き剝がそうとしたが、とてもかなうことではない。急速に意識が遠のいていった。

「おい、殺すでないぞ。殺すのは存分に楽しんでからのことだ——」

大男が笑いながら、しかし慌てたようにいった。

そのとき涙は蜩七弦を、現は碁石才蔵を感じた！

どこかで——

蜩七弦の「松籟」が発動された。瞬時に――といっていいほどの早さで――無数の羽虫が集まった。乳房に群れた。男の五本の指がそれらを押しつぶした。その脂が滲んだ。乳房から男の指が滑った。ツルリ、とすり抜けざまに、体をひねり、男の喉にクナイを突き刺した。

碁石才蔵の「百目」が発動された。才蔵の「目」が男の目に張りついた。才蔵の「目」は現のスカーフを凝視した。いやおうなしに男もスカーフを見ることになった。男の意識が南蛮マンダラに吸い込まれた。異界をさまよった。その両手から力が抜けた。現のみじか刀が男の喉に深々と刺さった。

彼女たちはそれぞれの得物に執着しなかった。そのことが生死を分かった。すでにろくに体力を残していない彼女たちのことだ。喉から刃物を抜こうとすればそれに手間どったにちがいない。大男に棍棒で頭をたたき割られていたことだろう。涙は手斧を、現は鎌を、それぞれにもぎ取った。

が、そのときにはすでに大男が二人の頭上に、ブン、と棍棒を振り下ろしてきた。それをかろうじて涙が手斧で受けた。すでに体力は底を尽いていた。その打撃を受けとめきれずに地面にたたきつけられた。現が鎌を男の喉に走らせた。それもはじき返された。現もまた地面にたたきつけられた。

「死ねえ、雌狐――」

大男が棍棒を頭上に振りかざして叫んだ。その真っ赤に開けた口が毒々しかった。

つづけざまに――というか、ほとんど一発の銃声ででもあるかのように、何発もの銃声が重なった。信じられないことに大男の棍棒の上半分が吹っ飛んだ。神業というべきか。大男は棍棒を振り下ろしたのだが、手元に残ったそれだけでは、涙にも、現にも届かなかった。

涙が手斧で大男のすねを切った。悲鳴をあげながら倒れ込んできた大男の喉を現が鎌でかき切った。血煙が噴いた。

大男が絶息したあともしばらく二人は立ちあがることができなかった。はあ、はあ、と荒い息を吐きながら、仰向けになって、横たわっていた。

その二人の視界に蓮が現れた。二挺の蓮根銃からは薄い煙がたなびいていた。――その背後には甲羅式部がうっそり立っていた。

「ど、どうして――」現が訊いた。「こいつを撃たずに棍棒を撃ったのよ」

「わたしがこの大男を撃ってしまってもよかったのか」

というのが蓮の返事だった。

「ホントだ。今日の蓮はおしゃべりだ」涙が笑う。

「凄いな、これ、みんな、二人でやったのか――」

陰気な、しかし素っ頓狂な声が聞こえてきた。碁石才蔵の声だ。

「伊賀の女忍だもの。それはこれぐらいはするさ」

と、この間のびした声は蜩七弦だ。

「遅いよ、バカやろう」現はいつもながらの口の悪さでそう毒づいた。
涙と現はヨロヨロと立ちあがった。二人の視線があう。二人、ハッ、と目をそらした。
彼女たちはいまはじめて、互いに互いの想いを知ったのだ。その頬にわずかに赤みがさしていた。
それにしても、——満身創痍もいいところだ。全身が痛い。才蔵と、七弦が自分たちの羽織をかしてくれて、何とか見た目を整えることができた。
おとし茶屋の女の子たちが心配そうに寄ってきたので、茶屋から着替え、そのほかを持ってきてくれるように頼む。
女の子たちはあわてて駆けていった。
いつのまにか慈尊院村から人の姿は消えていた。すでに村人たちは退避し、敗残兵もすべて逃げてしまったということか。あとにはただ死体だけが残されている……
と——
ザッ。ザッ。ザッ……というおびただしい人数の跫音が響いてきた。
紀州藩の軍勢が姿を現した。歩兵だ。
鉄砲隊、弓矢隊を擁して、怒濤のように押し寄せ、走り去っていった。
向かうは「叢雲」か。
まるで幽霊のように、軍勢が出てきたとたん、フッと消えた忍者たちが、また姿を現して、何事もなかったかのように言葉をつづける。

「そういうなよ。これでも駿府から紀州まで大急ぎでやってきたんだぜ」と才蔵。「どういうわけか八郎と、転寝がどこかに消えちまってな。それで二人を捜すのに手間どっちまった——」
「八郎と転寝が？　それで見つかったのか」
「いや。もしかしたら、こちらに帰ってるんじゃないか、とも思ったんだが……」
「そういえば——」現が首をひねる。「こちらでも滑婆と響がいない。もっとも滑婆はさっき狼煙をあげたようだけど……わからないな。二人に何かあったのか」
「もしかして……」
と、涙が何かいいかけたとき——
音がした。それも空から。
つづけざまに、何重にもかさなるように、ざあぁ、ざあぁ、と焙烙を炒るような音が鳴り響いて——
「え……」
おどろいて見はるかせば、朦朧とたちこめる濃霧の空に、妖たる光芒を曳いて、火の玉のようなものが飛んでくるのが見えた。
それも一つや二つではない。五つ、六つ……いや、もっとか。数えきれないほど次から次に火球が発射されてくるのだ。
放物線をえがいて飛んできた。それらが濃霧に黄色い軌跡を残した。黄色、あるいは淡

い橙色に輝いた。その軌跡を目でたどれば、それらが「叢雲」から発射されているのは明白だった。

「あれは何だろう?」

と首をひねるいとまもあらばこそ——

火球はつづけざまに慈尊院村に落ちてきた。轟音、地響きが、ズーン、ズーン、と連続し、家々が破壊されるのみならず、その落下地点に火柱がたちのぼった。

めらめらと炎が燃えひろがり、慈尊院村はたちどころに業火に包まれた。火の粉が赤い横断幕のように地を舐めて流れた。その下に慈尊院村の人たちがいる。悲鳴をあげて骨まで焼かれている。

ごおっ、と風が巻き起こり、見るまに濃霧を吹き払う。家々の破片が空に舞いあげられた。なかに、たしかに人の姿もあった。

その巻き起こる風、吹きすさぶ風のなかに、おびただしい桜の花びらが金粉、銀粉さながらに乱れ舞うのが、豪奢でもあり、恐ろしくもあった。

まさに紅蓮地獄そのものだ。とてもこの世の情景のようではない。

「わぁあ!」

逃げまどう忍者たちのまえに、炎を払うようにして現れたのは——

彼らはいまだその名称を知らずにいるが、鳳輦車の「桜花」なのだった。

「えー」

「何だ、これは」

「何?」

驚きさわぐ彼らのまえに——

その下から滑り出てきたのは、阿修羅に寝そべった根来転寝で、

「おい、いよいよ成尋衆との最終決戦のときがきたぜ。これが——『桜花』という名なんだけどな——あれば容易に『叢雲』に近づくことができる。まわりを『雨』の抜刀隊、『驟雨』の奴らがかためているが、なに、何てことはない、そいつらはおれが始末してやる。それでな、おまえたち『叢雲』に切り込むつもりはないか」

やけに陽気な口調でそういった。

「ところで少々、いや、多量に炸薬が要る。女たち、滑婆がどこに炸薬を隠しているのか、それを教えてはくれぬか」

しかし、いいのか。成尋衆との最終決戦のときがきた、などと能天気なことをいって、ほんとうに大丈夫なのだろうか。成尋衆のことをすこし侮りすぎてはいないか。

これは彼らの知らないことであるが——

皮膚坊以下四人の忍法僧は、忍者としての能力において、彼らにはるかにまさる。その忍法僧たちですら、成尋衆と戦って全員が玉砕するまでに、ものの十分とは要さなかったのである。いわんや彼らをや。——

六

紀州藩の先陣がほぼ壊滅し、第二陣が襲撃をかけてくるそのあわい、ほんのつかのま無風だったその隙をうかがって、四人の忍法僧は「叢雲」に奇襲をかけた。

四人のうち、曾肥坊はこのように戦って、死んだ。

曾肥坊は、全身の肌表面に自在に乳腺を生じさせることができる。そこから乳液ともリンパともつかない粘液をかなり遠方まで放つことができるのだ。

しかもその粘液たるや、フェロモン、香り、諸成分を自在にブレンドさせることができるのみか——毒成分さえ合成することができる——その粘度まで必要に応じて変えることができるのだ。それにカロチン成分を最大濃度に混入してほとんどゴムに匹敵するほどの粘着力を獲得することができる。

されば——

皮膚坊、守宮坊、明滅坊の三人は懸命に登っている。何を？　曾肥坊が全身の乳腺から自在に放ち、蜘蛛の巣状に編みあげた——乳液からできているだけに——その名も「白女郎蜘蛛」を、だ。

曾肥坊は、墨染めの衣の袖を背にはねまわし、両の二の腕をあらわにさらけ出していた。その両腕を——あたかも指揮者がタクトを振るように——繊細巧緻に振って、霧のなかに幻妖たる巨大蜘蛛の巣をつむぎあげたのだった。

巨大も巨大——じつに「白女郎蜘蛛」は地上から「叢雲」の二層、三層、四層、さらには五層にまでその蜘蛛の巣をひろげ、それぞれの階に梯子状の蜘蛛糸を張りわたしているのだった。

いま、「白女郎蜘蛛」をつむぎ、張りめぐらしている曾肥坊の目に、濃霧、蜘蛛の巣、いずれともつかず、頭上に妖しくあやなされ、白々とひろがるそれのなか、一人、また一人と消えていく同輩僧の姿があった。

しかし——

そんな曾肥坊に、深い霧のたちこめる背後から夜叉至の笑い声が聞こえてきたのだ。

「人がおのれの宿命のすべてを、寸毫の狂いもなしに、あらかじめ見とおすことができたのだとしたら、世にこれほど恐ろしいことはありますまい。人の宿命は千差万別。されどいずれは死にいたるがさだめなれば、どのみちその生は暗澹、悲惨たるべきものにならざるを得ず——さればして、わたくしの『宿命通』にて、おのれの全人生を見た者は、その暗澹、悲惨たる姿に耐えきれずに、苦悶のかぎりのすえ、みずから命を絶つことになる。おのれの宿命を見るがよい。いずれ劣らぬ、虫けらたる人間の、卑小なる生を見て、苦しみ、嘆きのはてに、みんごと死に候え、曾肥坊」

一瞬、二瞬の空白ののちに——

曾肥坊の絶叫が霧に響きわたった。

それはいつまでも、いつまでも、恐ろしいばかりにいつまでも響きわたって——
つと霧が左右に分かれた、そのはざまに——何が起こったのか、「白女郎蜘蛛」の何本もの乳液繊維を太い一本にたばねて、それに首をくくって死んでいる曾肥坊の姿が浮かびあがったのだった。
その死にざまは伊賀五花撰の色衰逸馬のそれに似ている。そっくりではないか。ただ、ちがうのは。——
死してなお、曾肥坊はその二の腕からおびただしい乳液を放射していることだ。まるでスプリンクラーのように大量の乳液が霧のなかに放たれている。霧に蒸発し、霧に溶けて、それこそ乳のように白々と混濁した。
「われらは成尋衆に負ける、されど勝つ……」
曾肥坊は息を引き取るまぎわに、そうつぶやいたのだが、さすがの夜叉至もそれを聞き取ることはできなかった。

……それでは二層「餓鬼堂」に侵入した守宮坊はどうか。
「餓鬼堂」には堂の天井といわず、壁面といわず。目もあやに、象頭裸身の「獣人神仏交合マンダラ」が彫刻されていた。
「これは……」
一瞬、不覚にもその「獣人神仏交合マンダラ」に魅入られ、それに見入ってしまった守宮坊だが、ホッ、ホッ、ホッ、という、しゃがれた笑い声を聞き、背後に業火のように燃えあがる激しい妖気を感じ、
「忍法『魔獣召喚』——」
の声を聞くなり、即座にわれに返った。
それというのも成尋衆が使う忍法のことをあたうかぎり事前に調べておいたからだ。涅哩底王の「魔獣召喚」がどんなに恐るべき術であるかもわかっている。
その知識があるがためにとっさにそれに反応することができた。いや、反応した、といっていいかどうか。なにしろ——
あああぁあ〜、あぁあぁ〜、と悦びの声をあげ、身をくねらせる巨大な象頭裸身がのしかかるように頭上に現れたのだから——「男女二身合像」の巨大な歓喜双身天が、守宮坊のうえになだれるように落ちかかってきた。
が、とっさにそれに対抗して、
「おん　まからぎゃ　ばそろ　しゅにしゃ　ばさら　さとば　じゃく　うん　ばん　こく——」
のご真言を唱え、愛染明王に祈願し、性への煩悩を浄菩提心に転じた。
すなわち「煩悩即菩提」を念じて、性欲に執着する心を菩提心に変え、その力を一心に両手にこめた。
両手の甲と甲を合わせ、それを歓喜双身天の二身のあいだに無理やり、こじ入れて、

「大愛染金剛最勝尊よ、われに力をもたらしたまえ」
の祈念を大声で叫えた。
守宮坊はじつに十本の指に吸盤を持っているのである。その強靱な粘着力は守宮坊に常人にはおよびもつかない怪力をもたらす。万力の握力を誇る。
愛染明王の加護にあずかり、さらにいっそうの爆発力を得た。歓喜双身天の男神、女神を引き離したばかりか、その肌を断ち切るように裂いて、バッ、と鮮血を散らした。
「見よや、わが『守宮手』の強力はかくのごとし――」
守宮坊は勝ち誇って笑い声をあげたが、その笑い声が途中から悲鳴に変わった。
血しぶきのなか、巨木のように轟音とともに斃れながら、象頭の歓喜男神からその長い鼻が鞭のように放たれたのだ。
クルクルと右手に巻きついて肩の肉もろともそれをもぎ取った。
断末魔の悲鳴をあげながら、とっさに鮮血にまみれた右手を、左手でつかみ、それを銃眼たる窓に放り投げる――のと、ほとんど同時に、今度は歓喜女神の長鼻が飛んできて、守宮坊の首を、ボコッ、と引きちぎる。
噴水のように血を撒き散らしながら、首と、右腕をなくした死体が転がった。
もちろん、もうそこには歓喜双身天の姿などない。血の飛沫に、守宮坊の残骸が残されているだけだ。
そこに、蒼々茫々と長い影を曳いて、涅哩底王がたたずんでいて、ホッ、ホッ、と笑うと、
「さすれば、わしもいわせてもらおうよ――見よや、わが『魔獣召喚』の強力はかくのごとし――」
が、その笑い声も長くはつづかず、ふと守宮坊が右手を放り捨てた銃眼に目をやり、
「はて、あれは何のつもりであったかや」
と不審げに首を傾げた。

……第三層、輪廻孫六が護る「修羅堂」に侵入した皮膚坊の場合はどうか。――
皮膚坊が第三層「修羅堂」に足を踏み入れたとたん――
香炉の煙がうっすらたちのぼるなか、その像の背後から、ゆっくりと出てきた人影があるのだ。
皮膚坊のまえに立ちどまる。
一見したところ尋常な武士だ。あくまでも落ち着いたたたずまいである。その顔だちも地味にして沈着。――それなのに、ただそこにそうしているだけで、ひしひしと異様なまでの圧迫感を覚えるのはどうしてか。豪宕の迫力、凄絶な妖気……まずは常人ではありえない。左手に鞘ごめに脇差を持っていてその黒い下げ緒のヒモを指でたぐるように床へと伸ばしている。
「そうか」皮膚坊はうなずいた。「うぬが輪廻孫六であるか」

皮膚坊の腰から銀光が奔った。刀身を垂直にして、右肩にかまえた。必殺のかまえである。

「うむ――」

輪廻孫六はそれにはただうなずいたのみである。皮膚坊が抜刀したのを見ても太刀に手をかけようとさえしない。ただ脇差の下げ緒を繰って床に伸ばすのに余念がない。

「――――」

皮膚坊は苦笑した。

輪廻孫六のあまりといえばあまりの無防備ぶりにおのずと洩れた笑いであったろう。だが、すぐにその顔を引き締める。

相手は化け物とさえいわれている成尋衆の輪廻孫六なのだ。いかに体の体幹構造を自在に変え、変幻無窮の刀法を発揮する皮膚坊といえども、あなどって勝てるような相手ではない。

八双のかまえから、突然、あまりにも突然に、しかも下段から床をするようにして上方に剣光が飛んだ。おたけびが――ではなく、喝！　という気合が空気を震わせる。

いつ剣が八双のかまえから下段に移動したのか？　それすら視認することができず、また物理的にもありえない動きといっていい。節足動物、それも体節の位置を自在に変えることができるという皮膚坊ならではの剣法だったろう。

いかなる兵法者、忍者も、この太刀筋を予想することなどできなかったはずだ。これほ

どまでに速い太刀運び、その豪刀に対処のしようもなかったはずなのだ。

が、これもまたありえないことに、皮膚坊の刀身は、輪廻孫六に届かなかったのだ。何もないはずの空間で、ピーン、と撥ねかえされ、あまつさえその刀身がグニャリと曲がってしまったのだ。手がしびれた。

「おう！」

皮膚坊は瞠目した。あまりの驚きに石化したように体が動かなかった。

「これは忍法『金剛楼閣』――いかなる者の剣、槍、弾さえも通さぬが――」

輪廻孫六は刀を抜き放ち、いとも無造作に、片手切りに皮膚坊の頭を唐竹割りにした。

「わが剣だけはそのかぎりにあらず」

皮膚坊は頭部を両断されて空を仰いだ。噴き出した血が虚空に虹をつむいだ。その虹におのれの剣を放った。

「はて？」

輪廻孫六がそれを目で追ったときには、もうすでに剣は銃眼のかなたに消えていた。

「何の真似だ？」

輪廻孫六はその視線を皮膚坊に戻したが、彼がそれに答えられようはずがない。そのときにはもう血煙のなかに沈んでいった。

……第四層、孔雀啄が護る「地獄堂」に忍び込んだ明滅坊の場合。――

明滅坊はハエのような構造の目を持つ。

ハエは人間の十倍の速さで事物を見ることができる。あらゆる動きはすべて極端なスローモーションのなかにある。だから滅多なことでは人はハエを捕らえることができないわけなのだ。それというのも――

ハエの場合、光の明滅を一秒間に三千ヘルツまで認知できるからなのだった。人の認知速度はわずかに三百ヘルツ。……事実として、明滅坊は人の十倍の瞬間速度を誇っているのだった。

人間離れした敏捷性を持つ明滅坊であるだけに――

ふわふわと雲を踏むような足どりで、目のまえに現れた孔雀啄を見て、その目にかすかに憫笑に似た色が浮かんだ。

それも無理はない。

前髪だちに、大振り袖。――少女と見まがわんばかりの美麗きわまりない花の容色……いかに成尋衆が妖怪まがいの術者だと聞かされていても、どうしても多少はあなどる気持ちが働いてしまう。心情的にそれを抑えることができない。

しかも、その美少年が、まるで能舞台ででも使いそうな銀扇を顔のまえにかざし、いかが、といって、ニッコリ、可憐なえくぼをこしらえるのを見るにいたってはなおさらのことだ。

ましてや、

「これをみごとに避けられたら誉めてさしあげましょう」

そうしなをつくっていわれたのではどうしたって失笑せざるをえない。

もちろん、その銀扇のたばねには、長い、するどい針が仕込まれてある。だからといって、そのような扇、一張りで、何をどうすることができるものか。常人の十倍の速さを誇る明滅坊にしてみれば――笑止というのさえ愚かしい。

「勝負――」

孔雀啄はあでやかに笑うと、フワリ、と扇を投げた。

チョウがフワフワ舞うように銀扇が明滅坊に向かって飛んできた。

明滅坊は苦笑しながら体を加速させた――はずなのに。

「ぐわぁ」

扇に仕込まれた針は明滅坊の右目に深々と突き刺さっていた。絶叫した。

「これが忍法『時逆鉾』でございます。いかにあなた様が体を加速させようと、時間を逆流させたのでは、何の役にも立ちますまい――」

孔雀啄はあくまでも艶やかに笑って、

「針は長うございます。あなた様の脳まで届いておりましょう。もうあなた様は死に候えておいでです――」

が、明滅坊はその針をぐいと引き抜くと、それを銃眼の外に放ったのだ。そのまま前のめりに斃れていって血だまりのなかに沈んだ……

孔雀啄はいぶかしげに首をひねって、「はて、狂いでもしたか」とつぶやいた。
四人の忍法僧たちはこのようにじつにあっけなく死んでいった。
が、彼らが、その無残な敗北のなか、「われらは成尋衆に負ける、されど勝つ」という言葉を胸に抱きしめ、ひそかな喜びのうちに死んでいったことを、さしもの成尋衆も知るよしがなかった。

七

……それから半刻（一時間）ほどして紀州藩の二陣攻めが開始された。
「叢雲」の周囲には、馬蹄の響き、将兵の叫び、矢弦の唸り、はては銃声までもが渾然と鳴りわたって、ただならぬ地響きの音さえ聞こえている。将軍の命――というより天海大僧正の命かもしれぬが――を受けて、紀州藩が軍勢を出し、なんとか「叢雲」の進撃を阻止しようと、必死の襲撃にうって出た。
が、名君・大納言・頼宣の麾下たる精鋭、大軍をもってしても、この「叢雲」を敵にしては、まさに「蟷螂の斧をいからかして隆車に向かうがごとし」――とても相手にならない。
さすがに紀州の将兵は勇敢だ。死地にのぞんで臆することがない。
砂塵をまきあげ、馬を疾駆させ、移動する「叢雲」のまえに回り込んで、「無限軌道」に鉤爪のついた縄をかけ、乗り移り、車輪の回転をとめようとするのだが。――
車輪をとめるどころか、次から次に「無限軌道」に吸い込まれ、骨、肉ともに粉砕されてしまう。なかには馬ごと引き込まれてしまい、愛馬もろとも、無残に鮮血を散らすことになる。いや、そればかりか――
ときに円塔の屋根、あの怪鳥の嘴から、シューッ、という斧を研ぐような音を発して、人の腕ほども太さがあろうかと思われるような大鎖が号砲とともに放たれるのだ。
シューッ、シューッ、と擦過音を響かせながら、大鎖は地上にまで達し、しかも振り子のように左右に半弧をえがく。その大鎖になぎ倒され、吹きとばされて、大勢の将兵が地に真っ赤な泥濘をぶちまける。馬までも胴を両断されて血を噴きあげる壮絶さだ。
しかも――その鎖の先端には人の背丈ほどの大きさを有する両刃の鎌が装着されているのだ。その大鎌が、殺戮の歌をたからかに歌いあげながら、軽やかに右に、左に舞いあがり、五人、六人、と人を楽しげにひっさらうのだ。それを宙にてあざやかに解体し、頭、胴、腕、足と切断し、血の雨とともに地上にばら撒くのだ。
まさにこの世の地獄絵図。――地上は血の泥濘にべしょべしょになり、内臓からたちのぼる湯気が死の赤い霧となって朦朧とたちのぼる。血はおろか、人骨さえもバラバラと降りそそぐ。阿鼻叫喚、悲鳴と絶叫が入り混じるなかに、これはあまりのことに、ついに正気を逸したのか、ケラケラと笑う声がそこかしこから聞こえてくる。
人馬もろとも、数十人を一気に葬り去ると、さすがに一時的に満腹するのか、振りがお

さまるのを待って、ガラガラと——まるで死者の海から引き上げられる錨のように——鋼の響きを奏でながら、塔のなかに引き込まれていく。鎌に手があれば、その手さえ振りかねない陽気さだ。

その鎌の先端から血が驟雨のように滴り落ちる。肉片、指、耳、男根までもがボロボロと地上に降りそそぐ。赤い湯気がたちのぼり、それが桜の花びらを真っ赤に染めて、濃霧のなかに消える……

鎌が塔のなかに消えるのはほんのわずかな時間だ。どうやら、塔のなかで鎌は洗われるらしい。人体の断片をすべて削ぎ落とされ、血がきれいに洗われて、鎌は切れ味を取り戻す。——そしてまた塔の外に、ほうれ、行ってこい、と放り出されるのだ。思う存分、肉を裂き、骨を断ち、血を吸って、調子外れのテノールで「死の歌」を歌ってこい、と肩をたたかれながら。——

つまり——

徹頭徹尾、紀州藩の軍勢はこの「叢雲」に歯が立たないのだ。まるで太刀打ちできない。鎧袖一触、というのさえ愚かしい。「叢雲」にたち向かう者は、一瞬のうちに粉砕され、人体の残骸、死のオブジェとなりはてて、大地に惨たる屍をさらすはめになるのだった……

が——

その、黒煙吹きつけ、熱気が面を打ちつける坩堝のなかにあって、甲賀八郎だけは、行く手をさまたげる者とてなく、ただ一人、戦場を歩んでいく。

阿鼻叫喚、修羅のまっただなかにあるというのに、ふしぎに周囲を右往左往している軍兵たちの目に、八郎の姿は映っていないようなのだ。

いや、ただひとり戦場を歩んでいく、というのは正確ではない。そのまえをまるで露払いのように歩んでいる男がいるからだ。八郎のほうに顔を向け、わずかに鐺だけを腰に残し両刀を左手にまとめ、鞘ぐるみに抜いている。そして大刀の赤い下げ緒、脇差しの黒い下げ緒を、右手の指に巻きつけ、その両方をのばし、のばししながら、後ろ向きに歩いているのだった。——いうまでもなく、これは輪廻孫六だ。

彼に操られるまま、二本の下げ緒はのび、うねり、波うち、ときに渦さえ描きながら、そのあわいに泡だつように空間を形成している。輪廻孫六の右手を基点にし、その空間が漏斗状に大きくひろがって、彼がいうところの虚空蔵菩薩＝虚空間を生み出している。

それが八郎をすっぽり包み込み、その存在を周囲から隔絶せしめている。八郎を不可視の存在にしている——ために彼はこの混乱をきわめた戦場にあって、一人、無人の地を行くかのように歩むことができるのだ。

これ、すなわち、忍法「金剛楼閣」——

さらに——

八郎を無事に歩みせしめているのは、ひとり輪廻孫六の力だけではない。もうひとり、涅哩底王が踊るような足どりで、八郎のまえになり、後ろになり、忍法「魔獣召喚」を発

動しているのだ。

飢えた山犬とも、地獄図に描かれるような餓鬼ともつかぬもののけが何匹か、朦の気を浮かびあがらせながら、八郎に付きしたがっている。——ピョン、ピョンと飛び跳ねながら、移動し、まれに虚空間に接触しそうになる兵がいようものなら、その肩や、腰に容赦なく喰らいつく。

よほど痛いのだろう。兵たちは悲鳴をあげて、その場に倒れ込むのだが、なにしろ——虚空間にさまたげられ——彼らの目には見えないのだから、自分の身に何が起こったかを判断しようがないわけなのだ。ただ悶絶するほかはない。

「金剛楼閣」に「魔獣召喚」——二つの超絶の忍法に護られながら、八郎が向かうのは鳳輦車「叢雲」なのだった。

「叢雲」は下部に無限軌道を履いている。それが家屋の屋根ぐらいまでの高さに一階部分を持ちあげている。ために前部に斜面のように石垣を斜めに積みあげて門までの石段がある。

先行する輪廻孫六が後ろ向きのまま、その石段をあがると、両刀の鞘を腰に戻し、二本の下げ緒をクルクルもとに巻き戻していった。すると「金剛楼閣」がまるで霧が晴れるように消えていった。石段を上がる八郎の後ろで涅哩底王がなにか呪文を唱えるのが耳に入ってきた。どうやら「魔獣召喚」もそれで終わったようだ。

その石段を上がったところ、門の両脇に、孔雀啄、夜叉至の二人がひかえ、八郎を迎

えた。——二人とも、この世のものとも思われぬ美貌の主だが、それがあまりに度を過ぎて、なにか妖気のようなものさえ感じさせる。事実、この二人は、人外の魔物なのかもしれないが。

孔雀啄がほおにうっすら残る傷跡にツと指を這わせ、

「一別以来——」

とにこりと笑った。

二人が戦ったのは、ほんの数時間まえのことなのだが、「時逆鉾」をあやつるこの美少年は時間感覚が通常の人間とは異なるのかもしれない。——事実、八郎のほうは血どめを塗っただけで、まだ生々しい傷あとを残すのに、孔雀啄の傷あとはすでに薄皮が張っているようなのだ。

鉄鋲を打ち、鉄を張った門が、重々しく、左右に開かれた。

「されば、こう参られよ」

孔雀啄、夜叉至、輪廻孫六、涅哩底王——四人に前後を挟まれながら、八郎はなかに足を踏み入れる。

二層から三層、三層から四層、四層から五層へと階段を登る。三層ですでに成尋衆四人の姿は消えていた。わずかに壁の燭架に火がともされているだけで階段は暗い。——四層から五層へといたる階段の壁に窓があり、そこからどうにか外の風景をのぞむことができた。

そこで八郎はわずかに時間を費やした。が、すぐに登りだす。
ついに最上層まで登った。
「ほう」
第五層の「人間堂」に足を踏み入れて、そのあまりの巨大さにあ然とさせられたのだった。
まるで寺院の大伽藍を下から仰ぎ見るかのような天井の高さなのだ。優に、ふつうの城郭の二層分、あるいはもっとあるかもしれない。——五層の天守閣を持つ城はめずらしくないが、それに相当する部分が二層分あるということは、これは実質、六層の高さを有する城郭ということになりはしないか。
壁の高いところに大きな——人間の背丈ほどもある——窓がある。その窓にギヤマンが填められているのだ。それも透明なギヤマンではない。華麗に彩色されている。それも何色にもわたって。
八郎の知らない言葉であるが、要するにこれはステンドグラスなのだった。
いまも霧が濃い。ぼんやりとしか陽は射していない。それでも弱いなりに、華麗に彩色されたギヤマンを透かす陽光が美しいことに変わりはない。まるで堂のなかに虹がかかっているようである。
そう、たしかにギヤマンの絵はこの世のものとも思えないほどに美しい。色も美しいが、それ以上にその絵が美しいのだ。

桜の花びらが、絢爛、豪奢に吹き乱れ、舞い散るなかに、若々しい裸身の男女がひしと抱きあっているのだ。
それはこの国の美意識にあっては、いかにも露骨、あけすけにすぎる絵柄ではあるかもしれないが、ふしぎに猥褻な印象は受けないし、不潔とも感じない。たぶん、若い二人の官能の歓びが、あまりに燃えあがるように純粋に激しいために、それを不潔と感じる以前に、圧倒されてしまうからではないか。
——それはそうなのだが……それはそうだとして……
その絵の何かがとても気になるのだ。気になって、気になって、どうしようもない。居ても立ってもいられない。
この胸騒ぎはどうしたことか。これは何だ？　何なのだ？　この胸を痛いほどにしめつけてくる不安感をどう説明すればいいだろう。これは……これは……
「ああぁ！」
八郎の喉から声がほとばしった。声はとまらなかった。
「あぁ！　あぁ！　あぁ！」
気になるのが当然だった。気にならないほうがおかしかった。
そのギヤマン窓に描かれた若い男女の顔は……甲賀八郎と、伊賀響なのだから。——

八

「遅い。ようやくのことに、そのことに気づきおったか。遅いが——まあ、気づかぬよりはましであろう」

一方の壁が開口されて張り出しの露台につづいている。露台は広い。能舞台のようだ。

——そこから含み笑いの声が聞こえてきた。

その露台に護摩壇が築かれている。護摩炉もある。護摩炉には火が焚かれている。四隅に閼をたて、そこからかなり離れた反対側の壁に三角壇が設えられ、両者をつないで金剛線が張られている。

これまで八郎はそこにそんなものがあることに気づきもしなかった。それというのも、その金剛線の内側がすなわち結界をなしていて、それがあまりにも強力なものだったからである。結界が張られているために、その内陣にあるものは、すべて不可視化されていたのだった。

気づいてみれば、そこには礼盤、乳木を載せた脇机が置かれ、扇子、金剛杵、金剛盤などの密教用具が用意されていて、なにより——ひとりの僧侶が悠然と座しているのであった。

その僧侶が、成尋であるのは、全身から発せられている、その妖しい虹のような精気からも、まず、まちがいないことのように思われた。これほどまでに超人的な存在感を放つ者が並みの人間であるはずがない。怪物とも、化け物とも称される成尋衆を率いる怪僧ならではのことだろう。

これまで——そしていまも——護摩をたいて修法に励んでいたらしい。護摩炉に燃える火にその顔があかあかと照りかえして光っているのが、なおさらに超絶の気力、精気をうかがわせる。——護摩炉から立ちのぼる煙に成尋の姿は揺れていた。

「成尋、か」

まずはそのことを確かめた。

「左様、そしてうぬは——甲賀八郎であることよ、のう」

成尋は低く笑って、

「あいにくではあるが、天海子飼いの忍法僧四人はことごとくあい果てたぞ。うぬは一人である」

鈍い痛みのようなものが胸を走るのを感じた。しかし、いまは彼らの死を悲しんでいるべきときではない。

「聞こう。なぜ、あそこにおれと響の絵が描かれているのか」

「おう、いわいでか。いやさ、いわせてもらう——ふふ、どうしてこれをいわずにおられよか」

成尋はまた小山のように体を揺さぶって笑うと、

「我に、即身成仏なした者を、この世に呼び戻す秘技これあり。すなわち、すでに死して、何十年もけみした者を、この世に再生させる秘術の心得、これあり――とまずは左様に心得よ」

「……」

「もとより、即身成仏は、ただの死にあらず。そのこと自体がすでにして一大難事業である――死して、なお生きるがごとし、大情念を残し、ふたたび現世にたち返るだけの大気力を、フツフツ、身内にたぎらせおりし者にのみ可能なことであれば――とてものことに凡人、いやさ、そこらの並みの英雄、天才たち程度では、およびがつかぬことである。まずは、真言密教の開祖、弘法大師空海に匹敵するほどの大意志、大生命力、大運命力を持つ者にして、始めてかなうことである」

「それが――権現家康公だというのか。だが――よしや家康の再誕がかなったとして、家康がこの世に復活したとして、それがいまさら何の役に立つというのか。そのことをもってして、成尋、おまえはいまさら何をなそうというのか」

「聞け、聞け、聞けい――まずはわれの話を聞いてからのことにせい」

成尋は、しゃあ、と火のように熱い息を吐いて、

「戦国の世がな、これで終わってはならぬのだ。これで終わっては後のちの世に禍根を残すことになる。これでは画竜点睛を欠くことになる。まだまだ殺したりぬのじゃ。まだまだ焼きたりぬのじゃ。まだまだ滅ぼしたりぬのじゃ」

「……」

「何で、この世の地獄、この世の修羅、この世の畜生、この世の餓鬼が、あの程度に生ぬるいものであってよいものか。あの程度で終わっては、天上界はおろか、人間界に輪廻するさえ覚つかぬ。闇さらに深くなかりせば、光さらに得ることかなわず。――わしはな、この世に真の救済をもたらしたいのじゃ。この世を真の天上界あらしめたい。それにはいますこし、この国の人間たちには、この世の地獄、この世の修羅、この世の餓鬼、この世の畜生の境遇にあまんじてもらわねばならぬ。それには、強き者、弱き者、正しき者、よこしまなる者、知恵ある者、愚かなる者、罪ある者、罪なき者……玉石ともにこれを焚き、降魔の剣を存分に振るうを辞さぬ大魔王を要す。残念ながら、いまの徳川家にはそれだけの大器量はない」

「降魔の剣を振るうを辞さぬ大魔王……それが家康だというのか。そのために死した家康をふたたびこの世に呼び戻そうというのか。おまえ――正気か」

「最初からそのつもりだったわけではない。この世に真の大魔王を復活せしめるには、欠くべからざるもの、なくてはならぬものが、そのときのわしにはなかった――」

「なかった？　何が？」

成尋のもってまわった口調が、ふと気になって、そう尋ねた。が、あっさり無視され、成尋はそのまま何も聞かなかったように、言葉をつづけるのだった。

「いやさ、いかにそのものを探そうとて、求めようとて、そもそもそれはこの世にありう

べきものなのか、存在しうるものなのか、それすらさだかにはわからぬ始末であってな。やむなく大魔王の復活はあきらめて、次善の策に望みを託すこととあいなった。それがすなわち――忠長に謀反のタネを植えつけ、家光を相手に、骨肉あい食む大乱を、この地上に現出せしむることであったのだが。――覚えておろう。大御所秀忠夫人、江が危篤とあいなったとき、わしは成尋衆を使嗾せしめて、忠長を焚きつけ、さらに死にゆく江に『忠長を三代将軍あらしめよ』と遺言させるつもりであった。徳川あとつぎ問題を紛糾せしめ、ついには同族あい殺しあう、ふたたびの戦国の世を呼び戻す所存であった。そのためにすでに慶長十九年の昔より、その下準備を怠らなかった。だが、のう。いかんせん忠長はもちろん、家光もあまりに小粒にすぎて――わしはいま一つ、この計画に乗り気になれなんだ。そのときに、神よ、いや、わしの場合は――」

成尋はその灰白色の蠟のような顔に、ニッ、と笑いを刻んで、悪魔であろうかのう、とつぶやいて、

「そのときに――悪魔よ、ご照覧あれ――出会うたのが、十二歳の甲賀八郎、伊賀響の二人であった。おお、あのときのわしの、恍惚たる胸のうちを思え」

成尋ははるか頭上のステンドグラスを指さして、からからと笑った。

「わがこと成れり！　わしは二人を見てさように確信した。もはや、徳川家に内乱を求めるなどという、卑小でもあり、迂遠でもあり――意にも染まず、思いにも添わぬ――次善の策になど望みを託さずともようなった。これで最善の策たる『大魔王召喚』を可能たらしめることができるようにあいなったのだ、とさように思えば、その歓びに、じつに、は、ははは、手の舞い足の踏むところを知らず――」

その笑い声を聞きながら、

――そういえば、あのとき……

と八郎は思い出していた。

あれはもう六年もまえのことになろうか。成尋衆が江戸城内の紅葉山に姿を現し、伊賀五花撰の花防御陣もあらばこそ、これを蹴散らし、殲滅し、あたかも無人の野を行くがごとくに攻め込んできたことがある。

成尋衆は、あのとき大御台所様をして「忠長を三代将軍あらしめよ」という遺言を残させて、徳川家に内紛のタネを撒く所存であったのにちがいない。

それを――

響の「桜花」を、八郎の「有情」に接続させ、その力をもってして、迫りくる成尋衆を撃退しようとしたのだった。

たしかに成尋衆はあの場から消え去りはした。

が、それはとても、撤退させた、などというものではなかったように思う。なぜか、八郎、響を見るなり、にわかに心変わりしたように、彼らは――いや、成尋が麾下の成尋衆に命じて――その場からすみやかに立ち去っていったのだ。なぜに、彼らはそれ以上の進撃を思いとどまったのか。いったい何があのとき成尋を翻意させたのだろうか。

成尋自身の言葉によれば、彼は八郎、響を見て、わがこと成れり、とそう確信したのだという。徳川家に内紛を起こす、という計画を中止し、「大魔王」を復活させる、という最善の策に邁進すべく、方針を転じたのだという。どうしてなのか？　それに――その、わがこと成れり、のわがことというのは何なのか。

八郎の内心の疑問を読み取ったかのように――

「ふふ、先ほども申したように、即身成仏を成し遂げられるだけの大意志、大生命力、大運命力を持った者は、この世に数えるほどしか居らぬ。そうさのう。まずは指を五本折ることができるほどにも居るかどうか――ましてや、『大魔王』たる資質を持つ者にいたっては、さあ、いざ、それを探すとなると、さながら広大なる砂浜にて一粒の砂金を求めるようなものにて、なかなか容易なことではない」

「それが家康公、ということか」

「家康公？　ふふ、なぜに、よ」

「……」

「もとより家康もかなりの精神力、運命力を持ちあわせてはいるが、わしの野望をことならしめるには、まだまだ不十分でのう。力不足であるわい。さきほども申したように、徳川家をあやつるは、我が次善の策であって、あまり意に染まぬことではあったのだが……いやさ、我には、ほかに意中の人物があったのだ。さればとて、その御仁は、あまりに規格外、もはや人間外のお人なれば、とても復活、再誕をオン願うは無理と、左様にあきらめておったのだが、はからずもおまえと響が見つかった。これならば、と復活すべきを、家康からその御仁に変更することとあいなった――」

「勿体ぶるな。いえ、誰なのだ、そのうぬの意中の人物とは？」

「織田上総守信長公――であらせられる」

九

「……」

一瞬、意識が真っ赤に燃えあがるのを覚えた。燃えあがり、天を掃いて、そして燃え尽きた。

――信長！

その、死灰のように真っ白に燃えつきた意識のなかで、そうか、そうだったのか、という述懐の声だけが虚ろに響いた。

――すべてがいま明らかになった。

そんな思いがした。

当然そうあるべきことであり、そうなるべくしてそうなったことでもあろう。

たしかに、この国をふたたび大乱の世に戻すには、家康よりも、はるかに信長のほうが適材たるべき人物であるはずだ。

——どうして、そのことにこれまで一度として思いいたらなかったのか。

信長の首は、「本能寺の変」ののち、光秀が懸命になって探したが、ついに発見されずに終わったという。成尋がひそかに本能寺から持ち出した、と考えるのは、あまりに荒唐無稽だろうか。たしかに荒唐無稽かもしれないが、さらに想像をたくましくして、その首を高野山に葬った、と考えたらどうだろう。それなら、どうして仏敵であるはずの信長の墓が高野山にあるのか、それを説明することも可能ではないか。

——いや、そんなことより何よりも……

この、一世の怪物、化け物たる成尋が、信長を復活、再誕せしめるとそう断言しているのだ。それをどうして疑うことなどできようものか……

「意中のお人はある。が、それを復活せしめんがためには、まずはそのお方の髑髏を用意せねばならぬのじゃ。即身成仏したものなれば、その木乃伊から頭部を取り外さねばならぬ。土葬に処したる者なれば、その頭部を墓から掘り出さねばならぬ。そして、その髑髏をば、じゃ。あたかも生前の顔かたちを復元せしがごときに、口に舌をつけ、歯を入れ、頭皮は漆を塗り重ね、顔面は乾いた漆にて仕上げねばならぬ——そのうえで、その髑髏をまえにし、必ずや反魂香を焚き、薫を充満させ、反魂の真言を唱えること千の余……さらに、これに金箔を三重に塗り重ねること、かならずや忘るるべからず。ふふ、どうじゃ？聞くだに大変であろうが——だが、大変なのは、これのみにとどまらず」

「……」

「これだけの準備をすべて成し終えたのちに、じゃ。この黄金髑髏のまえに、たがいに心より愛しあう若き男女を連れてこねばならぬ。そうよ、これがまた難しい。この世の男女に、ほんとうの愛、などというものが成立しうるのが、いかに数えるほどのことでしかないか、いかに奇跡的に希有なことであるか——それを考えれば、なおさらに、のう」

「……」

「しかるべきして、若い二人を、その黄金髑髏のまえにて性交せしめるの要あり。そのうえで、二人のあいだに生じる和合水をば、この黄金髑髏の表面に塗り重ねるの要あり。それを左様、百二十回まで数えせしめるべし。しかるべきのち、やっとのことに、わが大魔王の復活、再誕あいなれるよしにて——この者、真の魔王として、この世に君臨し、それを統括すべき資質の持ち主なれば、この後、世界は、その者の膝下に屈するさだめにあるべきなればして」

「……」

「ところがじゃ。よしや、つつがのう復活、再誕せしめたとて、なまじ大魔王たるべき者は大精神力、大運命力の持ち主ゆえに、その烈火たるべき大気迫を、わがくびきのもとにつなぎおき、馴致せしめるのが、一苦労でな。さらに、その後、これをかりそめにも常人に号令し、それを統括せしめうる域にまで持っていくのが、また一苦労。——つまりよ、これを復活、再誕させただけでは、まだ人にあらず、いわば凶暴、暴虐のきわみたる猛獣の域にとどまりしゆえに、のう」

「……」

「この『叢雲』は、その猛獣を人あらしめるべく、いわばしつける目的あるがゆえに、大納言忠長をあざむき、建造せしめたるものなり、と知れ――すなわち、無事に復活、再誕をなしとげた大魔王たるべき者は、この塔の一層から五層をめぐり、畜生界、餓鬼界、修羅界、地獄界、人間界の五道をめぐって――模擬的にではあるが――輪廻を重ねることになる。それをもってして、天上界に君臨すべき大魔王たる自覚を持たせねばならぬゆえに、のう。その教導が終わったころに、この『叢雲』は――さて、それが京になるか、江戸になるかはいまだ知れず――目的地に着いている筋書きなればゆえに。――また『叢雲』がしずしず街道を進むにつれ、天然自然に、徳川の世に不満を持つ外様大名、陋巷の痩せ浪人、流浪者たちが参集してくるは必定のことにて――」

「待て――その、黄金髑髏のまえで、性交させる若い男女というのは、もしかして、おれと響のことか」

「そうよ、うぬが想像するとおりじゃ。この場合、その男女、童貞、処女なればさらによし。互いに惹かれあう気持ち、強ければ強いほどさらによし――されば八郎よ、響とここにて交われ」

「何をバカなことを――成尋、うぬは外道、魔道に堕したのか」

「いやか」

「知れたこと」

「されば、おまえには響と命のやりとりをしてもらわねばならぬ。殺しあいをしてもらわねばならぬが、のう。それでもよいのか」

「なに？　何だと？」

「されば、よ。精液も、血も同じものと知れ。愛しあう二人の血を髑髏に塗っても同じ効があると知れ。ただし、殺しあう場合には、どちらか一人にはかならずや死んでもらわねばならぬ。純粋無垢の愛がきわまるはての和合水にひとしいほどの験を求めるのであれば、それと同等、あるいはそれ以上の必死の思いを必要とするゆえに、のう」

「何をバカなことを――」

八郎は嗤ったが、その顔がこわばっているのが自分でもわかった。いずれ自分は響と殺しあうことになる、というあの漠然とした、しかし恐ろしい予感を思い起こさずにいられなかったからだ。

「どうしておれが響と殺しあったりするものか」

「それがするのよ。せずにはいられないのじゃ――これがおもしろうて、おもしろうて、のう」

成尋は、パチン、と両手を打ち鳴らすなり、真っ赤に塗れた口を開けて、天上を仰いで悪魔の哄笑を放った。

「おお、おお――かほどにおもしろいことがあろうか。これほどまでに愛しあう二人を生木を裂くがごときに引き離し、かれんなり、その想いのたけをつのらせ、つのらせして、

じらしにじらし、待たせに待たせて、大魔王を復活せしめるこの日をもってして、ついに性交せしめる。かわいや、彼らは自分たちの愛がこうまで操られていたことを知らぬ、よしや知ったとしても、ここまで沸騰寸前にいたった愛の想いを、その情欲を、いまさらにとどめることなどできようものか。わしに操られるを承知のうえで、肌を重ねずにいられまい。つまりは復活する大魔王のにえであるわい。人間の愛などというものはかくのごとし——わが忍法の精髄は人の運命をあやつることにあり。八郎、響の二人こそは、わが生涯における、わが忍法の最大の精華であるわい」

成尋は笑う、笑う……その笑い声を悪魔の嘲笑のように聞きながら、八郎はハッと思い当たることがあり、ほとんど狂乱したように質問を重ねる。——

「待て、待て、待てい——」

その声はほとんど悲鳴のようであった。このときようやく八郎は自分が真実に到達したのを知ったのだった。しかし、それは何たる苛酷にして、陰惨たる「真実」であることか！　このとき八郎の声はほとんど泣いていた。

「おまえはさっき、ふたたび戦国の世を呼び戻すために、慶長十九年より、その準備を怠らなかった、といった。それはつまり、三代将軍をつぐのは家光か、忠長かをさだめる、あの忍法合戦のことをいってるのか」

「そうよ。いまごろわかったか。考えてもみよ。何で、あの沈着、大智たる天海大僧正が、それほどまでの徳川家の大事を、甲賀、伊賀の忍法合戦にて決する、などという児戯に類することで決定することに思いいたるものか。そのようなことで後継ぎを決めたとて、いずれはまた徳川が揉めることになるは必至ではないか。そうさ、あのとき天海の随僧をつとめていたのがわしであったのさ。天海が自分でもそうと気づかぬうちに、わしが忍法合戦の知恵をソッとあやつの耳に吹き込んでやったのよ。今日あるがゆえを期して、のう。この日のために、のう。——はは、そうとも知らずに、くびきを放たれた甲賀十人、伊賀十人、見事に死におったわ！」

成尋の哄笑の嵐のなか、あまりの衝撃に八郎は知らず「有情」を起動していた。爆発するように「有情」は虚空にひろがった。瞬時に仲間たちに達した。

——聞いたか、伊賀の女たち、甲賀の男たち、ここに、われらの真のかたきがいる。われらの真の敵がいる！

「有情」空間のなかに絶叫を振りしぼった。慟哭を放った。そして——

十

——おう、聞いたぞ、甲賀八郎。

伊賀五花撰の女忍たちの、これもまた血涙ふりしぼる慟哭が虚空を震わせた。

「思うべし！　むなしく散っていった、わが伊賀精鋭十忍の名を……」

すなわち——、

お幻
朧
夜叉丸
小豆蠟斎
薬師寺天膳
雨夜陣五郎
筑摩小四郎
蓑念鬼
蛍火
朱絹

それに重なるように甲賀五宝連の男たちの絶叫が怒濤のように虚空に鳴り響く。
「そして、悲憤のはてに死んでいった、わが甲賀精鋭十忍の名はかくのごとし！」――

甲賀弾正
甲賀弦之介
地虫十兵衛

風待将監
霞刑部
鵜殿丈助
如月左衛門
室賀豹馬
陽炎
お胡夷

この二十忍の名は、彼ら若い忍者の脳裡に、あかあかと鮮血の色をもってして書き込まれ、それがついに消えることはない。
はからずも、彼ら、伊賀、甲賀二十忍の墓は慈尊院村にある。
といっても、一体たりと骸が埋められているわけではない。どこにも戒名はおろか、俗名さえ記されてはいない。卒塔婆もない。わずかに土饅頭が二十あるのみで、蕭殺たる風に吹かれるまま、生い茂る雑草のなかに捨ておかれている。――その土饅頭さえもが、表面の土が削られるままに、たんなる地面に帰ろうとしているようだ。
もちろん、慈尊院村の人たちで、その土饅頭にかりそめに葬られているのが、どのような名前の、どのような素性の人たちだったか、それを子細に知る者はいない。興味を持つ人たちさえいないかもしれない。

……一夕、どこからとも知れず、集まり来た黒衣の人たちが、ただ黙々と土饅頭を盛り、水を注ぎ、野花を活け、自分たちで経を唱えると、月が出るまえに、いずこかに散っていった。

土饅頭のまえにこうべを垂れたあの者たちはいったい何者なのか。あの者たちの歔欷、慟哭はなにゆえをもってしてのことだったのか？　それを知ろうとする者とてない。

この地に葬られた死者たちが、一生を費やし、超人的な忍法を会得し、しかしついに報われることなく死んでいった、という事実を知る者はさらにない。

それなのに、どうしてここに育った甲賀の少年たち、伊賀の少女たちは、ことあるごとに、ここに集い、野の花々を供えるのを、日々の習わしにするようになったのか。

その理由を説明できる者はいない。幼い彼ら自身、どうして自分たちがこの墓地にこうまで引き寄せられるのか、それはどうにも理解できないことであったのだから。

ただ、物心つくようになり、甲賀・伊賀の忍法合戦のことを知るにいたって、二十忍の苛酷な運命に粛然とせざるをえなかったのであるが――それはそれとして、その一方で、彼らの死闘がふしぎなまでに神話的な光芒をおびて、追憶されるようになったのもまた事実であった。

彼ら自身、誰もそこまで冷静に分析しえるだけの力はなく、またその必要も感じなかったが、それは一種の荘厳なる運命劇、であって苛酷、悲痛ではあるが、それだけにどこか崇高たる調べを奏でもする忍者の「神話」として意識されもしたのだった。

人は生きるがために誰しも「神話」を必要とする。それが、ときの権力に使い捨てにされ、のざらしにあい果てようと、誰からもかえりみられることのない忍者であれば、なおさらのことに――。

それゆえに――

運命に導かれるままに生き急ぎ、運命に殉じて死に急いだ甲賀・伊賀二十忍の生きざま、死にざまに、彼ら若い忍者たちは、どこか憧憬めいた思いさえほのかに抱くようになったのだった。

それだけになおさら、甲賀・伊賀二十忍の「神話」を冒瀆し、それを足下の泥に踏みにじった成尋衆を許せるはずはなかった。

どうして神話の二十忍を虫けらのように滅びの淵に追いやった成尋衆を許すことなどできようものか。許せない！　魂が押しつぶされるようなその悲憤、真っ赤に燃えあがるようなその怒り――

それがあるがゆえに、成尋衆と最後の決戦にのぞむべく若い彼らは地をひたすらに疾駆するのだ。

「叢雲」に向かって……いや、運命に向かって、忍者の悲劇、その宿命を食い破らんがために。――

甲賀の男たち、伊賀の女たちは、このときはじめて、忍者の、あの光彩陸離たる神話世界に、みずから身を投じたといえるかもしれない。

このとき濃霧たちこめる紀ノ川に朝陽はなかった。しかし彼らの脳裡には、赫奕たる日輪がまぎれもなしに昇っていたにちがいない。

——成尋衆、滅ぼすべし！

その灼熱の思い、溶鉄の怒りだけが、彼らをつき動かした。もはや何者たりと彼らをとどめうるものはない！

むろん、その怒りは八郎にも共通した。いや、忍法合戦において父母を失った身なれば、その怒りはほかの誰よりも強いものだったかもしれない。怒り、そして悲しみが。

——火のように激しく噴きあがって魂を灼いた。身を焦がした。

考えたくはないことだ。想像したくもないことだ。しかし——どうして、双子の兄妹でありながら、八郎、響の二人はこれほどまで強く互いに惹かれあうのか。愛しく想いあうのか？　もしかしたら、そう、もしかしたら、それすらも成尋の「狂儡」のなせるわざなのではないだろうか。すべては迷妄なのではないか。

「これで十分だ。もういい。もうおまえの話は聞きたくない」

八郎の声は怒りをはらんで低かった。自分でもそうと意識せずに自然に手が太刀にのびていた。

「成尋、おれはおまえを切る。おまえの『狂儡』を憎むからだ。切らずにいられないからだ」

「ほう、いかにして」成尋がからかうようにいう。「わしを切るというのかな」

一瞬、八郎の胸に疑問がきざした。この男は何をいってるのか？　しかし、その疑問に怯むより、成尋に対する憤りのほうがはるかにまさった。その怒りにつき動かされるかのように、剣を抜き、ツツッ、と足を床に走らせた。

「このようにして」八郎の喉から声がほとばしった。「切る」

剣を抜きはらいざまに成尋の首をかっ切ろうとした。が、はじき返された。何に？　それがわからない。なにか、そこに目に見えない巨人のようなものがいて、やにわに、どん、と体を押し返されたかのように感じたのだ。もちろん、それで怯んだりはしない。あきらめもしない。というか、剣客の本能のようなものが自然に発動され、身をひるがえし、向きなおりざまに、跳んだ。上段真っ向から唐竹割りに切ろうとした。だが、雷光のようなものが剣尖にほとばしったのだ。目にも見えなければ、音にも聞こえない。しかし、たしかに奔った。八郎の体をしたたかに跳ね跳ばした。

とっさに転がり、受け身をとったのはさすがだ。瞬間、反射的に矛眼術を発動させたのも、八郎ならではのことだろう。が、矛眼術を発動させたとたんに、成尋の姿は消えていた。つまり八郎の視線は成尋に届かなかったのだ。

——結界か。

ようやくそのことを覚った。顔から血の気が引いた。

剣も届かず、矛眼術も効を奏さない……いまだかつてこれほどまでに強力な結界は体験

したことがない。ほとんど輪廻孫六の「金剛楼閣」に匹敵する、いや、それ以上はるかに強力な結界であるようだ。これをどう破ればいいというのか。

「左様、いかにしてもおまえにはわしを切れぬのだ」

成尋はさらにあざ笑うようにそういい、

「おまえが切るべきは、あるいは切らるるべきは、べつにいる――後ろを見よ」

「後ろ……」

いつからそこにいるのか、孔雀啄と輪廻孫六の二人が階段上がり口の両端に、こま犬のようにひかえていた。

が、八郎の目は二人をとらえても、彼らのことをほとんど意識にとどめなかった。八郎の視線は彼らの真ん中に立つ彼女ただ一人にのみ集中した。余人のことなど気にとめる余裕がなかった。

「響――」

思わず駆け寄ろうとした。

響の腰から白光がほとばしった。凄まじいまでの殺気をはらんだ一颯だった。それをかろうじて避けることができたのは八郎のするどい運動神経なればこそのことだ。剣技ゆえにではない。が、それでも必死に飛びすさった八郎の袴の裾が、すぱり、と断ち切られていた。

「な、何をする、響――」

さすがに八郎の声は悲鳴に近かった。いや、むしろ慟哭というべきか。

「響……わたしはそのような者ではない。わたしは伊賀の朧。そして、おまえは宿敵、甲賀弦之介――」

「な、何！　朧、弦之介――」

響の体が華麗に舞った。響はこれほどの剣技の主であったか。――その変幻自在の姿形からやつぎばやに放たれる剣は、じつに剽疾勁捷（ひょうしつけいしょう）にして、さしもの八郎が応戦一方にまわらざるをえない。いや、一度ならず、その剣尖は、八郎のヒフを裂き、血をほとばしらせもした。ついに堪えきれずに八郎は、はっし、と刀身を咬みあわせた。火花が散った。鍔（つば）ぜりあいとなった。どん、と力押しに押し返した。たまらず響が後ずさる。

孔雀啄、輪廻孫六がゲラゲラと笑う。

成尋も笑いながら、これ、まだ間にあうぞ、という。

「響と交われ。愛しい女と交わるは至上の極楽ではないか。愛しい女と殺しあうは地獄ではないか。極楽を捨て、地獄を選ぶ法やある。なにしにもって響と交わるをためらうことがあろうや」

孔雀たちの笑い声も、成尋の言葉も、いまの八郎の耳には入らない。必死にいう。

「気をたしかに持て。おまえは朧ではない、響だ。おれは甲賀弦之介ではない、甲賀八郎だ――」

が、八郎の必死の説得も、さらに響の耳に入る様子はない。響が叫ぶ。

「思えば、わたしは愚かであった。わたしがあのように色恋にうつつを抜かしていたばかりに、あたら伊賀の精鋭八人を死に追いやってしまった。あの者たちにいかにして詫びればいいか。詫びる言葉などあろうはずがない。せめてもの供養に、憎っくき弦之介の首をあの者たちの墓前に供えなければ、あの世であの者たちにあわせる顔がない」

——そうか。

ふいに八郎はそのことに思いいたった。冷えびえと胸の凍てつく思いのうちに。

そのこと——どうして、成尋が猿の群れを八郎にけしかけたのか、ということに……。

八郎は棟梁猿が抱いた赤ん坊サルたちを無碍に殺すことができなかった。おそらく成尋には、この日のあるを期して、八郎の心情がどれほどのものであるか、それを推し量りたかったのではないか。いかに響に襲われても、八郎にはこれを殺すことはできない。そうであれば、ついには響とまぐわうほかはない……そのことを確認したかったのではないか。

きえぇーっ、と響の喉から気合が放たれた。響は高々と跳んだ。その跳躍力も恐るべきものだが、それよりも壁に着地し、数瞬、その壁を走るようにして八郎に挑んできたその体技こそが恐ろしい。その一撃は下から上に風をまいて旋回してきた。それをとっさに跳ね返すことができたのも、やはり剣技からではなしに、抜群の八郎の反射神経ゆえにだろう。

「あ……」

氷柱が砕けるように響の刀が折れた。

とっさに飛びすさり、剣を投げ捨て、しかし、そのことに怯むではなく、響の目がさらにらんと光った。

「やめろ、響——」

悲鳴をあげたのは八郎のほうだ。が、遅かった。そのときにはもう響の盾眼術は起動されていた。

桜花、散るべし

一

……紀州藩の二陣は、正午、陽が中天にさしかかるのを待ち、「叢雲」への総攻撃を開始した。

それが未の刻限にはもう撤退を余儀なくされた——というのだから、正規軍を擁しての作戦が、わずか二時間余をもってして、無に帰したことになる。

総勢四百余人の精鋭部隊がほぼ壊滅状態におちいったのだという。

申の刻にはもう全軍が敗走していた。

あとには折れた槍、刀、竹束、材木、旗さし物、なにより人馬を問わず、死骸が累々と積み重なるように残されていた。血臭たちこめ、はやくも腐敗臭が漂う……地のそこかしこに消え残った火が、赤い火照りを暗い空に投げかけた。まるで地獄の釜があいたかのように。

これを見るかぎり、紀ノ川が赤く染まった、という、のちの風聞もあながち大げさとばかりはいえないかもしれない。

山桜はいまが散りどきのまっさかりであれば、この惨たる戦場にも、霏々として花が降りしきり、ついに止むことがない……あたかも、ここにて滅びせしもの、死にせしもの、すべて安らかに眠れ、と声なき声にて慰撫するかのように。

朝からの濃霧はさすがに引いたが、それと入れかわるように、黒雲、天にさしかかり、まだ暮れるには早いというに、暗然とした翳が地上を閉ざしつつあった……

結局、紀州藩の襲撃は、「叢雲」の進攻を寸毫も止めることができなかった、ことになる。

が、それでも「雨」と名乗った傭兵たちだけはほぼ殲滅に追い込むことができたようだ。

紀州藩が攻撃をかけるまえには「雨」の、抜刀隊「驟雨」、鉄砲隊「雷雨」、別働隊「霖雨」はあわせると優に百二十～百三十人はいたはずだ。

それがいまは三分の一近くに減っている。「霖雨」はほぼ壊滅したようで——じつはこれには涙と現の働きが大いに貢献しているのだが——いまは「驟雨」と「雷雨」をあわせて四十人ほどというところか。

「叢雲」をかこむように、転々と移動する「雨」の松明が、思いのほか少ないのが、そのことをよく証している。

さすがに勇猛をもって知られる紀州兵だけのことはある。

「叢雲」本体、それを護る成尋衆には指一本すら触れることができなかったというもの

の、「雨」を斃すことでかろうじて面目をほどこした、といっていい。
が、その紀州藩第二陣もすでに撤退した。いま、この戦場にあるのは「桜花」のみ——
雨の到来を予兆するように風が強さを増しつつある。
繽紛として血が散る、花が舞う。
まさに血風、花吹雪だ。
そのなかを「桜花」が「叢雲」に向かって進攻している。河原は比較的、平坦であり、死骸を踏まないように注意しさえすれば、どうにか先に進むことができる。——「叢雲」自体が動いているために、それに追いつくのに多少の時間を要するのはやむをえないが、この調子なら、あと四半刻（三十分）もすれば、なんとか追いつけるのではないか。
「桜花」を操縦しているのは根来転寝だ。一層部分に身を横たえ、宝塔の門扉を開き、それを窓がわりにして、外の仲間たちと話をしている——もっとも「桜花」は、「叢雲」とは異なり、いわば神輿のようなものだから、砲塔の高い戦車ぐらいの大きさしかないのだが。
「桜花」を先導しているのは甲羅式部。その後ろには蓮がいる。「桜花」の外縁に寝そべり、疲弊し、満身に傷を負った身体を休ませているのは、現に、涙の二人だ。後ろには蜩七弦、碁石才蔵の二人がつきしたがっている。
総勢七人の陣容だ。彼らは「叢雲」に向かう。
一つには、響を救出し、八郎や、滑婆を援護するために——もう一つに甲賀・伊賀忍法

合戦にて死んでいった二十人の忍者の無念を晴らすために。——
根来転寝は門扉越しに、空を仰いで——
「いやな天気だ、妙な天気だ」
という。
まだ昼下がりの刻限だというのに、天地は蒼茫とかげって、冷たい風が、花を散らすままに、びょうびょう、吹きわたる。地に横たわるは、ただもう死体、死体、死体ばかりなのだ。
根来転寝が「いやな天気だ」というのは必ずしも天気のことばかりを指してのことではない。彼自身にもはっきりこうだと具体的に指摘することはできないのだが——
この風景には何か異常なところがある。いや、いたるところに死者が散乱する風景が異常でないはずはないのだが。——
それ以外にも、感覚外の感覚、とでもいうべきものにかすかに察せられる何かがあるのだ。きわめて異常な何かが。
陰鬱、暗澹たる風景のなか、目にも見えず、耳にも聞こえず、肌にも触れず、しかし、たしかに何か激しいせめぎあいのようなものが虚空に満ちていた。ピリピリ全身を感電させていた。
それも当然かもしれない。
いま——

高野全山の名だたる高僧たちが、じつに数十人、一心に「怨敵逃散」の祈禱にあたっているからだ。

怨敵逃散、それに弘法大師空海のオン招来を乞い願う、懸命の行であった。

なにしろこれは、高野山にとって、仏敵・信長が高野山攻めを発動して以来の最大の危機、法難といっていい。

高僧たちも必死にならざるをえない。

が、何たることか、招来オンたてまつった弘法大師空海の仏力をもってしても、成尋が招来せしめんとしているそのものを折伏しきることができずにいる。

高僧たちは、それの何者たるかを知らぬままに、ただ弘法大師空海に匹敵する——そのようなものが世にありえようか！　——巨大な存在であることだけはおぼろげながら察せられるのだった。

高野山に潜入した八郎が敏感に感じ取った弘法大師空海にまさるともおとらない「気」を持つものがそれであった。

すなわち——織田上総守信長その人である。

いま、高野山を隣した紀州の地、そのどこか虚空にて、弘法大師空海の霊力と、織田上総守信長の気力とが——高野山の高僧たちの修法、成尋の修法、それぞれがあい争うにしたがって——激しいせめぎあいをくりひろげているのだった。

そしてどうやら、真言密教の高僧たちの必死の行もむなしく、織田信長の気力が弘法大師空海の霊力にまさりそうであった。

であれば——

もはや信長の復活をさまたげ得るものは、この世に何もないといっていい。

弘法大師空海の霊力をすらしのぐ大魔王、織田上総守信長の復活を、何が、いかにして、阻止せしめえようか。そも不可能ではないか。

……根来転寝は自分が何を感じとっているのかわからないままに、

「どうも、いやな天気だ。なにやら、いやな予感がする……」

そう空に向かってつぶやくのだった。

それを——外殻ごしに聞きながら、涙と現は仰向けに横たわり、ぼんやりと空を見ている。二人、自分たちの気持ちをようやく知って、呆然としたのだが、それがしだいに静かな、しかし深い歓びの念にとってかわられていった。

「その、スカーフのお姫様だけど」やがて、涙がポツリといった。「あんたに似てるね」

「そうかな、そうでもないけど」現がはにかんで、「人から聞いたんだけど、このお姫様はオフィーリアっていうんだって」

「オフィーリア？」

「そう、オフィーリア」

二

弦之介の声が聞こえる。——愛しい、懐かしい、そして憎い甲賀弦之介の声が。

「そこにおるか？　朧、剣をとっておるか、剣をとれ。わしはそなたを討たねばならぬ。そなたはわしを討たねばならぬ。討てるかもしれぬ。わしは今目が見えぬ……」

その声、その言葉はいまも彼女の心に深々と傷を負わせている。それを聞いたときの胸が張り裂けるような思いは、いまも生々しいまでに血の痛みを残している。あれほどまでに好きあったはずの二人が殺しあわなければならなかった。その血の宿命に泣いた……

それなのに——

いま、その同じ人が、同じ口から、

「目を覚ませ、響。おれは弦之介ではない。おまえも朧ではない」

などと卑怯未練なことをいう。

そのことが彼女の怒りに火を注ぐ。甲賀弦之介、もはや許すことはできぬ、と思う。かくも卑怯未練な男にうつつを抜かし、あたら貴重な部下たち、伊賀精鋭八人の命を散らしてしまったのか、という後悔の念が勃然とわいてくる。だが……

それでいて、憎いはずの弦之介への想いを断ち切れずにいるのはどうしたことなのか、断ち切るどころか、その想いはいやましにつのるばかりなのだ。

——憎い、愛しい、弦之介さま……

そう慟哭しながら、ふと彼女はめくるめく混乱を覚えた。これは何だろう？　なにか自分がたいへんなあやまりを犯しているように感じるのだ。とんでもない錯覚をしているように感じる。これは何か？　が、その混乱、迷いをむりやり振り払うように——

彼女は瞳術を起動させたのだった。

八郎は思う。

たぶん、これは成尋の「狂儡」と、孔雀啄の「時逆鉾」を連結させた忍法によるものなのだろう、と。——

成尋にあやつられ、孔雀によって自分が生まれる一年ほどまえの甲賀・伊賀忍法合戦の過去にまで意識を遡らされているのだ。さらには自分を朧と思い込み、八郎を弦之介と信じ込んでいる。しかも弦之介を何としてもしとめたい、という執念に凝りかたまってしまっているのだ。——これを如何せん！

「響と交わるのだ。そうする以外にこの殺しあいより逃れるすべはない。交われ。しかるべきのちにわれに和合水をもたらせ——なにゆえに愛しい女と交わるをためらうか。なぜに愛しい女と殺しあうを選ぶか」

成尋の嘲笑の声が響く。その毒々しい笑いが伽藍に響きわたる。その笑いに、

「痩せ我慢はおやめ、おやめ——」

これもまた成尋のそれに輪をかけて毒々しい孔雀啄、輪廻孫六の声が重なる。
——痩せ我慢というか。なぜに、と訊くのか。
八郎は胸のうちで咆吼する。
——それはおれがおれだからだ。響が響だからだ。
が、よしや、それをいったところで、この人間獣たちにそんな八郎や響の気持ちが理解できようはずがない。
響はその盾眼術を母親の朧から遺伝的に受けついでいる。似ているのは当然だが、そっくり同じということはありえない。
朧の瞳術は、敵がいかなる卓越した術を発揮しようと、それを無効ならしめる力を持っている。が、それはあくまでも相手が術を発した場合にのみかぎられる。相手が何もしなければ、朧の瞳術もまた機能しない。その意味では朧の瞳術は徹底して受け身のものであるといっていい。
が、それは朧の瞳術の場合であって——響の場合はそのかぎりではない。響の瞳術はより能動的なものといっていい。相手の殺意、悪意を敏感に察知し、相手の術を無効にするにとどまらず、それに相応に反応する。つまり、相応に傷つける。
響は、自分を朧と信じ込んでしまっている。が、その瞳術は、朧のものにあらず、響のものである……
その瞳術は、一方は徹底して受動的、もう一方はなにがなし能動的であって——その、

微妙でありながら、大きな差異は、おのずから響を混乱させずにはおかないだろう。
そして、その混乱は、成尋の「狂儡」、孔雀啄の「時逆鉾」にまでおよび、蟻の一穴、ついには彼らの策略全体を破綻に誘うのではないか。そんなふうに願うのはあまりに楽観的にすぎるだろうか。
いずれにせよ、
——響が自分を朧と思い、おれを弦之介と思い込んでいるというなら、それはいつの朧、弦之介であるのか。
それを探り当てるのが焦眉の急に思われた。
——いつだ、いつだ、いつなのだ……
甲賀・伊賀忍法合戦の「神話」は、子供のころから、くり返し聞かされ、いまや血肉と化している。その経過、その一部始終が、輝かしい光芒をおび、克明に記憶されることとなったのだ。
だから、
「斬ってくださいまし。弦之介さまの手にかかって死にとうございます……」
彼女がうわごとのようにつぶやくのを聞いて、
——そうか。
彼女がこれを吉田宿での弦之介と朧との対話の場と思っているのだということに気づいた。

とりわけ吉田宿の荒寺での甲賀弦之介と薬師寺天膳との死闘は鮮明に昔話の記憶に焼きつけられている。そのあとの朧と弦之介との対話もまたしかり、である。

あのときには——

ともに優れた瞳術を持ちながら、弦之介は目をふさがれ、朧もまた目をふさぎ、たがいにその瞳術を封じられていたはずなのだ……

そのことを思い出した。そして、

——そこにつけいる隙がある。

この一瞬の急場に、好きでならない少女との命のやりとりに動揺し、はては慟哭しながらも、そう思いついたのだから、本人が思っている以上に、やはり八郎は相当にふといといわざるをえない。

すかさず矛眼術を起動させた。

響の殺意を受けてのこと、だ。その響の殺意がそのまま彼女の自分への殺意と化して逆流する。ここまでくると、そもそも、その殺意が響のものであるか、それとも自分のものであるか、それすらさだかではない。ただ、かりそめにも、それがまやかしのものであってはならなかった。それは幾重にも研ぎすまされた真の殺意でなければならなかったのだ。心底からの殺意でなければならなかった。しかし——

——それがおれにできるだろうか？　心の底から響を殺したいなどと念じることができるか。

むろん、その懸念はあった。が、案じるまでもなかった。——できた。

八郎はありったけの殺意をこめて矛眼術を響に放ったのだ。そして、それに呼応するように響の盾眼術もまた——ほとんど自動的に——発動された。

しかし、ほんとうであれば、これはおかしい。なぜならば、もし響が朧であり、いまがあのときであれば、そもそも朧は盲目の身なのだから、瞳術を発揮するなど不可能なことであるはずなのだから。

同様に、あのときには弦之介も盲目の身であって、やはり瞳術を発動することはできなかった。そもそも、あくまでも受け身であるべきはずの朧の瞳術を、術を発することのできない相手に発動したからといって、何の意味もないことだろう。

それなのに、そうした矛盾をすべて黙殺し、無視するかのように、響は何のためらいもなしに瞳術を起動させた。

しかも、朧として、だ。

ここに、まさに矛盾が露呈された。

つまり響は、意識の表層にあっては、自分が朧であると信じているが、その深層においては自分が響であることを知っている、ということなのだろう。

響は混乱しているのだ。それもとてつもなく混乱している……

が、彼女は自分を盲目の朧だと信じ込んでいるし、しかも相手を盲目の弦之介だと思い込んでいる。弦之介が瞳術を発するはずがないのと同様に、自分もまた瞳術を発するはず

がないのだ。それに――

よしんば、自分が弦之介に反応して瞳術を発動させたところで、それは相手の術を無効ならしめるにすぎない、という固定観念がある。そのかぎりにおいて、自分の瞳術はきわめて無害なものだ、という安心感がどこかにあるにちがいない。

だから、盾眼術を制御しようなどという気持ちはさらさらなかった。それが発動されるままにまかせた、といっていい。ある意味、放恣に。――

実際のところ、響の盾眼術と、八郎の矛眼術が――さながら両の掌を打って一つの音を発するがごときに――相互に作用しあうとき、そこに何が生じるのか正確に指摘することは誰にもできない。あまりに精妙で、複雑にすぎるために、その経過をたどるのは人間には不可能なことなのだ。ただ――八郎には、その両者の間に往還する「殺意」を、最終的に自分の身に集中させて、それを起爆させる自信だけはあった。

「あ、いかん」

成尋の悲鳴にも似た叫びが聞こえてきた。

「やめさせい」

成尋が動転するのは当然だ。彼の目的は、あくまでも八郎と響を交わらせ、その和合水を採取することにある。よもや、八郎、もしくは響を殺し、その血をもってして和合水に代替させるとしても、それはあくまで次善の策にすぎない。むしろ八郎をいまここで殺してしまっては計画そのものが破綻をきたすことになりかねない……

「やめろ、やめろ、やめさせい――」

成尋の悲鳴がつづいた。あわてて八郎のもとに駆け寄ってきた。

が、すでに遅かった。

八郎は全身に凄まじい傷を負っていた。バッ、と血煙が起こり、そのおびただしい血をわが身に浴びながら、床に転がった。

「わあぁぁぁ――」

しかし、この悲鳴は八郎があげたのではない。成尋だ。動転のあまり、成尋は不用意に八郎に近づきすぎた。われ知らず、結界から飛び出してしまっていた。

そして、それこそが最初からの八郎の狙いだったのだ。肉を切らせて、骨を断つことが。――

「死ね、化け物――」

八郎は転がり、起き上がりざまに、成尋を胴薙ぎに斬っていた。存分に。

成尋は悲鳴をあげながら、血しぶきのなかに倒れ込んでいった――はずだった。

が、そうはならなかった。とっさに、「成尋様！」と悲鳴をあげて、孔雀啄が「時逆鉾」を発動させたからだ。刹那、時間が逆流し、成尋に身をかわす時間をもたらした。からくも致命傷をまぬがれさせた。

「弦之介――」

悲鳴をあげながら、走り寄ってきた彼女は、しかし彼を抱き起こしたときには、

「八郎、しっかりして――」すでに朧ではなしに響に戻っていた。泣いていた。「ああ、わたしは何てことをしたんだろう」
「嘆くな、響、これでいい。これこそがおれの望んだことなのだから――」
響の腕のなかで、八郎はその血だらけの顔を仰向かせ、
「久しぶり、響、大きくなったな……」
にっこり笑いかけた。
久しぶりも久しぶり――六年まえの十二歳のとき、二人は再会しているが、あれはあくまでも「桜花」、「有情」の異時空間を介してのことであり、実際にこうして顔をあわせるのは九歳のとき以来、じつに九年ぶりのことなのだ。
何ということだろう、九年ぶりに再会を果たしたこのときには、すでに八郎は傷を負っているのだった。しかも響の盾眼術によって――もっとも、成尋と同じく、孔雀の「時逆鉾」によって、八郎もまた、逃れる時間を与えられ、致命傷を負うのはまぬがれたのだが。
「八郎、八郎――」
響はむせび泣いた。
「成尋さまぁ、お上人さまぁああ――」
孔雀が、倒れている成尋にとりすがる。この妖気ただよわせる美少年がいまは身も世もあらず慟哭していた。

「おのれ、うぬらのような虫けらが――ようも、ようも成尋さまを――」
明らかに輪廻孫六は動転しきってわれを失っていた。こともあろうに響と八郎との狭間にその忍法「金剛楼閣」を発動させようとしたのだ。
「こうなればもはやうぬらを断じて一緒にはさせぬ。生き別れにさせてやる」
「金剛楼閣」によって二人を引き離そうとした。明らかに正気を逸していた。
「金剛楼閣」に無理やり引き剝がされそうになりながら、
「もう別れない、絶対に別れない――」
響は輪廻孫六に立ち向かおうとした。
そのとき伽藍天井から凄まじい音が聞こえてきた。響きわたった。
それが何の音だかわからずに響、輪廻孫六の二人は同時に頭上を振りあおいだ。

三

「おい、碁石才蔵、見てくれぬか、あいつらは何人いる」
根来転寝が「桜花」のなかから、そう尋ねると、一瞬、間を置いて、
「二十五人かな」
才蔵が陰気にそう応じる。
「二十五人は多すぎる……二十一人ならぎりぎり大丈夫だが――ほんとうにその数にまち

がいないか」
「ぎりぎり大丈夫ってどういうことだ」
「なに、『驟雨』が二十一人だったらおれ一人で引き受けるということさ。おれにまかせろ、ということだ」
「まかせろって――二十五人だろうが、二十一人だろうがさして変わりはあるまい。どうやって根来転寝ひとりで――」
と、これは蜩七弦が間のびした顔に困惑を滲ませてそう抗議するのに、
「いいから、やつらが二十一人になったら、おれにいえ。まかせろ。涙たちに『霖雨』を斃されて、『雨』のやつらは動揺しているはずだ。やつらを斃すは、いまをおいてほかにない。おまえたち、この機を逃さずに一気に『叢雲』に攻め込め。この機を逃して、あのまま江戸なり、京なりに行かせようものなら、きゃつらを勢いづかせることになる。そうなるまえにせめて『雨』なりを始末しておかねば面倒だからな」
「だから『驟雨』はおまえ一人で引き受けるというのか」と、才蔵が不審げにそういう。
「本気でいってるのか。相手はてごわそうだぜ」
「おまえの目がたしかであればな。まずは大丈夫だ。二十五人は多すぎるが――二十一人であれば何とかなる、あと一人でも増えればちょっと心もとないがな。ほんとうにあやつらは二十五人か才蔵よ」
「おれの目に狂いはない。――だけど、根来転寝……」

才蔵が何かいいかけるのを、心配ない、心配ない、と根来転寝は軽くいなして、
「八郎にもいったんだけどな。おれは勇ましいのは嫌いだ。『特攻』もしなけりゃ、『玉砕』もしない。その種の人間じゃないんでね。相手が二十一人だったら大丈夫だ。きちっと生還してやるさ。だから碁石才蔵よ、それをもう一度、たしかめてくれないか。いやさ、念のためによ」
「わかった――」
「それに七弦よ。おまえ、何とかして『叢雲』をとめることができぬか。あれが動きつづけていると何かと面倒だ。あれをとめたい。おまえの『松籟』をもってして――」
「やってみよう」
さすがに才蔵と七弦の動きは速い。根来転寝の言を聞くやいなや即座に行動を開始している。「桜花」から動いた。曇天の晦冥（かいめい）のなかにフッと姿を溶け込ませた。

……才蔵にしてみれば――
まさかそんなことになろうとは夢にも思わずに、「叢雲」に向かって、「目」を飛ばしたのだった。
「叢雲」と「桜花」とのあいだにおびただしい桜の花びらが舞う。それら一片、一片を慎重に選び取り、そのそれぞれに「目」を載せてやる。そして風に放す。
花びらが舞うままに、「目」の行方さらにさだまらず、まさに花まかせ、風まかせ。

——できるだけ、目標とするものを視るのに近いところに舞う花びらを選ぶようにはしたが、それにもおのずから限界がある。花びらが舞うにまかせ、「目」も気ままに舞わせるほかはない。

「叢雲」のまわり——無限軌道の左右、後ろ、大門に通じる石段のまえなど——を「驟雨」たちが護っている。才蔵がザッと数えたかぎり、その数二十五人。——

が、それ以外にも複数の「目」を放してやった。

その一つが、「叢雲」の一階・大門のまえに、ヒラ、ヒラ、と舞う。「目」が行方さだまらず漂流する。すると、そこに、鉄砲隊「雷雨」が集結しているのが見えた。「雷雨」と、それに——彼らに囲まれるようにして——夜叉至の姿が。

才蔵はこれまでに夜叉至に会ったことはない。しかし成尋衆のなかに怪物めいた美貌の女性がいるということは聞いている。彼女の名が夜叉至ということも。——

「……」

才蔵は息を呑んだ。

無理はない。「目」を中継し、夜叉至の、じつにこの世のものならざる、美麗としかいいようのない顔を——文字どおり——目のあたりにしたのだから。男たるもの、視線を引き寄せられずにはいられない。蜜を無視できる蜂などいない。マタタビを無視できるネコなどいない。

「目」は実体を持たない。いわば気配のようなものだ。いや、あまりにほのかにすぎて、気配というのすら当たらない。そんなものに気づく者などいようはずがない。それなのに——夜叉至はその例外のようなのだ。あきらかにそこに「目」があるのを知って、こちらを見ているのだ。

「目」に気づいている。それも難なく——

それというのも、あらかじめ夜叉至は蜩七弦から、「百目」の情報を得ているからこそ、のことであるのだが、もちろん才蔵はそんなことは知らない。ただ、自分の「百目」を見破られたことと、それを見破った夜叉至の凄まじいまでの美貌の両方に驚いている。

いや、それは驚きなどという生やさしい言葉で片づけられるものではない。ほとんど気死してしまったといっていい。

その長い睫毛に飾られた目が、かすかに笑いを含んで、こちらを視たのだ。茱萸のように真っ赤に塗れた唇が艶やかに開閉した。もちろん声は聞こえない。が、唇の動きから、宿命通、と囁かれたのが——わかりたくはなかったが——わかった。

「おまえは首を吊って死ね」

その声がはっきり聞こえてきた。

「……」

才蔵のなかで、カタン、と音をたてて、何かが外れたようだ。何か——そう、人生のつっかえ棒のようなものが。視なくてもいいものを視てしまった。つまり自分の運命を。

——

人の運命は、どんなにそれが幸せなものであろうと、それを一気に見せつけられれば、貧苦、病苦、別離苦、いずれ悲惨の連鎖にほかならない。瞬時に見せられて、それによく耐えうるほど剛毅な精神力を持った者は、ほとんどいない、たとえ忍者であろうとて、いや、忍者であればなおさらのことに。

なにしろ、

——死にたい……

その思いがいやましにつのるばかりなのだ。たぶん、この衝動にはだれも耐えられないのにちがいない。

もともと、この世のことになべて現実感を持つことができずに、引きこもりの日々を送っていた碁石才蔵だ。世をはかなんで、厭世観に屈するだけの下地は十分にあった、というべきかもしれない。

こうなっても、この、死にたい、という思いが、夜叉至の「宿命通」によって引き起こされたものだ、ということを理解するぐらいの判断力は残されている。が、才蔵にかぎって、それにしたがうのを屈辱に思う、などという人並みの感情の持ちあわせはない。もともと自分のなかにあった思いをあらためて掘り返されただけのことだ、と了解している。そのことを恨みに思う気持ちはない。

が、死にたい、と思いつめながら、心のどこか一点で、それをためらう気持ちが働いているのはどうしてだろう？　この情況をおとなしく受け入れれば、それでいいだけの話ではないか。おれは何をジタバタしているのか？　そう自問し、それは何としてもおれが夜叉至にやってやりたいことがあるからだ、とみずから納得する。

復讐？　いや、ちがう。復讐ぐらい、おれに似つかわしくない言葉はない。復讐じゃないとしたら、これは何だ？　イタズラ？　思いがけない言葉が頭に浮かんできて、さすがに才蔵はいささか動揺する。が、すぐにその言葉に納得する。そう、イタズラだ。おれは最期に夜叉至にイタズラをしかけてやりたいのだ。いわば最期っ屁のように。——

——それにはどうすればいいか。

死にたい、という強迫衝動にさいなまれながら、しかしその苦悶のなかで、碁石才蔵はクスクスと笑っていた。要するに、この若い忍者は変わり者なのだ。それもそうとうに変わり者といっていい。

と——

シューッ、シューッ、という金属音が高らかに空に鳴りわたった。ガラガラ、という重い鎖を引きずるような響きがそれにつづいた。あの大鎌だ！　あの大鎌を噴射するつもりなのにちがいない。

接近しつつある「桜花」を粉砕するつもりなのではないか。「叢雲」はそのために必要十分なだけの距離をとる必要があった。そういうことではないか。

——根来転寝！

「桜花」を振り返った。が、「叢雲」の意図に気づいているのかどうか、「桜花」はいまも

驀進をつづけている。

——七弦は何をしているのか。『叢雲』をとめるのではなかったのか。

が、大鎌が噴出する音を空に聞いたとき、すべてのことはもうどうでもよくなってしまった。なにもかも忘れた。

衝動的に立ちあがり、唸りをあげて飛んでくる大鎌に向かって走った。死にたい、という強迫観念が胸のなかで歓喜のおたけびをあげるのを感じた。実際に笑い声をあげていたかもしれない。

大鎌に向かって跳躍した。

バッ、と血煙があがり、それが驟雨のように地上に音をたてて降りそそいだ。

七弦は何をしているのか？　むろん、彼がすべきことをしていた。

最初は「叢雲」に「松籟」を仕掛けるつもりで動いたのだ。昆虫の大群を呼び寄せる。それをもってして「無限軌道」——という言葉を七弦が知っているわけではなかったが——を停止させるつもりでいた。事実、虫の大群が無限軌道に群れれば、その体液、油で、それが稼働不能になる可能性は大きい。七弦はそうするつもりでいた。

が、しなかった。できなかった。そうすることを忘れてしまった。

「叢雲」に向かって走ったとたん——

目のまえにあの白光がひらめいたのだ。あの母者を偲ばせる合掌観音がそのみ姿をお現しになられたのだ。強引に先に進もうと思えば、それをお怒りになられ、憤怒・六臂の阿修羅像にオン姿を変えられる。それに恐れ入り、後ろずさると、もとのお優しい合掌観音にお戻りになられる。その連続で身動きがままならなくなってしまった。

要するに、これは涅哩底王の「魔獣召喚」と、夜叉至の「宿命通」とを合した、いわば後催眠のような術で、いやおうなしに七弦を裏切りへと追い込んでいくものなのだが、すでに七弦はそうと気づくだけの自意識を失ってしまっている。

地に腹這いに伏して、ろくに身動きもできない状態になっていた。

ただ、その状態にあって、なかば朦朧とした意識にありながら、ほとんど無意識のうちに地面をクナイで掘っている。——忍者なればこそのことだろう。

なにか白い液体のようなものをすくい、それを薬籠のなかに入れている。熱心にそれにはげんでいる。

それをしながら、こんなものがいったいどこから来たんだろう、とそのことを疑問に思っている。それが何だか、およその見当はついている。だが、それがどこから来たのかがわからないのだ。わからないままに、熱心に採取をつづけている。

わからないのも当然だろう。それはあの曾肥坊が断末魔のときに腕の乳腺から放った乳液が固まったものなのだ。厳密にいえば、涙のそれとはかなり成分がちがうが、彼女のなみだの何十倍ものフェロモンを含んでいる。それを採取しながら、七弦自身がなかば陶然となっているほどだ。

そもそも七弦は曾肥坊のことなど何も知らないのだから、なおさらに彼の最期の言葉など知るよしもなかった。

が、曾肥坊のほうでは——あるいはあの皮膚坊は——七弦が何をしているのか知ったら、そのことに会心の笑みを浮かべたにちがいない。

——われらは成尋衆に負ける。されど勝つ……

これが曾肥坊の最期の言葉であり、皮膚坊が根来転寝に伝えた言葉でもあるのだから。

——

どちらにせよ——

いずれ蜩七弦は仲間を裏切らざるをえないだろう。涅哩底王、夜叉至の妖術にかけられた人間に自由意志などありえようがないからだ。あとは、いつ、誰を裏切ることになるのか、その選択があるのみだ。

四

「才蔵——」

現が叫び、

「七弦——」

涙が叫んだ。

二人は「桜花」から滑り落ちようとした。男たちを助けにいこうとした。が、「霖雨」と戦った消耗からまだ完全には——いや、ほとんど回復していなかった。全身に無数の傷を負ってもいる。

彼女たちの動きが鈍かったのも無理がない。敏捷さを欠き、力強さを欠いていた。モタモタしていた。ありていにいって、いまの彼女たちが救出に向かったところで、足手まといにしかならなかったろう。

と——

「桜花」の一部分が揚げ蓋のように開いたのだ。そのなかから二本の腕がのびてきて彼女たちの体を、あっというまに、なかに引きずり込んでしまった。揚げ蓋が、バタン、と音をたてて閉じた。

根来転寝のしたことだろう。好判断というほかはない。いまの彼女たちは戦力にならないからだ。なかから抗議めいた、あるいは悲鳴めいた声がひとしきり聞こえたが、「桜花」が速度を増し、「叢雲」に向かったとたん、その声はやんだ。さすがに彼女たちもいまの自分たちではものの役に立たないことを自覚せざるをえなかったのだろう。

そのときにはすでに甲羅式部、蓮の二人は「叢雲」に向かって走っている。蓮根銃は何といっても短銃だ。その射的距離において火縄銃に格段に劣る。いかに蓮が優れた射手だからといって、蓮根銃の射程内まで「雷雨」に近づかなければ、勝負にならない。

「雷雨」は戦場での常套（じょうとう）どおりの四人横隊の三段がまえである。

竜頭のみぞに挟み込んだ火縄には火がついている。ひきがねを引けば、ばねが火縄を火皿に打ちつけ、弾を発射する。

撃つのに要する過程はこれだけだが、そのまえに銃口から弾を込めなければならない、火薬を詰めなければならない……火縄銃を撃つのは意外に手間どる。そのために三段撃ちの陣容を取り、前後、順に入れ替わりながら、撃ちつづける。そうやって連続射撃を可能せしめる。

蓮根銃は輪胴に六発の弾を装填する。撃鉄を起こして撃つ。連続射撃の効率性からいえば、「雷雨」の三段がまえなど問題にならないが、それも射程範囲内にあればこその話だ。一瞬でも早く、射程距離内に達するためには、ただひたすら走るしかない。

「雷雨」のほうにしてみれば、逆に、蓮が蓮根銃の射程距離内に入るまえに、何としても仕留めたい。そのために雷撃のように三段撃ちを連続した。十二挺の火縄銃から発射される弾が蓮に集中した。

その連射にはほとんど切れ目がない。射手たちは見事な連繋をなし、まるで十二人が一人でもあるかのように、あるいは十二挺が一挺でもあるかのように滑らかに撃ちつづける。しかも彼らの狙いはきわめて正確なのだ。

甲羅式部が両腕をひろげ、弾よけになってくれなければ、さすがの蓮ものの五十メートルも走らぬうちに蜂の巣になっていたことだろう。いや、式部にしたところで、その容赦なく、正確きわまりない連射には、何度も跳ねとばされ、後ろざまに吹っ飛んだ。犀防

具に、カン、カン、と音をたてながら、弾が跳ね返り、火花が散った。

問題は、式部があまり敏捷ではないことだ。というか、遅い。筋肉が異常なまでに発達していて重いからだ。——さなきだに体が重いのに、そのうえ全身を鋼鉄の犀防具で覆われているのだから、これが常人であれば歩行すらままならないところだろう。

「式部、わたしを先に行かせて」蓮は焦っている。「あなたは遅すぎる」

「それはできぬ」

式部はがんとして譲ろうとしない。いざとなれば実力行使してでも蓮を自分の後ろに引き戻すだろう。いつもの蓮であれば、怒るところだろうが、さすがに式部が正しいことは認めざるをえない。この弾雨のなかを生身で走れば、あっ、というまに射殺されることになる。どうしたって盾は要るのだ。

蓮は、はやっている。早く射程距離内に入りたい。入らなければならない。

が——

亀のごときに遅い甲羅式部の背後に隠れなければならない以上、どんなに気持ちを焦らせたところで、その速度に制限をかけられるのは、やむをえないことなのだ。

甲羅式部、それに蓮の二人——

何十メートルか走るたびに、式部のほうが息が切れる。呼吸を整えるために、立ちどまらなければならない、両手をひろげ、後ろの蓮をかばい、仁王立ちになって立ちはだかる。もちろん、さらに弾が集中する。弾の跳ね返る音がうるさいほどに。火花の散るのが

まぶしいほどに。——

「……」

甲羅式部は苦しげだ。犀防具を着して走るというのが、そもそも肉体的に非常な苦痛を強いる行為なのだ。それに加えて何十発もの連続する着弾がある。その衝撃がまた激しい苦痛をもたらさずにおかない。

犀防具は防弾具としての用は足さない。着弾の衝撃をまるで吸収しないからだ。肌が裂け、血が噴き出る——というのみにとどまらず、筋肉、骨、はては内臓にまで打撃を与える。

いかに式部が金剛力士のような筋肉に恵まれていようと、長時間、着弾にさらされつづけるのは不可能だ。いずれは血反吐を吐いてぶっ倒れることになる。だから——蓮としてはそうなるまえに射程範囲内にたどり着かなければならない。何としても。——

それもどうにか、あと一息というところまで漕ぎつけた。いま、また、式部は蓮のまえに立ちはだかり、被弾を防いでいるが、これが一休止し、次に走れば、どうにか射程距離内に達することができるのではないか。そしたら「雷雨」と戦うことができる……

が——

ふいに、「雷雨」が後退したのだ。一斉に身をひるがえし、走り、「叢雲」大門の石段を登っていった。そのうえで、あらためて横四人、縦三列の膝打ち、三段がまえの陣容を取った。

——接近されるのを嫌ったのか。

一瞬、そうも思ったが、どうもそうでもないようだ。理屈にあわない。——蓮が、蓮根銃の射程範囲内に入るということは、彼らにしてみれば、それだけ自分たちの射撃の精度が高まることでもあるからだ。勇猛果敢な彼らがそれを嫌うとは思えない。

——それでは、どうして「雷雨」は石段のうえに引き返したのか？

が、その疑問は、たちどころに解消されることとなった。すぐにその理由がわかったからだ。

ガタン……という響きとともに「叢雲」の無限軌道が尺取り虫のように動いた。速度を増した。さすがに「桜花」の速さにはかなわないが、その巨体からは想像もできないほどの速さだ。「雷雨」は「叢雲」にとり残されないために、いったん撤退したというわけなのだろう。「驟雨」たちは「叢雲」にしたがって走っている。

「叢雲」は先を急いでいるのだろうか。この先は東高野街道だが、そこから先、江戸、京都、どちらに向かうのかはわからない。いや……

——そうじゃない。

それは、あの大鎌が噴射され、宙を薙ぎ、地を払うのに必要な距離を得るための加速であったのだ。

五

シャアーッ！

大鎌が空気を薙ぐ音が響きわたった。大気を灼熱に変えた。あたかも死神が人間という収穫を得るために、それを振るうかのように、下から上に巨大な死の弧をえがいて、大鎌が迫ってきた。その途上に「桜花」がある。

――ああ、もう避け切れない。

蓮は絶望に胸がふさがれるのを覚えた。「桜花」のなかにはいまだ、現、涙、それに根来転寝の三人が残っているというのに。――

そのとき――

「ごめん」

甲羅式部がふいにそういった。久しぶりに、この若者の言葉を聞いたように思う。

――え、なに？　なにがごめん？

つねに人並み外れて沈着冷静、めったにものに動じない蓮が、このときばかりは我しらず動揺を覚えた。

これまで、いつも式部を引っぱるのに慣れていて、式部のほうから何か行動を起こすことがあるなどと、ついぞ、その可能性すら考えたことがなかったからだ。

が、やにわに式部に体をひっさらわれ、蓮はさらに動揺することになる。いや、動揺する余裕もなかったというべきか。

「参る」

「って、どこへ？」

式部はもうそれに答えない。蓮を横抱きに抱いて、走った。どこへ？　迫りくる大鎌に向かって、だ！　犀防具の強化鋼なのだ。蓮を抱くぐらいは何でもないだろうが、走るのはきわめて困難なはずなのに。ましてや――

「あああぁ」

蓮は思わず声をあげていた。

式部が大鎌に向かって跳躍したのだ。

ガシャッ、という鋼の音が響いた。これだけの大重量の犀防具を装着して跳ぶのには、どれほどの負担を足の筋肉にかけなければならないか。筋肉は鍛えられても骨は鍛えられない。折れないかと心配した。

軽々と――というわけにはいかない。もたついた。それも非常にもたついた。しかし跳ぶには跳んだ。片手がかろうじて大鎌の下端に届いた。指だけの力で鎌の刃を挟み込んだ。手甲をつけている。切れる心配はない。それにしても――

もう一方の手で蓮を抱いたままなのだから、その握力はほとんど人間離れしている。いや、甲羅式部がほんとうに人間離れしたところを見せるのはこれからだ。何と、式部はそ

の体勢のまま、両足を振り子のように前後に揺らしはじめたのだ。もちろん大鎌も左右に揺れる——というか、ぶれる。大気の擦過音がヒューッと唸りをあげた。

ぶれながら、風を切り、唸りをあげて大鎌が向かうその先に、「桜花」が迫っている。ぶつかる！　そうなればまずまちがいなしに「桜花」は両断されてしまうことだろう。

「ああぁ！」

蓮が声をあげる。その余韻がまだ耳に残っているうちに、ぐい、と体を引きあげられた。気がついたときには大鎌のうえにいた。式部が大鎌の刃に両腕で抱きつき、その背中に蓮が抱きつくかっこうだ。もちろん、式部が犀防具を装着していればこそ、できたことだ。そうでなければ全身を縦に真っ二つに裂かれていたにちがいない。

シュッ、と大鎌がするどい音を発する。左右にぶれていたのが幸いした。きわどく「桜花」の横をすり抜けた。指先ほどにも触れなかった。

大鎌が旋回の端までいって、また戻りはじめた。もうそのときには「桜花」はさらにその先へと進んでいる。もう切断される心配はない。通過した。

風切り音が、ヒューッ、ヒューッ、と足下に鳴り響いた。眼下の光景が流れた。紀ノ川が光った。

「これはいい。羽化登仙の心地がする——」

と甲羅式部が彼らしくもない感想を述べたあと、

「おれと夫婦（めおと）になってはくれぬか」

いきなり切り出した。そして、片腕だけで大鎌につかまり、もう一方の手を肩越しに後ろに突きだした。その指に一発の弾丸が挟まれていた。

「これはおまえがおれに撃った弾だ。修行のときにな。お守りがわりに、一発だけ、いつも肌身はなさずに持ち歩いていた。おれの宝物さ。もし、色よい返事をもらえるのなら、こいつを受け取ってもらいたい」

時もとき、所もところだ。どう返事をしていいのかわからない。何をいわれたのかもよくわからない。とりあえず、

「馬鹿やろ」

とのみ答えておいた。弾は受け取らなかった。

「ありがたい。いい返事をもらった——」

式部は悦に入っている。やっぱり、こいつは馬鹿か……

が、すぐにそれどころではなくなった。大鎌が振れて、向かう先に「雷雨」がいた。

「雷雨」、それに夜叉至が。——

夜叉至が笑った。その口が開閉した。悪魔のように艶やかに。むろん、この距離だ。声は届かない。が、その口の動きから、何をいったのかはわかった。夜叉至はこういったのだ。

——顔を狙え、

と。

「おう」
「雷雨」の声がどよもした。
——どうして式部の弱点を知っているのか？
一瞬、蓮はそのことを疑問に思ったが、いまはそれどころではない。
さすがに夜叉至の指示は的確だ。——ただ漫然と甲羅式部を狙うだけでは弾を無駄にするばかりだ、ということに気がついたのだろう。
すでに「雷雨」は三段がまえの体制に入っていた。銃火がひらめいた。銃声がつづけざまに炸裂した。あいかわらず彼らの狙いは正確そのものだ。旋回している大鎌に集弾させるだけでも並みの射手には不可能なことだろうに——その弾はまさに式部の顔に集中したのだ。
「おおう、おおう……」
弾が当たるたびに、ガクッ、ガクッ、と式部の頭部がのけぞった。カン、カン、という金属音、その火花が、実際に痛さをおぼえるまでに蓮の感覚に突き刺さってきた。正視に耐えられない。聞くにも耐えられない。
むろん式部は顔に鋼鉄製の面頬を填めている。もともと、この犀防具そのものが式部の筋肉を増強させるためというより、彼の異常発達した筋肉が裂けて、爆ぜてしまわないように抑え込む、という意味あいのほうが強かった。だから顔への補強は、面頬のみにかぎられた。それだけ素肌がさらされている部分が多い。いずれは弾がそこに突き刺さることになるだろう。
——このままではやられてしまう。
どうしよう。どうすればいいか。
と——
それまで、重い雲に閉ざされてほとんど届いていなかった陽光が、このとき、わずかにその雲が切れ、隙間から一筋、ほんの一筋だけ地に射し込んだのだった。
その光が目のまえであざやかにひらめいた。それも赤、緑、黄、青……などスペクトルに分光され、何重にも襞をなし、極光のように輝いたのだ。しかも、その光が不断に色を変える。ひらひらと白い雲のようなものが目のまえにたなびいた。そして——
「え……」
その雲のようなものから火矢が地上に放たれたのだった。鏃に何かが装着されているのが見えた。矢風が唸る。赤い軌跡をあとに曳きながら火矢は地上に向かった。「雷雨」に。——地上に達したとたん、爆破音が炸裂し、火柱が黒煙をつんざくように噴きあがった。
さすがに「雷雨」はむざむざ爆風に巻き込まれはしない。瞬時に身をひるがえし、爆発を避けた。何発か撃ち、反撃もした。が、三段がまえの体制はもろくも崩れ去ることとなった。もう甲羅式部が顔部を撃たれるままになることはない。
そのときには蓮は自分が何を見ているのか理解に達した。あまりの歓喜に身が震えた。

これは——忍法「羽衣」だ。
「滑婆、滑婆——」
蓮は叫んだ。
が、その声が滑婆のもとに届いたかどうかはわからない。滑婆のあの澄んだ笑い声を聞いたようにも思うが、それも確信はない。
「羽衣」は何重にも重ねられているし、その一枚一枚が非常に大きい。そのときにはすでに、ふわふわと空を覆うように広々たなびきながら、「羽衣」は大鎌から離れている。そのまま斜めに夢のように上昇していった。その先にあるのは——
「叢雲」の最上層——暗褐色の雲を映して、どんよりうち沈む、ギヤマンの大窓なのだった。
「蓮——」
式部の声に、ハッ、とわれに返り、地上に視線を戻した。
地上では、夜叉至が銃床を肩に当て、膝打ちのかまえをとり、大鎌にぴたりと狙いをつけている。もう笑ってはいない。さすがに炸薬を装塡した火矢を射かけられ、霧散した「雷雨」のふがいなさに憤怒を抱かざるをえなかったのであろう。——その不動のかまえを見ただけで、夜叉至に、かなりの射撃の心得があることが見てとれる。侮れない。
「式部——」
気をつけろ、と叫ぼうとしたときには、すでに遅かった。夜叉至は発砲していた。

だあん、という銃声にほぼ重なるようにして、式部の絶叫が空をつんざいた。その顔から面頬が飛び散るのが見えた。式部は反射的に両手で顔を覆ってしまう。顔の筋肉が膨張したのか。そして——
蓮もろともに大鎌から落ちてしまう。が、さすがに甲羅式部だ。こんなときにも自分が下敷きになり、蓮を落下の衝撃から防いでくれるのを忘れない。
「雷雨」たちのど真ん中に落ちた。石段を上がったところ、まさに大門の真正面だ。落ちるやいなや、蓮はばねのように跳ね起きた。走った。そのときにはすでに二挺の蓮根銃から五発を撃っていた。五人の「雷雨」が後ろざまに地にたたきつけられる。敵も撃ってくる。それをくるりと宙返りし、かわして、さらに三発、三人をしとめる。残りは四人——しかし、彼らの速射した弾がことごとく蓮の胴に食い込んだ。
「はふっ」
着弾の衝撃に跳ねとばされながら、身を黒豹のように鮮やかにおどらせ、残り四発、全弾を撃ちつくした。四人の男たちが血しぶきをあげながら地に沈んだ。
六連発・蓮根銃二挺、十二発を撃ちつくし、一発も外さずに、「雷雨」十二人をことごとく斃した……
しかし——
ドッ、と音をたてて、地に墜ちた蓮は、もう身動きがならなかった。自分の体から大量に血が流れ出て、急速に全身が冷たくなっていくのがわかった。

「甲羅式部……」
しかし式部は両手を顔に当て、突っ伏したまま、苦しげにうめいている。これでは蓮を助けるどころか、立ち上がるのさえままならないだろう。
夜叉至がゆっくり近づいてくるのが見えた。
その顔はあいかわらず美しいが、それと同時に悪魔のように恐ろしくもあった……

六

伽藍天井から凄まじい音が降り落ちてきた。それが何の音だかわからず、振り仰いだ響、輪廻孫六の目に、ステンドグラスが粉々に砕け散り、その破片が豪雨のようになだれ落ちてくるのと――
ほぼ透きとおった、薄い、大きな布が、幾重にも重なり、襞をなすようにサラサラとなびき落ちてくるのが映った。
なにを感じとったのか、刹那、輪廻孫六が一刀を鞘走らせたのはさすがだ。
が、憤怒のあまり、響と八郎を生き別れさすことに、あたら超絶の「金剛楼閣」を浪費させていたのが一つ、いかなる剣法であろうと真上からの襲撃など想定されていないのがもう一つ――
この二つが、さしもの輪廻孫六をも滅びに追いやることになった。

「ぐはあぁ」
肩から胸に、灼熱の痛覚が走り、輪廻孫六は耳をつんざくような悲鳴をあげ、その場にのけぞった。その肩に一本の刀身が、じつに柄を残すのみ、深々と刺さっていた。忍法「金剛楼閣」もあらばこそ、ピュッ、と血しぶきを虹のように噴きあげ、そのまま仰向けざまに沈んでいった。
「覚えたか」
その後ろに立つのは滑婆――凄絶なまでに美しい女忍の姿だった。
「あ、滑婆――」
響が喜びの声をあげるのと、
「お、おのれ、よくも成尋衆の輪廻孫六ともあろう者を――」
孔雀啄が悲痛、憤怒きわまりない声をあげるのとが、ほとんど同時であった。
「滑婆、八郎を助けて――」響がすがるようにいう。「八郎が死んじゃう」
「なに――」
床に伏している八郎を覗き込もうとするその滑婆に、一条、二条、光が走った。
危うく、それをかわした滑婆の後ろの壁に、カッ、カッ、と音をたててマキビシが刺さった。
「雌狐、死ぬのは八郎だけではない」
孔雀啄が、この美少年にして、この凶相ありや、と目をそむけたくなるような、凄まじ

い形相でわめいた。
「うぬもいますぐに殺してくれようほどに――」
「ま、待てい、孔雀啄、いまはそれどころではない」
それを制止したのは――まだ生きていたのか！　――護摩壇に身を支えながら、かろうじて立ちあがった成尋であった。全身、血にまみれて真っ赤だ。
「おとめあるな、成尋様――」
孔雀啄がなおも激してそう叫ぶのに、
「ええい、わからぬやつだ。あれが聞こえぬか、これが見えぬか」
成尋は自分の背後を指さして、
「は？」
さすがに孔雀啄は成尋のあまりの動揺ぶりに不審を抱いたようだ。けげんそうに顔をあげて、成尋の指さす先に目をやった。
ふいに護摩炉に燃える火が、轟っ、とじつに伽藍天井にまで噴きあがった。ものみなすべて、あかあかと染まった。
噴きあがり、すぐに鎮まったが、そのあともピリピリと大気が帯電しているようなふしぎな緊張感が残った。目には見えない、しかしそれでもたしかに、何かがある。その何かがどこかで鳴動している、それがありありと肌に感じられた。正体の知れぬ、しかし絶対にある、緊張感が急速に高まっていった。そして、そのきわまる果てに――誰かが、いや、何物かがするどく怪鳥のような声を放ったかに幻聴されたのだった。それが消えたあと――
そこに一個の人影がたたずんでいた。蒼々と――
長身、白皙、その眼光するどく、周囲をうち払い、見るからに常人ではない。凛然、その気迫、ほかを圧し、ただそこにたたずんでいるだけで、対する者ことごとく、その場にひれ伏させずにおかないような、凄まじいまでの迫力をみなぎらせている。
白い寝着のようなものを着ている。わずかに血で汚れていた。手に抜き身の一刀を携えていた。
「お、織田上総守信長様――」
孔雀啄が悲鳴のような声を放った。
「し、しかし、どうして……八郎、響の和合水もないというのに――」
「わ、わしの血じゃ。わしの血をオン被りになられたのじゃ。わしの血にそれほどの験があったというか。いや、わしの血であれば――さもありなん」
成尋は狂気したように叫んで、まろぶように信長のまえに進み出て、その場に平蜘蛛のごときに平伏した。
「上総守様、オン復活、ご再誕、まことに、まことに祝着に存じます。かくなるうえは、世にお出になり、存分にお働き、お暴れのほどを――おお、そうじゃ、軍資金にはことかきませぬゆえ、どうかご安心あれ。この鳳輦車に、金、銀、財宝を大量に蔵しております

れば――」
「ぜにがふんだんにあると申すか」
「は」
「左様か、それは心強い」
低い、力強い、それでいて、どこか氷のように冷たいものを秘めた声であった。
「そちは何と申す？」
「は、成尋――と申します」
「成尋」
「は」
「そちの血をたっての所望じゃ」
ぶん、と音をたてて振りおろされた刀がしたたかに成尋の首に食い込んだ。もしかしたら頸骨をも断ち切ったかもしれない。そのまま成尋はおのれが流した血の海に前のめりに沈んで、今度こそ完全に果てた。
「か、上総守様――」
孔雀啄は反射的にまえに歩を進め、あまりの理不尽、物凄さに、その場にぴたりとひれ伏してしまった。この不遜、剛毅な美少年が、成尋など比較にもならぬ大魔王を目のあたりにし、ほとんど理性を蒸発させて、ただもう忠実な飼い犬のように、ひたすら恭順の意を表している。

信長は何の感情もたたえぬ冷然とした目を向けて、「そちの名は何と申す」と訊いた。
さっきのいまである。さすがに孔雀啄の声は震えて、
「く、孔雀啄でございます」
「左様か、孔雀とやら。そこにおる者たち、目ざわりじゃ、成敗いたせ」
一瞬、間があり、
「うけたまわりました。いますぐ、いますぐに片づけますれば――しばしのご辛抱のほどを」
感きわまったようにそう応じて、跳びあがるがごときに立ちあがると、こちらに向きなおり、
「聞いたか。殿はこのように仰せである。殿がこのようにめでたく、ご再誕あいなられたからには、もううぬらに用はない。女忍二人、ここで仲よくあい果てるがよい」
孔雀啄は彼女たちに向かって、足を踏み出したが、ふとその視線を宙にとどめ、
「『叢雲』がとまった――」そう不審げにつぶやいた。「とまっては困るのだが」
そのときには、滑婆、響の二人、孔雀啄を迎え討つために、背をかがめ、ぱっ、と左右に散っている。
が、その二人のあいだから弱々しい声が洩れ聞こえてきた。
「そいつとおれとはいささかの因縁がある――おれに試合わせろ」
甲賀八郎の声だった。

七

いままでは小雨だった。

花を散らすというよりは、花を愛でるという風情だった。散り残った山桜に、そぼ降る雨がよく似あった。

が、にわかに雨脚が強まった。親指ほどの太さのある雨粒に変わった。空に黒い雲が奔り来た。

たちまち雨は、沛然と音をたてて降りしきった。桜は雨にうたれて散り急いだ。雨にうたれ、風に損なわれ、血に汚される。それでも散り急ぐ桜のこの美しさはどうしたことだろう。花は雨に散って、しかし誇らしげに短い春を歌い、燦然と輝いた。

すでに豪雨と呼ぶにふさわしい。風が咆吼する。稲妻さえもが光る。

その光のなかを、夜叉至が——

銃創を負った蓮、顔を押さえて動きもならずただ呻いている甲羅式部のもとに、妖々と近づいてくる。

艶やかに笑っている。——その目は黒曜石のように美しいが、氷のように冷たい。その白い歯は、真珠のように美しいが、牙のように残忍だ。

「ご無事であらせられるか」

石段を抜刀隊「驟雨」の男たちが登ってきた。

男たちは四人——その後ろの二人が、なにやらグッタリうなだれ、両足を引きずっている男を、両側から支えている。左腕が肩から切断されていた。血が流れ落ちていた。すでに死んでいるのではないか。その男に息をしている気配はない。

「それは何者か」

夜叉至が訊いた。

「はあ、すぐそこに倒れておりました。ここまで這ってきたようです。おそらくは甲賀の忍者ではなかろうかと——ご覧のようにすでに息絶えておりまするが……」

「それはちがう」

男が弱々しい声でいう。生きているのか。ゆっくり顔をあげた。

「ああ、おまえは碁石才蔵ではないか。はて、解せぬこと。おまえはまだ生きているのかや」

「おかげさまで、というのもおかしいが……おれはまだ生きている。まだな」

「……」

「それにしても——どうしておまえはおれの『百目』を知っていたのか。そのことがなければこうもやすやすと、おまえの術にかからなかったものを……とはいっても夜叉至、おまえの『宿命通』は恐ろしい。おれは生きる気力を失った。おまえに命ぜられるままに首を吊りとうなった。首を吊りたくて、吊りたくて、どうしようもない」

「なら、さっさとそうなさいませ。なにを手間どっておいでか。急ぎ、死に候え」
「ところが、おれはうまれついてのひねくれ者でな。こうなれば死ぬのはいたしかたないが、おまえのいいなりに首を吊るのだけはご免こうむる。なにぶんにも業腹でな。さればによって、あの大鎌で左腕を切ったのさ。片腕では首は吊れないからな」
「それはまた物好きな――首を吊らずとも、いずれ、おまえは死なずにはいられないものを――」
夜叉至が才蔵の顔を覗き込み、けげんそうに首を傾げて、
「はて、おまえは何のつもりで、ここまでやってきたのじゃ？　どこで死ぬるも同じであろうに――」
「なに、得べくんば、おれに『宿命通』をかけ、生きる望みを失わせた女の顔を間近で見たかっただけのことさ」
「見て、どうであった？　目の保養になったかや」
「美しい。たしかに美しいが――毒蛇の美しさだ。毒蛇にもきれいなのはいる。毒蛇を見たからといって、なんで目の保養になどなろうものかよ」
才蔵はそこで、ケ、ケ、と妙な笑い方をした。そして、これは何のつもりか、その右手をくねらせるように動かした。そして、また笑う。ガクリと首を落とした。そのあともすこし笑ったようだ。死んだ……
「こやつ、おかしなやつ――」

夜叉至は薄気味が悪そうに首を傾げて、
「このような嫌がらせをいうために、わざわざここまで這ってきたのかや」
が、すぐに気を取り直したように、背をのばすと、冷酷にいい放った。
「ここに、もうあと二人――伊賀の女忍と、甲賀の忍者がいる。二人とも死にかけではあるが、まだ完全に死んではおらぬ。誰でもよい、とどめを刺しや」
「は」
男たちはまずは甲羅式部に近づいていった。――式部の苦しむさまを見て恐るるに足りぬとあなどったのだろう。
たしかに、式部は面頬を割られた、あまりの苦しみに動けずにいるようだ。彼は異常筋肉の持ち主で、つねに全身を外側から抑えつけていないと、外側に向けての膨圧のために、文字どおり体が外側に爆発してしまう。それは顔とて例外ではない。
「顔が内側から爆ぜるとか――ホントかや」
夜叉至もそのことに興味がある。だから自分も式部に近づいていったのだ。そして、両膝立ての姿勢で腰を落とし、式部の顔を横から覗き込んだ。
「まだ顔は内側から破裂せぬかや」
「もうすぐだ……」式部が蚊の鳴くような声で囁いて、「もうすぐ破裂する」
「急げ。おまえの相棒の女忍も、これ、このように、すぐにも息を引き取りそうゆえに、のう――この世に未練を残さぬことじゃ。悪いことはいわぬ。早々に死に候え」

「未練はないが――恨みがある」
ふいに甲羅式部の体が猛然と跳ねあがった。「驟雨」の男たちに襲いかかっていった。
「おうよ、ごぎんなれ」男たちはとっさに刀を抜き払ったが、式部の犀防具に刃物が徹るはずがない。ただ火花が散っただけだ。
「くらえ」
式部の両腕が範囲十五センチほどの空間に唸りをあげて回転した。瞬時のうちに、四人の男たちはことごとく頭蓋をたたき割られている。脳漿と血を猛烈に噴きあげた。
「ど、どうして――」
夜叉至はとっさに飛びすさる。悩乱したように叫んだ。
甲羅式部は、面頬を外されれば、顔が破裂せんばかりの激痛に悶絶する、とそう聞いた。そうなれば戦うどころではない、と――それなのにどうして？
「どうして死なないのか、と聞くのか。それはこのせいよ」
式部がこちらを向いた。
その顔を見て夜叉至はわが目を疑った。その顔に何者とも知れぬものの右手が張りついていたのだ。何者ともしれぬ――いや、それは守宮坊が死ぬまぎわに捨てた右手ではないだろうか。守宮のように吸盤がついている右手。それを式部は拾った、それは面頬と同じように、いや、それ以上に、式部の顔の筋肉を押さえつけているのだった。
ここでも、

――われらは成尋衆に負ける、されど勝つ……
という忍法僧たちの予言がいみじくも的中したことになる。
もっとも、甲羅式部は、守宮坊がかくなることを予想して、おのが右手を投げたのだ、などということは夢にも知らずにいる。
あくまでも偶然に拾っただけのことと考えて、それ以上のことは、深く考えない。そもそも右手が、しかも指先に吸盤のついたこんな代物が、そうそう都合良く落ちていようはずもないのだが――そのことも考えない。
「忍法『宿命通』――」
何が起こっているのかわからないままに夜叉至は忍法を発動させた。ほかにこの窮地をしのぐすべはないからだ。
「宿命通」が発動される寸前――チラリ、となにやら不安な思いが胸をよぎるのを感じた。それが何なのか自分でもわからない。いまだかつて、こんなことは一度もなかったことであるのだが。――
「……」
右手の下の式部の顔が歪んだ。その目が血光に濁った。名状しがたい悲哀の表情がその顔をよぎるのがわかった。
――かかった。
甲羅式部はこの須臾のうちにおのれの全生涯を見たのだ。そして、そのことに絶望し、

深い失意の底に落ち込んだ。誰もがそうなるように――そのことに例外はない。

――我が「宿命通」の軛からは何人たりとも逃れることはできぬ。

夜叉至は胸中に凱歌の声をあげた。

が――

悲哀の念にいろどられながらも、式部の表情に、ニッ、と笑いが刻まれたのはどうしてなのか。いかなれば、人は深い絶望のなかにありながら、そのように会心の笑みを浮かべることができるのか。

「なるほど、これが『宿命通』か。いや、さすがだ。聞きしにまさる。これはたまらぬ。これは辛抱ならぬ――さすれば、おれも死ぬることにいたそうか。だが、おれはおのが宿命を拒否しよう。顔を内側から破裂させはせぬ。おれはその逆に押しつぶされて死ぬことにする。よく見ておけ。これが――」

式部がふいに横に転がった。そうするまえに何かを石のうえに転がしたように見えたが、はたして何であったのか、夜叉至にはそれを見とどける余裕はなかった。それどころではなかった。式部は転がり、そのまま石の台座から下に落ちていったのだ。そこには無限軌道がある。

「おれの死に方だ！」

が、悲鳴をあげたのは夜叉至のほうだった。これが悲鳴をあげずにいられようか。式部はわれとわが身を無限軌道のなかに投じたのだ。血煙が濛々と巻き上がった。金属

音が空をつんざくように響きわたった。

甲羅式部は全身に犀防具を装着している。その鋼の硬さは無限軌道そのものを破壊するに十分だった。履帯がちぎれて鞭のように宙におどった。猛烈に血が噴きあがった。「叢雲」の前進がとまった。

凄まじい轟音が天地にとどろいた。夜叉至の恐怖に見ひらかれた目に「叢雲」の上層部分が崩れかかってくるのが映った。彫像たちが宙に舞って崩落した。

「ちっ」

夜叉至も忍者だ。すばやく身をひるがえし逃げようとした。が、こめかみに当てられた銃口がその動きを制した。

蓮だ。――蓮が蓮根銃を夜叉至のこめかみにぴたりと押し当てているのだ。蓮の顔は血に真っ赤に染まっていた。

「どうしてとどめをささなかった？」蓮が低い声でいった。「わたしをみくびったか」

「いかにもみくびった――いまも見くびっておる」

夜叉至が笑う。ここにも、また一人、「宿命通」の餌食に供すべき者がいる。おもむろに蓮を見やろうとして――その顔の動きがとまった。その刹那に――夜叉至は自分の全人生を見たのだ。そのあまりの恐ろしさに歯がガチガチと鳴った。

――ど、どうして、いつ？　わたしが「宿命通」にかけられたのか。いったい誰にかけられたというのか。

その心に粟立つ恐ろしさのなかで懸命に自分に問うた。――この世に「宿命通」をかけることのできる人間はわたししかいないはずなのに、いったい、そのわたしにどこの誰が「宿命通」をかけたというのか。

もちろん、いうまでもないことだ。夜叉至に「宿命通」をかけることのできる人間は夜叉至を置いてほかにはいない。

これこそが碁石才蔵のイタズラなのだった。最期の最期に、彼は「目」を夜叉至の目に張りつけたのだ。だから、ケ、ケ、と妙な笑い方をしたのだった。そのために夜叉至は甲羅式部に「宿命通」をかけるのと同時に、みずからにもそれをかけてしまったのだ。

たしかに夜叉至の「宿命通」は無敵だ。しかし、何たる皮肉なことか。あまりに無敵でありすぎるがゆえに、甲羅式部にかけた「宿命通」は「叢雲」の無限軌道を破壊し、碁石才蔵にかけた「宿命通」はおのれをまでも自殺衝動にさいなむ結果におとしいれることになってしまったのだ。

「お、おまえは十二発撃った。もう弾は残ってはいないはず……」

それでも震える声で夜叉至はかろうじてそれだけをいった。生きようとする気力が急速に自分から失われつつあるのを、残酷なまでにはっきりと感じていた。

「ところが式部がさっき一発をわたしによこした。それは装塡した」

蓮が澄んだ笑い声をあげた。

「わたしの命はつきようとしている。されば六回は引き金を引けないかもしれない。それだけの力が残っていないかもしれない。だから、歌え、夜叉至――うぬの宿命を見るがいい。わたしはいますぐにこの引き金を引く。弾は一発――おまえの運がよければ弾が飛び出すまえにわたしの命がつきるだろう」

夜叉至がいわれるままに歌い出したのは、どういう心境からか、自分でもよくわからない。「宿命通」がさらに進行し、ついには自死する心境にいたったのか。

「――この世はなべて骰の目まかせ、

ゴザにころころ廻りきて、

さいの目六つ、

賽の河原の水車――」

夜叉至の声がかすれた。た、助けて、と叫んだ。いや、助けないで、とも叫んだ。自分で自分の気持ちがわからない。ただもう混乱しきっていた。

「うぬの宿命を占ったか。そうだ。おまえにはもう転がす骰子はない。弾は一発目に装塡されている――」

蓮が笑う。

「お願い、助けて」

「なぜによ」

「いえ、ああ――助けないで」

「そうしよう」

蓮は夜叉至のこめかみを射貫いた。そこで力が尽きた。自分も夜叉至の死体のうえに顔を伏せた。そして、そこにはいない彼に、ソッと囁きかけた。

「甲羅式部――おまえの弾はたしかに受け取ったよ……」

これまで誰もこんなに優しい蓮の声は聞いたことがない。――そのうえに「叢雲」の円塔がどうと落ちかかってきた。

骰を転がせ、転がして、
夢を見よ、見よ、
その果てに、
いずれは朽ちるこの身ゆえ。

桜花、余すところ、あと七花――

八

どうして「叢雲」の無限軌道部分が破壊されたのか、その事情はよく根来転寝の知るところではない。

が、「叢雲」がとまり、その残骸が履帯のまわりに堆く積み重なっているのを見て、しめた、と小おどりした。

残骸は、場所によっては、一階の屋根よりもさらに高いところに積みあがっている。何たる僥倖か、と思う。根来転寝が、彼のいう「一世一代の大忍法」を実行させるには、これほど願ってもない状況はない。

「涙、現――どこかにつかまってろ、あれに乗り上げるぞ」

根来転寝は「桜花」の舵を一気にそちらのほうに転じた。残骸のやまに乗りあげた。凄まじいまでの衝撃が返ってきた。それでもかまわずに強引に「桜花」を先に進めた。

なにやらガリガリというような音が下から聞こえてきたかと思うと――「桜花」は斜めになった。前部があがり、逆に後部が下がった。と同時に、ガクン、と右一方に傾いた。車輪が壊れたのにちがいない。ということは――もうこれで「桜花」は動けない、ということか。停止した。

しばらく根来転寝は動くことができずにいた。疲労が一気に襲いかかってきた。なにか鉛でも飲んだように体が重かった。が、まだ休むわけにはいかない。そのことは十分にわかっていた。まだ、だ。

「現、涙――おまえたちはどこかに隠れて休んでてくれ。おれはちょっと行ってくる」

そういったが、反応がないので、後ろを見ると――もう彼女たちの姿はそこにはなかった。どうやら「桜花」がとまるのと同時に飛び出していったらしい。

――仕方ないか。

苦笑するほかはなかった。
自分も外に出て「一世一代の大忍法」のための準備にとりかかった。
それにあまりに熱中しすぎたために、つい「驟雨」たちが近づいているのに気づかなかった。不覚にも、といおうか。いや、これもまた予定のうちだ。
碁石才蔵は「驟雨」は二十五人いる、といった。遠目にではあるが、そのうちの四人が戦列を外れたのをたしかに見た。ということは残りは二十一人——
——二十一人なら何とかなる……
根来転寝はこの男にはめずらしい凄絶ともいうべき笑いを顔に刻んだ。血笑、というべきか。——

「うぬは正気か」
「驟雨」の先頭にたっていた男がそう訊いたのは、これだけの人数を相手に、たった一人で飄々と車を進めてくる根来転寝の姿が、さすがに信じられなかったからだろう。
「正気とはいえぬな。おれはすこし、もの狂いした。だから、このまま退散したほうが身のためだぜ。命あってのものだねだからな、いや、ホントの話、手負いの狼ほど手に負えぬものはない」
「おお、怖——」
と嘲笑したのは断髪にした若い女だ。小長刀を肩に負っている。その肩から脇にかけて目も覚めるようなあざやかな「桔梗」の花が刺繍されていた。見るからに精悍そうな、美しい娘で、どこか蓮に似ている。
「だけど——さすがに手負いの狼は言い過ぎではないか。とてものことにそうは見えぬ。まずは——」
「手負いの痩せ犬——」
誰かがそういい、嘲笑がひろがった。
「うまいことをいう。たしかに狼には見えないかもしれぬが——」
根来転寝は動じない。顔を雨にさらしながら、むしろ明るい声でいう。
「それでもおれはやはり狼なのさ。しかも、この狼は二十本の牙を持つ」
その言葉に「驟雨」たちがしんと静まりかえった。根来転寝の声にただならぬ迫力を感じたからにちがいない。
「おれの遠い縁戚に地虫十兵衛という忍者がいてな。胃のなかに短槍を呑み込んでおった。それを噴き出させて敵をしとめる。ただ、それを一本しか呑み込めぬために、斃せる敵も一人にかぎられる。これはマズいとおれは考えたよ。何とか人にそうと覚られずにたくさんの刀を持ち運ぶことはできぬものか、とそう考えた——」
「驟雨」たちの視線が一斉に阿修羅に注がれた。阿修羅はそれを受けて黒く光った。——じりじりと彼らは後ずさり、左右にひろがりながら、根来転寝の包囲にとりかかる。
雨、風、それに地にしみる血、その死臭——殺気。

「そうだ。おれはこれを『阿修羅』と呼んでいるんだが、お察しのとおり、この骨組みはすべて刀であってね。二十本ある。それにおれが腰にさしているこれを加えて、ぜんぶで二十一本の刀がここにあることになる。だからさ、理屈のうえからいえば、おまえさんたち二十一人を全員、これでしとめられる計算になるわけなんだけどね」

「計算がちがう。おれたちは二十二人いる――」

「え？」

ど、どーん、と雷鳴がとどろいた。稲妻の閃光が空に奔った。宙にある桜の花びらが舞いあがる。根来転寝が動いた。右足で後ろざまに阿修羅を蹴りあげた。

阿修羅が後ろに撥ねあがる。まるで忠実な猟犬のように。――

それを左手の綱で御しながら転寝の右手は頭上にある阿修羅の橇部の一本を抜き取っている。青い閃光が前方斜め下へと走る。赤い血しぶきを曳いて雨に消えた。「騶雨」の一人がどうと斃れる。その喉に阿修羅から抜いた針のように細身の剣が刺さっている。血がシューッと音をたてて噴きあがる。「騶雨」たちがどよめいた。

その血がまだ宙にあるうち、地に落ちる前に、さらに六本をつづけざまに阿修羅から抜いた。それらがまるで矢のように左右に銀光を走らせる。それぞれが「騶雨」の体に吸い込まれていった。まるで魔法のように。ぐふぅっ、あうっ、けぇっ……「騶雨」たちの悲鳴が雨をつんざくようにほとばしった。血が真っ赤に光った。桜を染め、赤い湯気をたちのぼらせる。

これで七本。さらに八本、九本、十本……と剣光が雨を切って血の軌跡を曳いた。ことごとく「騶雨」たちの胴に消えた。右に、左に、「騶雨」たちの体が血煙をたなびかせながら、どう、どう、どう、と斃れていった。すでに十人の「騶雨」が死んだ。このときになってようやく「騶雨」たちは鞘から剣を走らせた。

阿修羅は転寝の頭上を越えて後ろから前方へと半弧をえがいた。垂直に雨を断ち切るように地に向かう。転寝が地を蹴った。阿修羅がまだ宙にあるうち、それをよく左手で御しながら、前方に飛んだ。右手を頭上にかざした。やつぎばやに剣を抜いた。それをほとんど投げるようにして左右に走らせた。あまりに変幻きわまりない動きに「雨」たちは幻惑された。転寝の動きをよく捕捉しきれないうちにさらに五人が雨に消えた。これで十五人を斃した。

残りは六人、いや……かすかに転寝の顔を動揺が走った。七人か。剣が一本足りない……と、転寝の体がまだ宙にあるうちに。――

「きえぇぇーっ」

一人が噴きあがる血しぶきを越えて怪鳥のように飛んできた。両手八双に大小をかまえている。剣光が雨に交叉した。まだ宙にある転寝は体勢的にそれを避け切ることはできないはずだった。物理的に無理なのだ。大小、どちらかを肩口に受けるはずだった。そうはならなかった。転寝は縄を波うたせた。と同時にその体を宙で後ろ一回転させた。阿修羅が舞い戻ってきた。まるでスケートボードのように転寝の足にすっぽり塡まった。それが

盾となって男の大小を跳ね返した。転寝は一回転しながら足下の阿修羅から剣を抜いた。それを阿修羅ごしに男の股間に突き入れた。悲鳴が頭上から聞こえてきた。血が降ってきた。

転寝が着地した。身を低くした、ほとんど四つん這いのようになっていた。血が泥濘のように地面を濡らしていた。阿修羅を履いたまま、それを血に滑らせ、滑走した。「驟雨」たちの足下を。——人は足下を走り抜ける剣をかわすことはできない。剣光が地を擦るように走った。血が糸のように細く雨のなかに軌跡を曳いた。腰を切られ、腿をえぐられ、膝を断ち割られ、足首を切断され、さらに四人が血どろに沈んだ。これで二十人を切った。もう阿修羅は完全に消えていた。残りは二人、しかし剣は転寝が腰にたずさえた一刀のみ。

「きえーっ」

大気を引っさく声が頭上に炸裂した。棟梁格らしい大男が満面を怒りに染めて上段真っ向から剣を振り下ろしてきた。転寝は腰から剣を鞘走らせた。が、鞘から抜く一瞬の間だけ転寝の動きに遅滞が生じた。

戛然！　転寝の剣が折れた。男の剣が転寝の右肩に深々と食い込んだ。血しぶきが壮烈にあがった。が——

「ぐふぅ」

声をあげたのは大男のほうだった。転寝は切られざま、その刀身を右肩に食い込ませたまま、体を極限までまえに丸め、男から刀をもぎ取るのと同時に、その剣尖を男の胸に突き入れたのだった。血が滝のように転寝のうえに流れ落ちてきた。

——これで二十一人……。

驚くべきことに、これまでに要した時間は五分に満たない。それだけの時間で約束の二十一人をすべて斃した。しかし、まだ敵は一人を余している。あの桔梗の紋章を小袖に縫いつけた若い娘だ。すでに小長刀の刃を右上に高くかざしている。その必殺のかまえに雨しぶきが青く光った。これに立ち向かおうにもすでに転寝は重傷を負っている。剣が残っていない。

——碁石才蔵、なにが二十五人にまちがいない、だ。ちがうではないか。かんじんなときに数えまちがいおって……

転寝は苦笑して地を這いまわるばかりである。体から急速に力が抜けていった。目のまえが暗い。せめて滑婆のことを考えながら死のうと思った。が、情けないことに滑婆の顔さえ脳裡に浮かばない。ただ寒いばかりだ。歯がガチガチと鳴った。

と——地をまさぐる手になにか冷たいものが触れた。何か？

「死ねぇ！」

「桔梗」の娘が絶叫を発した。長刀を斜めに振り下ろした。そのとき転寝の体が撥ねあがった。拾った剣を娘の右の乳房に突き刺していた。——もちろん、転寝の知らないことであったが、それは皮膚坊が捨てた剣なのだった。どこからか、われらは成尋衆に負ける、

されど勝つ、という声が聞こえてはこなかったか。——転寝の首が雨のなかを血を曳いて飛んだ。首だけになってもまだ転寝は苦笑を刻んだままだった。

これで桜花、残りは六花を余すのみ。——

九

すでに豪雨と呼ぶにふさわしい。風が咆吼する。稲妻さえもが光る。

これは成尋が修法によって呼んだ雨なのだろうか。死した成尋がなおもその呪いを現世に残すのか。そうかもしれない。あの成尋であればそれぐらいの力があってもふしぎはないからだ。

ゴ、ゴ、ゴ、ゴ……

空に飛びかう春雷の鳴動が、この鳳輦車「叢雲」を小刻みに震わせる。いや、すでに鳳輦車の名に値しないかもしれない。いまはもうまるで動かないのだから。——土台部分は崩壊し、その「無限軌道」も死に絶えたヘビのように、長々と残骸を地に横たえるばかりなのだから。

ここは第二層、涅哩底王が護る「餓鬼堂」——

ほかの堂とちがうのは、ここ第二層には堂の真ん中に人工の池——といっても四間（七メートル強）四方ほどのごく小ぶりのものだが——が設えられていることだ。朱塗り、透かし彫りの欄干の反り橋が渡され、また橋裾には柳までもが植えられ、何とはなしに唐風の印象が強い。

池の面に、ときおり、ポカリ、と泡が浮きあがる。鯉でも泳いでいるのだろうか。その泡が——目に見えるほどではないし、そうと意識せねば気づかないほどであるが——浮きあがる間隔がしだいに縮まっているようだ。浮かんでは消え、浮かんでは消えるのをくり返している……

いたるところに灯火がともされている。それなのに堂内はふしぎに暗い。なにか闇がそれ自体一匹の生き物であって、この堂内に執をとどめ、巣くってでもいるかのように。

——

その反り橋のなかほど、欄干に寄せて、備えつけの石の椅子がある。螺鈿細工が精緻にほどこされてある。

その椅子に、なかば身をひねるようにし、しなやかな片腕を欄干に乗せ、その腕のうえにほおを寄せ、なにか物思いにふけるように、ひとり、佳人が座していた。——もう一方の手に抜き身の刀を持ち、それを膝のうえに置いている。

いや、佳人といっていいかどうか、座しているといっていいかどうか——なぜならその女人はすでに死んでいるからなのだ。

夜叉至、なのだ。

死んでなお夜叉至の美貌に変わりはない。いや、その凄絶な美しさに磨きがかかったようにさえ見える。世に、死んでなお、いや、さらに――美しい女人などありうるだろうか。まさに怪物的な美貌といっていい。

薄暗い堂内に、

「涅哩底王、出てこぬか」

若い女の声が響いた。

一瞬、二瞬、間があって、

「わしを呼ぶのは誰かや」

涅哩底王が堂に姿を現した。――いつもながらに柿色の道服に、とねりこの杖といういでたちである。

滑るように反り橋に近づいた。

あいかわらず、その足どりはふわふわと軽く、まるで数センチ、宙に浮いているかのようである。

「おう、夜叉至か――うえのほうは何やら騒がしいようであるが、なに、成尋様、輪廻孫六、孔雀啄の三人が顔をそろえているのだ、万が一つにも、大事はあるまいて。それに――おう」

唐突に、涅哩底王の言葉がとまった。まろぶように夜叉至のもとに駆け寄った。

「おのしは死んでいるのかや。これはまたどうしたことじゃ、はかなや、かわいそうに、

のう」

夜叉至の横にすわり、その肩を抱き寄せ、かきくどくようにいう。が、体を揺らし、顔に頬ずりしているうち、夜叉至の胸のまえがはだけ、その豊かに美しい双丘があらわになったときから、どうも涅哩底王の様子がおかしくなった。

鼻息が荒くなり、その玉の肌を老醜の手にて揉みしだき、はては老いに涸れはてた唇までをもそこに這わせ――

「わしはな、おのしを好いておったぞ。心の底から好いておったわい」

白髪頭をふりたてて、上ずった声でそうあえぐのも浅ましい。いかに超絶的に美しいからといって、すでに死んでいる女を相手にして。あまつさえ――

「ああ」

ふいに涅哩底王が魂消るような悲鳴をあげた。あまつさえ、撫でさする涅哩底王の手の下で、その美しい肌がズルッと剝けたのだ。その下から肉があらわになる。それも腐肉が。その、うじゃじゃけた肉に蛆が群れていた。いや、蛆ばかりではなしに、目には見えないが、目に見えないだけになおさらおぞましい何かがゾロゾロとうごめいているのが実感された。

そして――ああ、髪がぞろりと抜け落ちた。目玉がどろりと溶け落ちた。鼻が腐汁をしたたらせながらもげ落ちた……なまじ夜叉至が美貌を誇っていただけに、その崩壊の凄まじさは筆舌につくしがたい。

「わあぁぁ――」

さしもの涅哩底王が悲鳴をあげながら逃げだそうとした。転び、橋を這う。その一瞬、歳相応に、といおうか、無防備に、隙だらけの姿をさらけ出した。いまの涅哩底王はもうどこにでもいる老いぼれにすぎなかった。

その瞬間、水音をたて、水しぶきを全身にはねながら、二人の女が、池から欄干に飛びあがってきたのだ。涙と現だ。ふたりながら手に一刀をたずさえている。

「死ねい、涅哩底王――」

叫びざま、頭上、両手に、太刀を逆手に持ち、欄干からあいついで涅哩底王に向かって身をおどらせた。

「ぎゃぁぁあ」

涅哩底王は絶叫した。胸と腹、二刀に串刺しにされ、バタバタと手足を振りまわしたが、もはや逃げようにも逃げられない。おのが血煙のなかで悶えるほかはない。

「往生しろ、老いぼれ」

二人はさらに涅哩底王の胴を深々とえぐった。――さすがに涅哩底王はもう動かなくなった。

「やった、涅哩底王をやっつけた――」

「うわー、信じらんない、凄い」

二人、口ごもごもに興奮した声をあげる。――さっき涅哩底王を呼び出したのは涙なのだった。

二人の声がうわずっているのは、そうして、まざまざ目のあたりにしながら、それでもなお、こともあろうに自分たちがあの怪物・涅哩底王をしとめることができようなどとは信じられなかったからだろう。

涙の「胡蝶」は、蜩七弦の「松籟」同様、虫たちを呼びよせる力がある。というか、もともとは涙のなみだに含まれたフェロモン成分がそもそもの発端だったのだ。

涙が躁的にうわずった声でいう。

「わたしは死人の体が腐るのは、なにか虫の力が働くからではないか、と思った。わたしのなみだを使えば、死体の腐敗をいっそう早めることができるのではないか、と。ここに入るときに、夜叉至の死体を見て、これを利用しない手はないと思うた。これほどまでに美しい死体が、目のまえで急速に腐敗するのを見れば、いかに怪物、化け物の涅哩底王であろうと、かならずや度を失うに相違ない。隙が生まれるに相違ない。されば、その隙をついて――」

が、その、いつにない涙の饒舌は、冷えびえとしたこの一言で、とどめを刺されたのだった。

「そうはなるまいなあ」

と――

池の表面が激しく泡だち、たたきつけるような炸裂音のなか――透かし彫り細工の欄干

の反り橋から、男顔、女顔の二頭に、それぞれ四手、戟、刀、月輪、日輪を持ち、身色青黒く、頭上に蛇頭を現じた男女交合像が妖しく身をうねらせながら、ふわー、と飛び出してきた。

涅哩底王の超絶忍法「魔獣召喚」。——ただし、いつもと多少、おもむきがちがうのは、その男女交合像の女身の胴に深々と傷あとが残っていることだ。それも、ちょうど二人が涅哩底王を刺した——と思った——そこと同じ部位に。

「うわーっ」

男女交合像は、涙の胴を戟で胴切りにし、涙がきりきりと舞っているうちに、返す戟で現の胸を突き刺した。血が噴きあがる。それで魔獣は消える……

つづけざまに水音をたてて、ふたりの女は水に落ちた。

「ホッ、ホッ、ホッ、愚かなり——わしがことを、そのような児戯に類するたくらみにたばかられると本気で思うたかや。見よや、おのしらが刺した傷は、すべて魔獣が引き受けてくれたわい。わしはかくのごとく無傷である——」

涅哩底王の笑い声に重なって、

「涙——」

現が悲鳴をあげた。血が水にひろがっていった。現のほうが重傷のようだ。

「現、かわいそうに——」

涙は泣いた。

何かが堂内にひろがった。何かが——いや、それはいかなる男をも引き寄せ、虜にせずにはおかないフェロモンなのだ。えもいわれぬ香気のようなものが堂にひろがって——

背後から、べしゃべしゃ、と湿った音が聞こえてきた。振り返った涅哩底王の目に、あの美しい夜叉至が、どろどろの腐汁のようなものになりはてて、骨だけを残し、橋に流れ落ちていくのが映った。腐臭が、ぞわっ、とにおい立った。

入り口にぼんやり人影がさした。

蜩七弦だ。

まるで魂を抜かれたように呆然として突っ立っている。

「おう、蜩七弦かや。おまえがいろいろと教えてくれたおかげで、ほれ、このように雌狐ふたり退治ることができたわい」

涅哩底王がそういうのに応じるように、

「外に、なにか乳のようなものが地面にこぼれ落ちていた。その乳は、涙のなみだと同じ効があり、しかもその効き目は倍の強さを持つようであった。おれにも多少の心得はあるでな。それぐらいはわかった」

七弦が虚脱したような声でいう。

「何でこんなものが落ちていたものか、もちろんそれはわからぬが……薬籠に拾い集めながらおれは考えた。涙の『胡蝶』、おれの『松籟』は、人の色情を亢進させ、虫の群れをあやつる力を持つが——二人の力があわさり、しかもそれにこの乳のようなものの力を加

えれば、もしかしたら人間以外のものをあやつり、その力を増すこともできるのではないか、と……」

「人間以外のもの？　はて、何を？」

「おまえが召喚する魔獣を――」

七弦はかすかに笑ったようだ。

「この乳のようなもののおかげで、おれの『松籟』の力も増したように思う。おれは合掌観音のくびきからどうにか逃れたよ。それどころか――」

「何をらちもないことを……」

もとより涅哩底王は蜩七弦の言など頭から問題にしていない。ホッ、ホッ、と笑いながら、歌うように言葉をつづける。

「おのしにも女たちのあとを追って死出の旅路についてもらうことにしようかい。二人ながら、なかなかの器量、それをあたら死に追いやり、自分ばかりが生き延びたのでは、おのしも目覚めが悪かろう。気の毒でもあるが、こればかりはやむをえぬ。前世からの因縁であるじゃによって――」

涅哩底王はニュッと笑った。すでに忍法「魔獣召喚」を起動させている……

まるでばりばりと落雷するような「魔獣召喚」の妖術に、ふたたび、あの男女交合像が現れ出でて、その四手に、戟をふるい、刀をふるったが――その対象は蜩七弦にあらずして、いや、その女身像にしてからがすでにあの合掌観音に変身していて、我れとわが身にそれを振りおろしたのだ。

涅哩底王がおのが身がわりに女神像に残した傷がある。観音はそれと同じ部位にあるわが身の傷に、ざくりと刀を振り下ろし、それをさらにひろげ、交合像のその接合部分を切り放したのだった。

すでに観音像は、七弦の「松籟」と、涙の「胡蝶」の両方が合する力にあやつられている。二人が何年もの長きにわたって、ともに協力し、術を強化してきた、その効果がここにきて発揮されることになった。

「七弦！」

「涙！」

しかも、さらには曾肥坊の乳液の力までもが加わっている。それは涅哩底王が地上に召喚した魔物までをも操ることを可能にした。

「わあぁぁ」

観音像は涅哩底王に向かう。また変身した。すでに阿修羅神に変化していた。花のかわりに剣を持っていた。涅哩底王は身をひるがえして逃げようとはしたのだ。しかし間にあわなかった。涅哩底王は背後からざっくり刀で頭を割られていた。

「何の、わし一人が死ぬるものかよ」

涅哩底王が断末魔のおめきをあげた。

そのときには半身残された男身像が蜩七弦をその戟で真っ向から唐竹割りにしている。

壮絶に血を噴きあげながら、しかし七弦は高らかに笑い声をあげていた。そのまのびした公家顔がさらに長く、長くなり、やがて凍てついた。
「涙、楽しかったぜ」
その言葉どおりに楽しげに死んだ。
血に染まった水のなかで、
「現――スカーフを開きな」
涙がそう優しく囁いた。
「うん」
現はスカーフを外した。それを水に放した。
二人は手をつないで水に浮かんだ。
彼女たちの体のうえに窓から舞い込む桜の花びらが散った。
これはもしかしたら死ぬまぎわに見た涙の幻想だったかもしれない。
しかし、たしかに涙は、自分が現と並んで、スカーフのなかに引き寄せられるのを感じた。
オフィーリアのように。
涙と現――
ふたり、美しいオフィーリアとなって、花に飾られ、愛に微笑しながら、死の川を安らかに下っていった。

桜花、これで残るは三花のみ――

十

豪雨、血を洗い、骨を流し、沛然と降りしきる。――
そのなかにあって根来転寝の「一世一代の大忍法」が発動した。
「桜花」は無限軌道の残骸のうえにある。一階の屋根よりもうすこし高いところ、なかば下端を円塔の壁に凭せかけるようにして、とまっている――というか、うち捨てられているといったほうがいいかもしれない。すでに車輪が壊れ、もう「桜花」は自力では一センチたりとも動くことができないからだ。
その意味で、やはり無限軌道を、甲羅式部の捨て身の覚悟によって破壊された「叢雲」と相似形をなしているといえるかもしれない。いずれもいまは跛行の境遇にある。
が――
少なくとも「桜花」のほうはまだ生きていた。
見よ、いま――その天蓋のうえにある鳳凰の翼が上下に羽ばたいている。雨をはじき、水しぶきに白く縁どられながら、あたかも生あるかのように。――
子細に見れば、その両翼に、綱が渡され、結ばれていて、一方が引き、もう一方が送り

して、じりじりと「桜花」を「叢雲」のほうに引き寄せているのがわかるだろう。
そういえば根来転寝は八郎に「叢雲」の勾欄に綱をぶら下げてくれと依頼したのではなかったか。四層から五層にあがる階段の途中に窓がある。八郎はそこを上がるさいに、成尋衆たちが見てないのを確かめたうえで、そこに縄を結び、両端を下に投じたのだった。そして根来転寝は「桜花」を「叢雲」に乗りつけたさい、「驟雨」が到来するまえに、その縄の両端を鳳凰の翼に縛りつけた。しかるべく細工を残した。
その細工がいま効を奏して——
「桜花」は円塔に引き寄せられ、ついにはそのなかば壊れた車輪を、カタ、カタ、と鳴らしながら、じわじわと壁を上りはじめたのだった。
鳳凰の翼が動きはじめたのも機械仕掛(からくり)なら、「桜花」の上層に積載された炸薬——滑姿の貯蔵庫から大量に拝借した——が時限点火されるようになっているのも機械仕掛だ。
その爆発は「叢雲」を徹底して破壊せずにはおかないだろう。
根来転寝の面目躍如、といったところだが、それを誇ろうにも、かんじんの当人がすでに死んでいるのを如何せん。——

「化け物、おまえの相手はおれだ。こちらを見ろ——」
よろぼい出た八郎の姿を見て、
「ほう、まだ動けるのか」

孔雀啄が意外そうに、しかし、どこか酔ったようにいった。
八郎とは一度刃を交わしたことがある。そのときには孔雀啄はほおを切られ、八郎はひたいを切られた。彼ほどの剛毅の者であれば、いま一度戦って、勝敗を決したいという思いがあったとしてもふしぎはない。その声にかすかに喜悦の響きがあった。
「こちらを向け、というのがわからぬか、孔雀啄——」
八郎はスラリと刀を引き抜いた。ただ、孔雀啄には、こちらを向け、といっておきながら、自分は左手で顔を押さえたのはどうしたことか。
「望むところだ」
孔雀啄は笑い、自分も刀を抜いて、ふといぶかしげな顔になった。
「どうした？　なぜ目を隠している。そんなことではうぬの得意な矛眼術が使えぬではないか」
「おのれを斃すのに矛眼術を使う必要などない。この一刀があれば十分だ」
「ふん、そうか。まあ、どちらでもよい。いまのおれには時間が勿体ない。こちらは遠慮なしに『時逆鉾』を使わせてもらうことにするぞ」
孔雀啄はそういうと、刀を上段にかまえ、来い、来い、来ぬかや、とからかうようにいう。
「おれの存じよりが、な」
八郎は静かにいう。

「死ぬまえにこういい残した――われらは成尋衆に負ける、されど勝つ、と……」
「すりゃ、何のことだ？」
「わからぬか」
「わかりとうもない」
「されば、よし――参る」
八郎は刀を引っさげて孔雀に向かって走った。あいかわらず左手で顔を覆っている不自然きわまりない姿のままで。――
孔雀啄が「時逆鉾」を発動させるのがはっきり感じられた。何というか、自分のまわりで時間が弛緩するようなふしぎな崩落感に似たものを覚えた。体がどこか後方に無限に引きずり込まれていくような感覚だ。
が、八郎に躊躇はなかった。このまま決闘に突き進むほかはない。
「おう！」
「えやあ！」
二人の気合が交叉した。
が、交叉したのは気合のみで、双剣がまじわることはなかった。それというのも、八郎は走りながら、顔から左手を外し、自分の右目に充てがっていた明滅坊の右目をあらわにさらけ出したからだ。
「叢雲」に足を踏み入れるまえに、外で拾った。――もっとも八郎には、誰か忍法僧のものであることは想像できても、それが明滅坊の眼球であることも、どのような効を持つのかも、すべて知りようがないことであった。ただ、こころみに、それを自分の目に当て、そのふしぎな力を推測するのみにとどまった。

いや、そんなことをしなくても、長針に刺され、眼窩からえぐり出されても、まだみずみずと潤い、輝きを失ってはいないそのことを見れば、それがとうてい常人のものでありえないのは明らかではあったが。――その長針に残された扇の切れ端から、この忍法僧が戦った相手は孔雀啄であろうと、およその想像がついた。
だから、それを目に当て、孔雀啄と戦うことにした。たしかに孔雀啄の「時逆鉾」は時間を逆行させるが、明滅坊の目をもってすれば、みずからを加速させ、その失われた時間を一瞬のうちにさかのぼるのは容易なことだからだ。結果として、孔雀啄の「時逆鉾」はなかったも同然のものとなる。――そうなれば八郎の剣のほうが先に孔雀啄のもとに届くのが当然であった。
「ぐふう！」
孔雀啄は自分の身に何が起こったのか理解できなかったろう。脳天から唐竹割りにされながら、よもや自分の「時逆鉾」が無効にされることがあろうなどとは、夢にも思わなかったにちがいない。
「そして――」八郎がいう。「それはおまえの存じよりの者でもある」
「すりゃ、何のことだ」

孔雀はからくもそうくり返し、かろうじて意地を見せはしたが——それもそこまでだった。

その目を、カッ、と見ひらき、八郎を凝視したまま、ヨロヨロと後ずさり、信長の足下にドッと倒れる。

「信長さまぁ——」

孔雀啄は必死の声をあげた。

「なにとぞご助力を——ご助力を」

が、信長は路傍の石を見るほどにも、孔雀に関心を払おうとはしなかった。

「そちは名を何と申す?」

「は?」

「申せ」

「こ、甲賀八郎にてございます」

「甲賀? 忍者か」

「は……」

「忍者は気にいらぬが、まあ、よかろう。この者よりはましであろう」

信長は足下に横たわる孔雀啄に冷たい一瞥を投げかけて、

「余はこれより外に出る。そちにつゆ払いを申しつける。案内(あない)せい!」

「はーっ」

日輪のように燃えさかり、千古の古木のようにそびえたつ、圧倒的な威だ。誰であれ、その言に逆らうのはむずかしい。思わず膝を屈しそうになったが、かろうじてそれを踏みとどまった。

その火山のような威風にうたれながらも、八郎は懸命にそれに耐え、必死に気力を振りしぼりながら、

「恐れながらおうかがいいたします。外にお出になり、何をなされるご所存であらせられましょうや」

「知れたことよ」

信長の返答は明快だった。

「余の事業はいまだ志なかばである。これに目を入れ、鼻を入れねば、わがことあい成らぬ。まずは中国の毛利、北条、伊達(だて)、長宗我部(ちょうそかべ)を征伐し、そのうえで——」

「そのうえで?」

「万里の波濤を蹴たてて、兵を出し、朝鮮国を足がかりに、まずは明を落とし、印度のゴア、マラッカ、ルソンを攻略する所存である——」

「そ、そのようなことをすれば……」八郎の声が弱々しくかすれた。「人が大勢死にまする」

「それが何だというのか——いま一度申しつける、つゆ払いせよ。案内せえ」

——これは。

心を奮いたたせた。必死に自分にいい聞かせた。

——何としてもまた冥土に戻ってもらわねばならぬ。

いかに、大精神力、大運命力の持ち主であろうと、信長は生前に変わらず、いや、再誕なったいまはなおさらのこと、まさに「大魔王」そのものであり、これをふたたび地に解き放てば、日本国は屍山血河をなし、無残な焦土ならざるをえないであろう。

——そうはさせぬ。いや、そうさせてはならぬ……

その決意はある。あるにはあるのだが……

火炎を背に負うて、大不動明王のように立ちはだかる信長の姿を目のあたりにすると、どうにも気力が萎え、意志がくじけてしまうのだ。——これは、はたして人であろうか、とさえ疑いたくなってしまう。おれと同じ人であるのか。

あまりに人間としての迫力、存在感がちがいすぎるからだ。その持って生まれた光輝が隔絶してちがいすぎるからだ……これをどう克服すればいいのか。そもそも克服しうることなのか。

あの成尋のような怪物がたくらんだことである。信長をこの地上に闊歩するままにまかせれば、いずれ、よからぬ結果を招くことになるのは火を見るよりも明らかだろう。その一事のみをもってしても、信長を何としても斃さねばならないのは明白であった。しかし……

——そう、しかし、おれに信長を殺すことができるのか。

八郎の懊悩は深い。信長を見る目にありありと恐怖の色が濃かった。

が、それを見る信長の目はあくまでも冷ややかであり、フッ、と薄く笑って、

「これは余の目が狂うたか。しょせん余に仕えうべき人材ではなかったか」

そう吐き捨てるようにいうと、スッ、と滑るように足を進めてきて、下郎、すざりおれい、の一声を発して、その刀を上段からじつに無造作に振りおろした。

「あーっ」

それまで固唾をのむように一部始終を見ていた響と滑婆の二人が悲痛な声を発した。

甲賀の棟梁、甲賀八郎ほどの者が、さして兵法の心得があろうとも思われぬ信長に、じつにあっさりと、あたかも大根でも切るように切られてしまったのだ。

八郎は肩から血煙をあげてその場に斃れ伏してしまう。

まさに人間としての迫力のちがいからとしかいいようがない。八郎は信長をまえにすると、まるでふぬけのように自分を失ってしまうらしい。

ただでさえ八郎は響の盾眼術によって怪我を負っている。そのうえ信長にそのように切られたのではもはや生還の望みを断たれてしまうのではないか。

「孔雀啄——この者のとどめを刺せ。目ざわりである」

信長の号令に、

「は、ただいま、ただいま——」

歓喜に震えて、血まみれの孔雀啄が、ほうほうの体で、床を這う。その秀麗な顔に、邪

響は念じた。それこそ全身を祈禱に変えて一心に祈った。これこそが伊賀女忍棟梁の響の最大の忍法であるかもしれない。すなわち冥界から、敬してやまない、あるいは愛してやまない死者を呼び出すことが――

稲光がひらめいた。天地をどよもした。その閃光と、轟音のなかに、いまは三人となった打ち掛け姿の高貴なる女性(にょしょう)たちの姿が浮かんだ。その身分からではなしに、その精神性ゆえに、世にもまれなる高貴な女性たち――

「お江様、大御台所様――」

滑姿が歓喜の声を張りあげた。

が、怪奇は、いや、奇跡はそれのみにとどまらなかった。

まずは大御台所、淀君がその美しい声をたからかに張りあげ、

「お母上様」

と呼び、つづいて高台院様が、

「お市の方様――」

と呼んだのだ。

また稲光が炸裂する。

その蒼々(そうそう)とした閃光のなかに、ほかの誰よりも美しいその人の姿がもうろうと浮かびあがった。

その人を見て、それまで豪宕無比、何物にも動じなかった信長が、はじめて動揺の色をあらわしたのだ。

「おお、市、市――」

この人物のこれほどまでに悲痛な声を誰か聞いた者がいようか。信長と、お市の方との間にはいったい何があったのか。

「許せ、信長を許せ」

お市の方は「妹」ということになっているが、妹ということで家に入れた、おそらくは親戚(しんせき)の子女だったのではないか、という説もある。要するに、最初から政略結婚のための「妹」ではあったのだろうが、それだけに絶世の美女だったことは事実のようである。

と、そのとき――

ふいに護摩炉の炎がパッと明るく火力を増したのだ。炎が天井を舐めんばかりの高さにまで燃えあがった。こうべを垂れるがごときに、その炎が天井すれすれのところで折れまがり、瀑布(ばくふ)のように音をたてて亀裂になだれ落ちていった。その炎の瀑布を――

魔鳥のように翔(か)けあがってくる真っ赤な影が――それも二つ――あった。この場合、真っ赤な、というのは、たんに火あかりに映えているからばかりではなくて、文字どおり、二人ながら頭から蘇芳をあびたように真っ赤なのだ。それも道理、彼らはいずれも深手を負っていて、全身を血にまみれさせているのだった。

一人は甲賀八郎、もう一人は孔雀啄――二人の剣に花びらが降りかかり、ふわり、と舞いあがった。白光が交叉した。桜の花びらが血に染まった。ぐわっ、とのけぞり、血を撒

き散らしながら、亀裂に落ちていったのは、孔雀啄のほうだった。
八郎は亀裂の縁に残った。
「妹よ」
八郎がそう絶叫した。
これまで八郎が響のことを「妹」と呼んだことは一度もない。そのことに八郎の決意と、諦念、それにもしかしたら深い絶望をすらうかがうことができるかもしれない。しかし、その絶望には、すべてを吹っきった人間にのみ可能な、ある種の明朗さがあった。
「盾眼術を発動せよ。『桜花』を現出せしめよ。おれも矛眼術を発動させる。『有情』を現出させる。信長様にオン妹君をおあきらめいただく。この世の野望も捨てていただく。そのためには、おれもおまえを――」
八郎はそれを最後までいい終えなかった。もはや、それだけの力が残されていなかったのか。それとも、いうに耐えなかったのか。ただ、一刀ひっさげて、信長に向かう八郎の背には万感の思いが宿っていた。
「あにさま――」
響が叫んだ。
そう叫ぶことで彼女のなかでも何かが滅んだ。ただ死灰だけが層々と胸に降り積もるのを覚えていた。
「市……市……」

信長はただ茫乎とした目を「妹」に向けて、うわごとのようにそればかりをくり返していた。
「ごめん」
八郎に真っ向から切られて、はじめて自分のいまの状況に気がついたようである。
一瞬、堂内を見わたすと、
「さきの坊主は、この堂には、金、銀、財宝が蔵されているとそう申したが――かくなってはそれも一銭たりともつかえぬな」
そう皮肉につぶやいて、どう、と斃れ伏した八郎を見やると、おそらく生前にはこの人物が一度たりとも人に見せなかったであろう諧謔味を発揮して、
「是非もなし、いや、ぜにもなし――」
といい、笑い、炎と煙のなかに消えていった……
「おとし、また一段と女っぷりが上がったようではないか」
「おとしは肌がおとろえてございます」
「されば極楽に連れつかわそう。あそこに参れば、肌はつるつるとさながら幼女のごとし――」
「もったいのうございます。されど、おとしは大勢の命を殺めました。極楽に出入りかなうでございましょうか」

「さればこそ、わたしがおまえを極楽に落としつかわそうというのではないか。前世ではいかい世話になった。今度はわたしがおまえを落としつかわす番であろうほどに、のう」
「もったいのうございます、もったいのうございます、大御台所様――」
滑婆の目尻から清らかな涙がスッとしたたり落ちた。微笑みながら――死んだ。

響の「桜花」と八郎の「有情」がこれほど完全に合したことはない。その異時空間がこれほどまでに巨大なものになったことはない。八郎が響を忘れるためには、これほどまでに巨大な「装置」を必要としたのだ。それほどまでに二人の結びつきは強かったのだった。その巨大な異時空間が、ゴ、ゴ、ゴ、と轟音を軋ませながら、この世のからくりを回転させていった。もしかしたら――

響の「桜花」、八郎の「有情」が合成され、そこに生じる異時空間とは、多次元宇宙につながるものであるかもしれない。彼ら忍者たちは、自分ではそうと意識せずに、この世に軸足を、べつの宇宙に片足を置いた存在なのかもしれない。そうとでも考えなければ、彼らのあれほどまでの異能は説明がつかないのではないか。が、いずれにせよ、この世の誰にももはやそれを解明するすべはない。なぜなら、すでにこの宇宙は回転を終え、べつの宇宙に入れ替わってしまったからだ。

すべては忘却の淵に沈んだ。なかったことにされてしまった――いや、ほんとうにそうだろうか？

十一

高野山には徳川家霊台がある。

興山寺東照宮とはべつに、大徳院東照宮として、三代家光が建立したもので、史実によれば、寛永十年（一六三三）頃に着工され、寛永二十年（一六四三）に完成を見た、とある。

右が東照宮家康公廟所、左が台徳院秀忠公廟所、唯一の違いは家康公廟所のほうには鳥居があるぐらいのことで、ほとんどうり二つの建物といっていい。

この大徳院東照宮は現代も変わらず見ることができる。

史料によれば、家光の祖父家康を崇拝すること、ほとんど神に接するがごとく、とある。秀忠については、そこまでの記録は残っていないから、祖父に対するほどには、父を崇拝してはいなかったと考えるのが自然だろう。

が、それにしては、この大徳院東照宮の造営に不審なところがある、と問題提示する専門家もいるのだという。

どうして、この大徳院にかぎって、二つの廟をそっくり相似形にしたのか、というのがその疑問の主旨といっていい。

それまでの家光であれば、臆面もなく祖父への敬愛の念を強調したはずであり、当然の

ことながら、家康廟のほうを秀忠廟よりも大きくするか、そうでなければ、より贅を凝らしたはずである、というのだ。

それがこの高野山にかぎって、まるで家康廟により敬意を払っていると見なされるのを恐れているかのように、両廟をまったくの相似形にすることに固執しているかに見えるのはどうしてか、というのである。

もちろん、学術的に根拠づけられるような疑問ではない。いわば人の感覚に照らしての疑問であって、学問的に問題とされるようなことではないのであるが。——

高野山に「おとし茶屋」という茶屋がある。

もう何年、いや、何十年つづいているのか、参詣人はかならず立ち寄るとさえいわれているほどの名物茶屋である。

おかみさんの名はお響さんという。

それほど若いはずはないのに、ふしぎなほどみずみずしく若々しい女性である。

まだ独身だという。

女の子たちをじつに上手に使いこなし、商売を切りまわすその才覚といい、人柄のよさといい、色香のおとろえぬ容貌といい、おせっかいな人間は彼女が独身なのをふしぎに思い、悔しがったりもする。

ときに、結婚話を持ち込んだりする人もいるのだが、

「ありがとうございます——でも、わたし、待ってる人がいるんです」

「待ってる人？　誰をだね」

「それが自分でもわからないんですよ。おかしいけど、ほんとうなんです」

お響さんはコロコロ笑う。

そんなふうなので、そのうち誰も見合いの話を持ってこないようになった。

そんなお響さんだが、三日に一度は、村の外れにある墓地への墓まいりを欠かさない。

墓地、といっても無縁墓地で、ただ四十の土饅頭が盛られているだけなのだが。——誰の墓か、と問うと、知らない、と答える。ただ妙に気になって、参らずにいられないのだという。

村の誰もがお響さんのことが大好きだ。幸せになってもらいたいと願っている。

でも、春の桜咲きごろ、村外れの大きな桜の木の下で、いつまでも人待ち顔にたたずんでいるお響さんの姿を見ると、ほんとうに幸せなんだろうか、と心配になってしまう。

この春も——

やはりお響婆さんは、桜の木の下にたたずみ、誰かが来るのを待っているかのように、いつまでも街道を眺めている。

子供たちが、わあい、と声をあげながら、すぐ横を駆け抜けていった。

「ズルいよ、今度はおいらが根来転寝になるんだい」

「わたしは滑婆よ」
「え……」
お響婆さんは子供たちの行く手を見つめる。けれどももう子供たちの姿は舞い散る桜に隠れて見ることができない。——ほんとうにあの子たちはいたんだろうか。すべては桜花が見せたつかのまの幻影ではなかったろうか。
——わたしもあんなふうに遊んだことがある……
よく思い出せないが、たしかにあったような気がする。
ふと空を仰いだ。
青空に桜の花びらが帯のように流れている。そのなかを——
甲賀・伊賀忍法合戦で果てた二十忍……それに甲賀五宝連の四人、伊賀五花撰の四人、忍法僧の四人、若い伊賀甲賀連合の八人、計二十忍……
四十人の忍者たちが歩み去っていったように感じる。
——それにもう一人、わたしが待っている人がいる。
でも、あらためてそのことを考えようとすると、何も思い出せない自分がいる。茫漠とした記憶の彼方にただ桜の花だけが燦然と輝いている。
「ねえ、お婆さん、お母さんがいってたけど、この桜の木は、いつまでも若いんだって、絶対に枯れないんだって——だから、お婆さんは、この桜の木の下で待ちあわせをしてるんだって、それ、ホント？　——」
「ホントさ。この桜は絶対に死なないんだよ」
「ふーん、ホントかな？　それなら、どうしてこの桜を『天膳桜』と呼ぶの？」
「さあ、どうしてかね。昔からそう呼んでるんだけどね——」
彼女は桜を振りあおぐ。その若々しく、美しい顔に、いつまでも花びら、燦、燦、と降りそそぐ……

講談社 ライオ

〈著者紹介〉

山田正紀（やまだ・まさき）

1974年、『神狩り』（早川書房）でデビュー、同作は第6回星雲賞日本短編部門を受賞した。『最後の敵』（徳間書店）で第3回日本SF大賞を受賞、『ミステリ・オペラ』（早川書房）で第2回本格ミステリ大賞と第55回日本推理作家協会賞を受賞。「神獣聖戦シリーズ」「五感推理シリーズ」など人気作が多数ある。

桜花忍法帖（おうかにんぽうちょう）
バジリスク新章（しんしょう）（下）

2015年12月16日　第1刷発行　　定価はカバーに表示してあります

著者……山田正紀（やまだまさき）
©MASAKI YAMADA 2015, Printed in Japan
発行者……鈴木　哲
発行所……株式会社 講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
編集03-5395-3506
販売03-5395-5817
業務03-5395-3615

本文データ制作……講談社デジタル製作部
印刷……株式会社廣済堂
製本……株式会社若林製本工場
カバー印刷……慶昌堂印刷株式会社
装丁フォーマット……ムシカゴグラフィクス
本文フォーマット……next door design

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸第三出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-294008-5　N.D.C.913　314p　15cm

この作品は、書き下ろしです。

講談社 ラノベ

天野頌子

僕と死神の黒い糸（ボディガード）

イラスト
佐原ミズ

世界を動かす大富豪の家に生まれ、その立場上、身の危険にさらされることが多い、十歳の御曹司・海堂凛。二年前に起きた両親の死亡事故から孤独を深めていたが、「ある秘密」を抱えた元SPのボディガード・永瀬の登場によって、少しずつ変化が訪れる。死と隣り合わせの凛と、彼を守る最強の死神。不思議な黒い糸で結ばれた二人は、残酷な運命へと立ち向かっていく……。

講談社 ラノベ

山田正紀

桜花忍法帖
バジリスク新章（上）

イラスト
せがわまさき

天下の座を争い歴史の裏側で行われた甲賀vs.伊賀の忍法殺戮合戦は双方全滅という血に塗れた結末で幕を閉じた。十年の時が過ぎ、寛永三年、再び甲賀伊賀の精鋭が結集する。甲賀五宝連を束ねる矛眼術を操る少年、甲賀八郎。伊賀五花撰を率いる盾眼術使いの少女、伊賀響。運命の双子である二人は、成尋衆と名乗る、人外の力を操る正体不明の集団との戦いに巻き込まれていく——。

講談社 タイガ

似鳥 鶏

シャーロック・ホームズの不均衡

イラスト
丹地陽子

両親を殺人事件で亡くした天野直人・七海の兄妹は、養父なる人物に呼ばれ、長野山中のペンションを訪れた。待ち受けていたのは絞殺事件と、関係者全員にアリバイが成立する不可能状況！推理の果てに真実を手にした二人に、諜報機関が迫る。名探偵の遺伝子群を持つ者は、その推理力・問題解決能力から、世界経済の鍵を握る存在として、国際的な争奪戦が行われていたのだ……！

講談社 タイガ

君と時計シリーズ

綾崎 隼

君と時計と嘘の塔

第一幕

イラスト
pomodorosa

大好きな女の子が死んでしまった——という悪夢を見た朝から、すべては始まった。高校の教室に入った綜士は、ある違和感を覚える。唯一の親友がこの世界から消え、その事実に誰ひとり気付いていなかったのだ。綜士の異変を察知したのは『時計部』なる部活を作り時空の歪みを追いかける先輩・草薙千歳と、破天荒な同級生・鈴鹿雛美。新時代の青春タイムリープ・ミステリ、開幕！

講談社
タイガ

《最新刊》

アンデッドガール・マーダーファルス 1　青崎有吾

早くも漫画化決定！　怪物事件専門の探偵・〝鳥籠使い〟が不死身のはずの吸血鬼殺害事件に挑む！　悪夢のような笑劇（ファルス）……ここに開幕！

異端審問ラボ　魔女の事件簿1　高里椎奈

変わり者研究者三人が偶然目撃した殺人未遂事件。この一件をきっかけに入手した「一冊の文献」と「植物の化石」が禁断の扉をあけてしまう。

ぺてん師と空気男と美少年　西尾維新

私立指輪学園で暗躍する美少年探偵団。団長・双頭院学はじめ個性的なメンバー六人が集う。新たな依頼が探偵団をライバル校に誘（いざな）って……!?

桜花忍法帖　バジリスク新章（下）　山田正紀

一度は退いたはずの異形の忍者集団・成尋衆が再び現世に現れた。この世に平穏を取り戻すため、甲賀五宝連と伊賀五花撰は死地へ挑む。